

ESD
for

2030

YOKOHAMA

2021年度

横浜市ESD推進コンソーシアム実践報告書

2022年2月

横浜市教育委員会

2021年度 横浜市ESD推進コンソーシアム実践報告書

横浜市ユネスコスクールESD推進校実践報告

令和3年度 文部科学省SDGs達成の担い手育成（ESD）推進事業



まずは1ページおめくりください



編集・発行／横浜市教育委員会事務局小中学校企画課
〒231-0005 横浜市中区本町6-50-10 横浜市ESD推進コンソーシアム
E-mail:ky-esd@city.yokohama.jp 2022年2月

この冊子は森林保全を目的として適切に管理された木材を使用したFSC認証紙を使用しています。

2022年2月 横浜市教育委員会

【ESDオンライン交流報告会（児童生徒の部）での1場面】

【A小学校6年生 児童】
来年は、総合的な学習の時間で
どんなことをやりたいですか？



【B小学校5年生 児童】
総合的な学習の時間で何をやるかは6年生になって
から決めることだけど、自分は人の役に立てることを
やりたいです。

【C中学校 生徒】
国連との5日間の交流で、
一番印象に残ったことは何ですか？



【D中学校 生徒（ピースメッセンジャー）】
国連国際学校では、100か国以上の国籍をもった子どもたちが
学んでいて、皆違うことが当たり前という環境が印象に残り、
素敵なことだと思いました。

2020年に世界を覆ったCOVID-19パンデミックは、グローバル感染症の脅威に加え、数多くの私たちの周りにあった問題を浮かび上がらせました。そして、経済のグローバル化が進み、国を超えた人の往来が増えたことで感染症は広がりやすくなっています。その感染症は健康を守るための社会システムのあり方、多様な学習環境へのアクセス、働き方、貧困や格差などの社会問題を浮かび上がらせています。このように、今、私たちの前にある問題は、いずれも環境、社会、経済が相互に影響しあう“複雑な問題”となっていることが実感を持って感じられるようになってきたとも言えるでしょう。

SDGsの主題は「持続可能な世界」の実現ですが、現在のように厳しい問題も多く直面し、経済社会の状況が変化する中で、地域が、ビジネス、学校が「持続可能である」とはどういうことなのか、そこから考え直すべき時が来ています。UNESCOのレポート『教育のための社会契約』でも指摘がなされているように、何をしないのか、何を続けたいか、どうありたいのか、を問う時代となりました。多くの人が気づいているのは、20世紀の経済社会の考え方のままでは持続できないということです。まさに、各自が社会・情動的知性(SEI)を醸成しながら、自身のあり方(I, Be)、市民性のあり方(We, Be)が問われているとも言えるでしょう。

横浜市では、2016年度に文部科学省「グローバル人材の育成に向けたESDの推進事業」の採択を受けて以来、「横浜市ESD推進コンソーシアム」を立ち上げ、多様な学校とともに持続可能な開発のための教育(ESD)の充実に向けて連携・協働を進めてきました。2021年度からは、文部科学省「SDGs達成の担い手育成(ESD)推進事業」(教育(学習)効果の評価・普及)の採択を受け、学びの可視化やプログラムの評価に挑んできました。COVID-19パンデミックの影響のもとで、学校運営、学級運営が厳しい状況の中でも、本報告書を通してさまざまなチャレンジを窺うことができます。

とりわけ、この数年の「変容」は、学校、教職員、児童生徒らが、持続可能な未来に向けた教育・学習について主体的に考え、関わることにより、各々の学校の個性や文脈が活かされた取組が多く見られるようになってきました。日々の授業研究や教員研修、年度末の報告会などを通して、自身の取組を発表・共有するだけでなく、お互いのいいところを尊重し合いながら学び合い、さらに学校の個性や文脈を活かした取組として「変容」させてきている点に特徴が見られるようになってきました。これらの個性ある学校の変容は、当初からESDを学校全体で取り組むことを軸に据えるという「ホールスクール・アプローチ」によるものだと思っています。

これから、ますます「正しさの衝突」が強くなる時代において、多様な主体とのコミュニケーション(越境コミュニケーション)がますます重要になります。立場や世代、分野を超えて、多様な考え方をどう今後活かしていくかが求められていると言えます。自身のあり方、市民性のあり方を問い、実践し、議論を深め、学び合う本コンソーシアムの発展を切に願い、挨拶に代えさせていただきます。

横浜市ESD推進コンソーシアム・コーディネーター
東京都市大学大学院 環境情報学研究科 教授

佐藤 真久

本報告書の発行にあたり

2021年度は、文部科学省の「SDGs達成の担い手育成（ESD）推進事業」の指定を受け、中でも「教育（学習）効果の評価・普及」の分野で、実践や研究して3年目になります。今年度はユネスコ・スクール4校、キャンディデート(candidate)1校を含む、ESD推進校を26校指定し、SDGsの達成の担い手育成（ESD）事業を推進してきました。

ESDとは、「新たな価値観や行動等の変容をもたらす」「持続可能な社会を実現していくことを目指して行う学習・教育活動」と定義されています。「ESDを進めることによって、認識や価値観、行動の変容を視覚化するということはどのようなことか」ということを推進校とともに実践・研究し明らかにしてきました。

1年目は、テーマである「教育（学習）効果の評価」とはどのようなことか、本市が進めてきたESDとの関係をどのように考えたら良いかというところから始めました。

「評価」という意味の捉え方についても、学校の文脈に当てはめたときに「できた」「できなかった」という狭義の捉えにならないように、意図的に「評価」という語句を用いず、代わりに「変容を視覚化する」あるいは「価値を引き出す」という語句を用いてきました。

このことは、第3章の筆者である東洋大学（インド工科大学）米原教授が指摘されていると通り、評価（evaluation）という語句に対する様々な捉え方がある中で、ESD評価とは、その原義である「価値を引き出すこと（Extract-value）」そのものであり、2年目以降は、指導者のみならず学習者である児童生徒自身も価値を引き出したり、見出したり

するものにしようとして研究を進めてきました。

この考え方はESDの評価にとどまらず、このたび改訂され、小中学校では全面実施され高等学校においては年次進行されている学習指導要領のもとでの「学習評価」にも通じる考え方であることは言うまでもありません。

このことは、主体的に学習に取り組む態度にとどまらず、主体的に社会にある課題に取り組もうとする態度の育成に通じるものがあります。また課題解決に当たっては、「なぜ」「何のために」という学習の「目的」を明確にして、解決に当たっては「どのように」「誰と協働して」といった「手段」を考えること、つまりは「目的」と「手段」の関係性を明確にしたうえで、その関係性に一貫性をもたせること（ロジックを構築する）が重要になっていくことは言うまでもありません。このことは、VUCA時代を迎えた今日において、学校教育にとどまらず、ますます重要になってくるでしょう。

第1・2章では、推進校が実践してきた、「価値を引き出す手法」を取り上げています。アンケート調査は、集団の大まかな傾向性を捉える手法として有効で、例えば、学期の始めと終わりに実施をすることによって、「変容を視覚化する」ことができます。しかし、このアンケート調査の変化のみをもって、換言すると数値の変化だけをもって「変容を視覚化」できた結論づけるには十分とは言えません。その理由として、アンケートの実施時期や質問項目に対する発達段階に応じた質問項目になっているかなど、難しさも考えられます。そこで、アンケート手法だけでなく、テキスト・マイニングや思考ツールなどを用いて、個々の児童・生徒あるいは教職員の記述、発言などの変容にも着目する実践も見られました。このことはESD自体の取組

が多様である以上、その評価手法も多様であることに留意する必要があることは改めて指摘しておきたいと思えます。

第4章では、本市ESD推進コンソーシアム交流報告会の「教職員の部」と「児童生徒の交流の部」の様子がまとめてあります。

「教職員の部」では、UNESCO のレポート『教育のための社会契約』(以下「社会契約」)の和訳をもとに2050年に向けて「教育についての3つの問い(There are three essential question)」「何を継続すべきか、何をやめるべきか、何を創造的に再構築すべきか」ということについて議論を深めました。ここで一つだけ紹介すると、何を再構築するかについて「学校の存在意義」という意見がありました。さらに「新たな学校の存在意義を見つめなおすことが、学校を創ることではないか。」と付言されていました。

これまでの学校教育は社会の要請に応えるということで制度設計され、社会にとって必要な人材育成を目的に行われてきました。しかし、今日のようなVUCA時代において、社会共通の目標を見出せない中で、社会の要請というような「受け身」な姿勢ではなく、SDGsの達成を一つの指針としながら目指すべき社会を自分たちで創造する「主体」を育成するように「学校教育」が変容していく必要があるようにも思えます。

また、「社会契約」に3つの問い以外にも注目すべき部分があります。COVID-19の影響も長期化する中で、デジタル技術によって、リアルな活動からICTを活用して代替可能なものが数多く登場し、利便性を享受できるようになってきています。しかし、「社会契約」の中には、「デジタル技術は学校に取って代わるものではなく、学校を支援するものでなければなりません」という一文があることは注目しておく必要があります。デジ

タル・テクノロジーの進展は大きな社会変容をもたらす可能性があります。目指すべき社会像において、人権すなわち一包摂、公正、協力、連帯あるいは倫理などの価値観をより一層一般的な原理とすることとし、それを否定するものではあってはならないことにも言及しておきたいと思えます。

最後に交流報告会「児童生徒の部」について、その振り返りの一部を紹介したいと思います。中には、児童生徒自身がESDに関する学習や活動の価値を引き出したものが多数ありました。

- ・行動をすることで未来を変えたり、社会を変えたりすることができるかもしれないので行動が大事だと感じました。
- ・自分たちで何ができるかという発想力や行動力が大事だと思いました。世界のために何かをしようというのも大切であると思いました。
- ・今までの活動の中で、私はSDGs達成のために大切なのは活動の継続性とより多くの人とその活動に参加をすることだと思いました。
- ・中1のときは(SDGsを)詳しく知っている人はほとんどいなかったように思いますが、今年度の活動を通して誰かに言われたからではなく、自分たちが考えたことを実行に移すという、当事者意識が生まれました。

これらの児童生徒のコメントを読み返してみると、私たちESDを推進する側の価値も引き出されていることに気付く内容が多数ありました。

本市のESDの実践が「私たちの未来を共に再構想する」という新たな社会づくりの一ページにつながることを願ひ本頁のまとめとしたいと思います。

目次

はじめに	横浜市ESD推進コンソーシアム・コーディネーター 東京都市大学大学院 環境情報学研究科 教授 佐藤 真久	1
本報告書の発行にあたり		2
目次		4
第1章 横浜市立 ユネスコスクール・ESD推進校の実践事例		7
1	永田台小学校	8
2	幸ヶ谷小学校	10
3	市ヶ尾中学校	12
4	東高等学校	14
5	三保小学校	16
6	羽沢小学校	18
7	日枝小学校	20
8	恩田小学校	22
9	荏田西小学校	24
10	南本宿小学校	26
11	みなとみらい本町小学校	28
12	大門小学校	30
13	中和田中学校	32
14	西本郷中学校	34
15	西柴中学校	36
16	中尾小学校	38
17	本牧中学校	40
18	小田中学校	42
19	中川西中学校	44
20	相沢小学校	46
21	旭小学校	47
22	本牧南小学校	48
23	飯島小学校	49
24	牛久保小学校	50
25	新井中学校	51
26	南希望が丘中学校	52

(1～4の学校はユネスコスクール・5はユネスコ・スクールキャンディデート
6～20の学校は継続校・21～26は新規校)

第2章	ESD推進による変容の視覚化の手法	
	(ESDに取り組むことのよさ＝価値を引き出す)	53
	(1) アンケートを取り入れた手法……………	54
	(2) 思考ツールや記述の分析による手法……………	58
	(3) ESDの視点で生徒会活動を視覚化した実践事例……………	61
	(4) 教職員の授業研究の視覚化の事例……………	67
第3章	協働型プログラム評価によるESDスクール・マネジメント実践に関する	
	調査研究報告書ver. 3 (理論編)	69
	横浜市ESD推進コンソーシアム委員 東洋大学／インド工科大学 教授 米原 あき	70
第4章	本年度の横浜市ESD推進コンソーシアムの取組	91
	(教育委員会としてのESDの推進)	
	2021年度横浜市ESD推進コンソーシアム交流報告会	92
	児童生徒の部	
	教職員の部	

第1章

横浜市立 ユネスコスクール
ESD推進校の実践事例

1 横浜市立永田台小学校 【ユネスコ・スクール】

学校教育目標「一人一人が輝く永田台」

知：学び続ける 徳：ともに豊かに 体：心も体も元気に 公：持続可能な未来を 開：地域と夢

1 学校教育目標と ESDを通して育成したい資質・能力とのつながり

学校教育目標を資質・能力の三つの柱で整理をし、教職員で具体的な子どもの姿で育てたい力を共有した。そして、育てたい力は、ユネスコスクールの理念（平和、国際理解、環境、ESD、SDGsの推進）を教育実践していくこととも重なる部分は大きいことが分かった。永田台小学校の学校教育目標からユネスコスクールとしての意義とつながりのあるところに色付けてみると、ほぼ網羅していることに気付いた。このように、学校教育目標の実現を目指すことが、ESDを通して育成したい資質・能力と紐づいている。



2 SDGs達成の担い手育成(ESD)の視点で取り組んだこと

毎年、異動がある中で、職員が入れ替わってもESDに取り組み、持続可能な学校づくりができるかどうかを試されている。永田台小学校でも管理職をはじめとした職員の入れ替わりがある中でも、ESDが根付き、発展してきているのはなぜなのだろうか、と考えた。その根底には、「**ケアリングを土台としたESDの取組**」がある。この「ケアリング」は、もはや永田台のESDといっても過言ではない。この「ケアリング」は、永田台小全ての学校教育活動の根底に流れている。また、その「ケアリング」は地域活性化にもつながり、まさに学校変容が地域変容を起こしている。そこで実際の取組を紹介する。

(1) 目指す子どもの姿の共有

毎年異動がある中で、4～5月は教職員の対話を多く研究会に取り入れている。互いを知り合うことから始め、教育観や自分の大切にしていることを伝え合う。そして、新年度に出会った子どもを思い浮かべながら、具体的にどのような子どもを目指していくのかを語り合うのである。研究主題である「一人一人が夢中になって学び続ける姿とは」をブロックで語り合い、全体にも共有する。共有することで学校全体で児童を育てていく意識が高まっていく。(ホールスクールアプローチ)



(2) 夢中になって学ぶ子どもの姿～SDGsの視点～

生活・総合的な学習の時間を柱に夢中になって学ぶ子どもの姿が、SDGsのどの目標に紐づいているのかを大切にしてきた。

4年の「生ごみ大変身大作戦」では、給食の生ごみをたい肥にする活動を行っている。地域のカフェ「ほっとサライ」にある「キエーロ(生ごみコンポスト)」の活動をきっかけに始まった。ごみを減らすだけでなく、栄養のある土で花や野菜も育てることができるので循環を体感している。一人ひとりの問いを大切に、「消えやすい生ごみの組み合わせ」や「生ごみが消えるバクテリアの不思議」など、探究している。この活動を地域の人に広めていくことに向けて取り組んでいる最中である。



写真1 生ごみを毎日土に埋めている姿

(3) 地域に広がるESDの輪

地域に開かれた教育活動を行った結果、地域とのつながりがより強くなった。事務職員と地域コーディネーターが連携をし、学校の芝刈りの作業を実施した。多くの地域の方が参加をしてくださった。また、その後に本校の教職員がヨガクラスをし、地域の方のウェルビーイングにもつながっている。

3 ESDによる「変容の視覚化」の手法

毎年、永田台小学校では、「ながただいっこアンケート」を実施している。アンケート項目は、学校教育目標やESDの視点を軸に構成されている。その結果内容を見ると、「だれかの役に立つ人になりたいと思うか」についての項目が、94%となっており、非常に高い。(図1) ESDの実践を通して、地域とつながり、自己の問いを探究したことによる成果といえる。また、自ら行動したことで、地域の人に感謝をされたり、友達と協働したことの達成感がこの結果にもつながっているのではないだろうか。

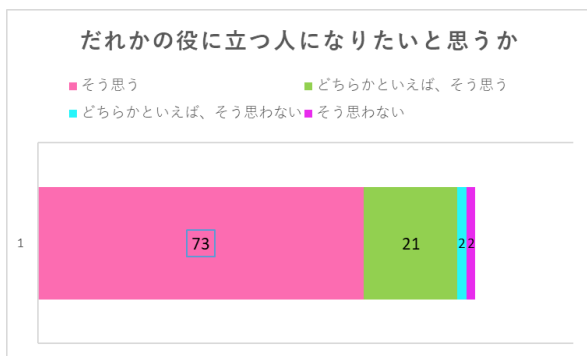


図1 令和3年度「ながただいっこアンケート」
また、変容の根底には、自己肯定感の向上が

欠かすことができないと考えている。自己を大事にすることで、他者を大事にすることにも広がり、社会変容へとつながっていく。少しずつ自己肯定感が高まっていることが分かる。(図2) しかしながら、自己変容は、すぐに表れるものではない。このように経年変化を数値化していくことで、着実に児童の変容を見取ることができる。また、生活・総合を柱にしたESDの実践の成果ともいえる。

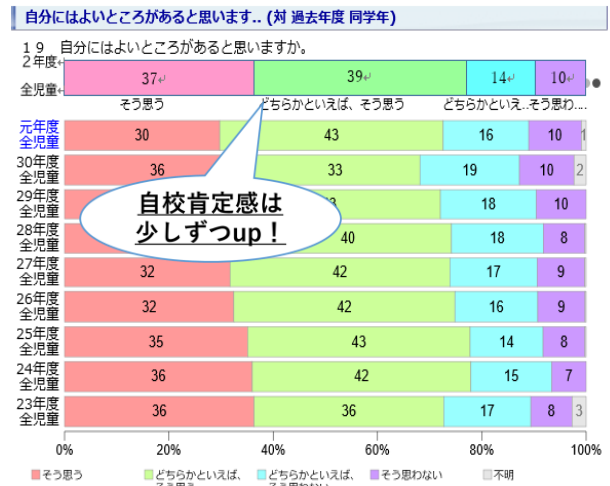


図2 平成23年度～令和2年度

「横浜市学力学習状況調査」の生活意識調査の経年変化

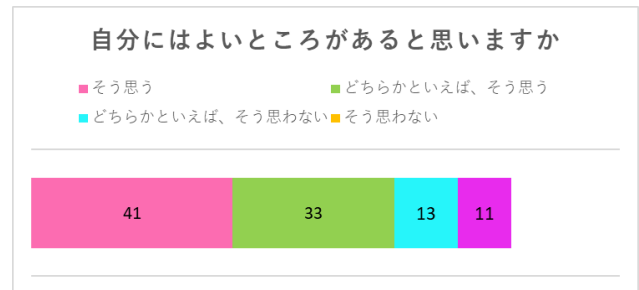


図3 令和3年度「ながただいっこアンケート」

4 ESDによって引き出すことができた価値 (evaluation=評価)

ESDを資質・能力ベースで捉え、学校のカリキュラムに入れることにより、全ての学校教育活動でESDが広がっていった。この捉えを教職員同士の対話を通して、積み重ねていくことも大切であると考えている。永田台小学校に関わる人たちと共に同じ方向で持続可能な学校、地域を創っていくためのリーフレットを作成し、更なる可能性にチャレンジしていきたい。

2 横浜市立幸ヶ谷小学校 【ユネスコ・スクール】

学校教育目標

自分 友だち 社会の幸せをつくる子ども

1 SDGs達成の担い手育成（ESD）の視点で取り組んだこと

本校では、「自分 友だち 社会の幸せをつくる子ども」という学校教育目標を掲げており、ESDを柱に学校教育目標の達成に向けて尽力してきた。特に、総合的な学習の時間、生活科の実践においては、長年にわたって積み重ねてきた経緯があり、その成果は内外共に高く評価されている。

この3年は、「子どもと教師の変容を促す効果的なリフレクション研究」とのテーマ設定の下、リフレクションを取り上げて重点研究を行っている。リフレクションは、OECDが定める国際標準の学力であるキー・コンピテンシー（資質・能力）の核心であり、「The Learning Framework 2030」には、リフレクションが位置付けられている。また、ユネスコの「自分自身と社会を変容させるための学び」の特徴を表すキーワードでもある。児童自身が、自らの思考と行動を省みて変容を続けることは、持続可能な社会の実現に向けて、欠くことができない能力であろう。

本報告書では、「変容の視覚化」という本市テーマの視点において、この3年に渡るリフレクション研究における実践について報告をする。なお、本校では「児童と教職員の変容」がテーマではあるが、紙幅の関係から、授業実践等における児童の変容の視覚化の手法が中心の報告となる。

2 学校教育目標と

ESDを通して育成したい資質・能力とのつながり

まず、本校の学校教育目標とESDを通して育成したい資質・能力とのつながりにおいては、「幸ヶ谷小学校で育てたい資質・能力表」を作成している（図1）。本表では、系統性を明確にして、各発達段階の目指すべき子ども像の資質・能力を明らかにした。発達段階が系統立てられていると共に、「学校教育目標」、横浜市の教育が育む力（知

図1「資質・能力表」

3 ESDによる「変容の視覚化」の手法

次に「変容の視覚化」に向けた代表的な実践を取とり上げる。

児童の省察を深める実践には様々あるが、ある学級はPMIやバタフライチャートなどの思考ツールを用いている（写真1）。この学級では、自分たちが行った総合的な学習の実践に対して、どのような成果や課題があったかを思考ツールを用いて整理し、共有し合うことを繰り返してきた。

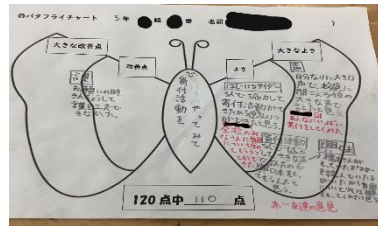


写真1
「思考ツール」

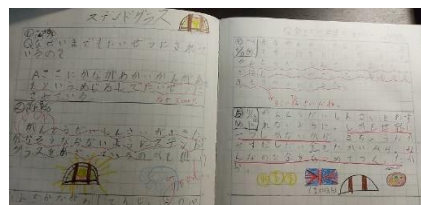


写真2
「児童のノート」

また、ある学級では、総合的な学習の時間の授業で定めた「問い」に対する自分なりの答えを定期的にノートに記し、それを見直しする時間をもつことによって自分なりの変化に気づけるよう実践をしてきた（写真2）。

上記に記したのは本校のリフレクション実践のごく一部であるが、こうしたリフレクションの積み重ねが、児童の行動変容へとつながっている実践は数多く見受けられている。

4 ESDによって引き出すことができた価値 (evaluation=評価)

本校では、昨年度より、抽出クラスを対象に児童のリフレクションや学校教育目標に対する意識調査をしている。様々な変容が各学級に見られるが(表1)、共通して出された成果として認知的方略、外的リソース方略、また学校教育目標への意識の平均値が、高まっている傾向が読み取れた。

表1 2020年度の質問紙の検定結果(心理検査のt検定によって有意差がみられたもの)

平均値	認知的方略	外的リソース方略	学校教育目標への意識
1回目	4.11	4.21	4.55
2回目	4.32	4.50	4.77

この結果から、児童のリフレクション(質問紙内では振り返りと記述)に対する意識への肯定的な変化があり、その際に教師や友達との関わりを児童が重要視していることがわかった。また、学校教育目標にある自分や友達、社会の幸せが、生活科や総合的な学習の時間とのつながりを意識していることがうかがえる。

ある学級の1年間の実践の変化をKHcoderというテキストマイニングを用いたものがある(図2、図3)。先に記した問いにおける児童のノートの分析である。この学級では、地域にあるスタンドグラスをテーマに総合的な学習の時間の実践をしてきた。ここでは、地域の会館に保存されているスタンドグラスを題材に、「スタンドグラスは何故残されたのか」との問いに対する児童の回答の変化をあらわしている。この図からは、当初、児童の回答の視点が限られていたものだったが、実践を重ねるにつれて震災や戦争などの地域の歴史、人々の願いや思い、などの多様な回答が生まれるだけでなく、それぞれの思考につながりが生まれていることが読み取れた。

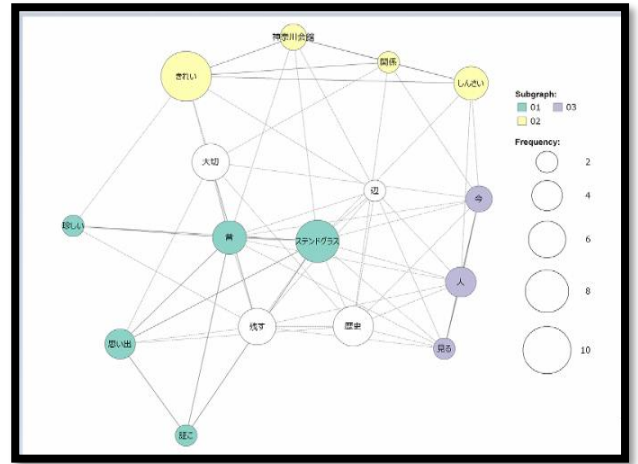


図2 「テキストマイニング①(導入単位)」

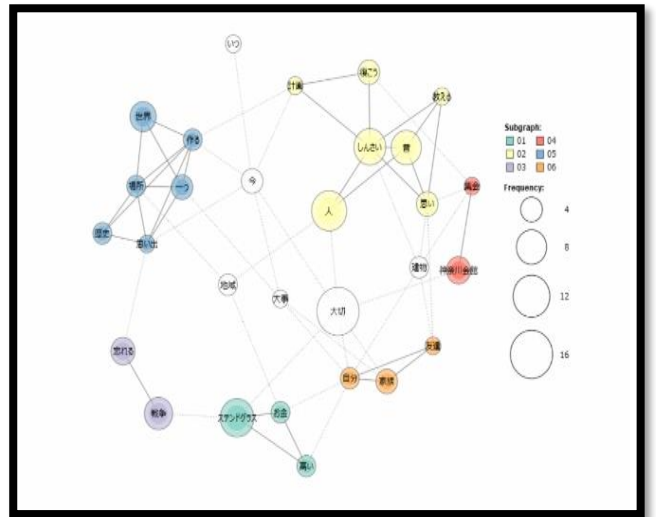


図3 「テキストマイニング②(終末単位)」

以上、本校のリフレクション実践と成果の一端を紹介してきた。しかしながら、このような視覚化された変容は、児童自身に思考や価値観などの内面の変化がともなってこそ生まれる成果であることは自明である。そして、たとえ、そのような変容がみられない児童がいても、「誰一人取り残さない」との信念のもと、関わっていくことこそがESD実践であることを、本校では確認し合ってきた。また、冒頭に記したように本校では「児童と教職員の変容」に向けたリフレクションがテーマである。児童の変容を求めるならば、教職員が変容をしていかなければならない。引き続き、持続可能な社会の創り手の育成に向けて本校の実践に努めていきたい。

3 横浜市立市ケ尾中学校 【ユネスコ・スクール】

学校教育目標 教育理念『**自立貢献**』

～「自分で考え解決する力を大切にします」「心豊かに生きる力を大切にします」～

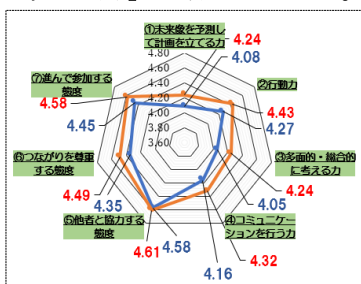
1 学校教育目標と ESDを通して育成したい資質・能力とのつながり

本校は、学校教育目標から「言語能力」「持続可能な社会の創造に貢献する力」「グローバル化の中で生きる力」の3つを教育課程全体で育成を目指す資質・能力として位置付けており、そこにESDの7つの資質・能力を包摂している。

Why?～拡がるつながり・進化する目標～

前年度実施のアンケートから、②「未来予測」③「多面的・総合的に考える力」に課題があった。

そこで、「自分たちの日々の委員会活動から達成できるSDGsは他にないか、同じ目標から他にできることはないか」等の



令和2年度委員会アンケート結果

問いかけを生徒へ投げかける提案を行った。結果、委員会目標と紐づけている「委員会を通して達成したいSDGs」の幅が広がり、生徒が日々の活動をSDGsとつなげて考える視点も深まっている。

2 SDGs達成の担い手育成(ESD)の視点で取り組んだこと

What?～「何を」は思考のきっかけ～

全校ワークショップから始まる「多面的・総合的に考える力」

「ヨコハマSDGsデザインセンター」と協働し、「間伐材を利用した木のストローを作る」ワークショップを全校で開催した。ストローが環境だけではなく社会・経済の課題を解決することを学び、身近な行動がSDGsの総合的な達成につながることを委員会や文化学習発表会等の様々な場面で考えるきっかけにつなげた。ここに至るまで生徒会本部役員と中央委員会から新成したプロジェクトチームが当日のGoogle Meetによる運営だけでなく、その意義を伝えるため

に「横浜の時間」を企画し、「2030 未来への分岐点暴走する温暖化～脱炭素への挑戦～」(NHKスペシャル)の全校視聴に向け、ポスターやオリジナルラジオで「地球が抱えている重大な問題が中学生の10年の行動にかかっている」ことを訴えた。ワークショップ後チームが作成したGoogleフォームで全校アンケートを実施した結果、50%の生徒が「自身の考えや行動が変わった」と回答し、「家族にワークショップについて話した」生徒が7

横浜の水源林道志村の間伐材を使用し、多様なSDGsの解決につながるストローを全校生徒で作成した



割いることから、全地球的課題に多くの生徒が足元から行動する意志があることが分かった。

文化学習発表会～多様な視点を束ね・発信力を磨く

『Change Our Life (持続可能な世界にするために自分たちから変わろう！市中から世界を変える一歩を)』のテーマで、各クラスが「SDGs 17の目標」の一つを研究し発表した。目標の背景にある多様な問題に対し、解決策を調べるだけでなく身近な生活で実践できることを発信。「市中の誰もが共感できる伝え方」に各クラス総力を注いだ。

図書館は「つながり」を提案するひらめきハブ

文化学習発表会の調べ学習に合わせ、SDGsを「環境・社会・経済」の3分野に統合した大規模な本の展示会を行った。昨年度1年生が国語科の学習で作成した「SDGsにつながる本の紹介カード」を掲示し、その経験をいかし2年生図書委員を中心に、関連するテーマの本を各自で工夫してつなげながら展示を準備した。利用者アンケートから、「クラスのテーマをたくさんの視点から見る事ができた」という声があがり、今年度の課題である「一つのテーマから多様なSDGsにつながる考え方」を引き出すことができた。

How?～知識より大切な委員長達のフォアキャスト

生徒会組織の目的「生徒の自治による学校生活

の向上を目指す」という本質の再確認が、特別活動をSDGs達成の実践の場に行っている。そのため、3年生からバトンを引き継いだ委員長皆が、眼前の「学年・学級を越えたつながり」を共通の

(環境委員長)私が委員長としてやりたいことはただ一つ、先輩方が残して下さったものを引き継いで、さらにそれをより良いものにしていくことです。これらの活動で学んだことをいかし、さらなるアクションを起こし、より幅の広い人達に私達の活動を知ってもらうことで、よりパワーアップした委員会にしていきたい。
(1年学級委員長)学年一人ひとりの力を仲間のために発揮できる(中略)自分から貢献できる学年づくりをしていきたい。

願いをもった仲間を育てようと、実現したい未来像を認証式で鮮明に語っている。誰もが共感できる言葉が周囲に広がり委員会を越え再び学年・学級に還っていく。この良い循環を生み出す中枢が「中央委員会」、「本気の人の本気の会」(前期保健委員長の言葉)である。学校の問題を皆で解決しようと奮闘する「先輩」の姿は、場を共有する「後輩」リーダーに大きな影響を与えている。本校は、生徒自ら「未来へ思いをつなぐ『担い手』」を育てている。本校職員が評価に力を注ぐのが、まさにこのハブとなる生徒から生徒への『伝え方』である。

3 ESDによる「変容の視覚化」の手法 アンケートの効果を多面的に捉える

昨年度のアンケート項目の『コミュニケーションを行う力』を「受信→思考」と「思考→発信」に分け、全8項目で前期活動を自己評価した。結果は生徒にも共有し、職員と同じ課題認識をもつことで次のアクションを改善する契機としている。また、テーマ(「自分の行動で変わったと思うこと」)を設定した自由記述欄を書くことで、生徒が自身の行動によって学校が変化していることに気づき、「自己の変容」を自覚することで「担い手としての有用感」高めている。

「他の人がやっていないからやらないのではなく、自分が行動を起こし、そこを他の人に伝えていきたいと思うようになった。」「皆には見えていなくても、活躍できているのをすると委員会の大切さ、楽しさを感じるようになった」

4 ESDによって引き出すことができた価値 (evaluation=評価)

前期アンケートの結果③「多面的・総合的に考える力」は昨年度の同時期より上昇した(右上図)。一方、それ以上の価値も引き出すことができた。

全校バックキャストで「今」を変える

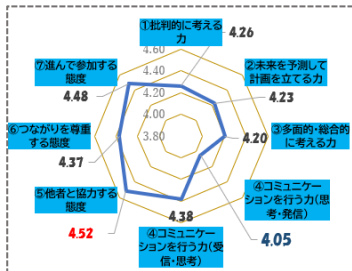
「自分達の未来がこの10年で変わることを知ったので、自分達にできることをやりたい」「小さくても何かの役に立ちたいから何でもやってみようと思うようになった」

全校ワークショップで共有した「未来の危機」が生徒の使命感を生み、行動に変化をもたらす勇氣に繋がった。自己の生き方の延長線上に悪い未来予測があるからこそ、行動すれば異なる未来を創ることができる、と信じる生徒が増えた。

他者の存在が自己を拓く

「自分の意見を押し付けるのではなく、良いところはたくさん吸収して次につなげることで、人の意見を認められる考え方に変わった」「互いのいいところを組みあわせることで、よりよいものをつくることができた」

他者の視点に敬意を払うことで、多様な価値観とつながり『担い手』としての自己を成長できると生徒自身が実感していることがわかった。



令和3年度前期委員会アンケート結果

「発信」より「受信」の数値が高いことから裏付けられている。

生徒の記述からも「つながる」という言葉が頻出していたことや⑥の平均値が昨年度同期より高いこと④の

願いをともにする仲間を増やす

「委員会に入っている入っていないに関係なく声かけをすることが大切だと実感した」「物事を進める時に周りにいる人を誰も取り残さないようにするという意識をもてた」

⑤「他者と協力する態度」⑦「進んで協力する態度」の平均値が高いことから、生徒が自分の言葉で他者とアクションを共有し、協力して課題を達成していくことの価値を自覚できていることが分かる。

今年度、生徒自身が「我こそが実践の『当事者』」だと意識することで、多くの仲間と協力して行動し、多様な視点から成果を発信できる「担い手」に成長していくことが分かった。生徒の気づき、発見、変容を引き出せるように、我々職員一同も「ホールスクールで」という認識を改めて確認し、今後は「地域に働きかけたい」という生徒の願いを引き継ぎ、ともに地域の変容に貢献していきたい。

4 横浜市立東高等学校 【ユネスコ・スクール】

<教育理念>・あたり前のことをあたり前に出来る人間

・物事を正しく判断し、他人に迷惑をかけない人間

学校教育目標

- ・自ら学び、熱心に学習する生徒を育成します。
- ・豊かな心と健やかな体を育み、他人を思いやる生徒を育成します。
- ・社会の一員として自らの役割を果たすとともに、国際社会の発展に貢献できる生徒を育成します。

1 学校教育目標と ESDを通して育成したい資質・能力とのつながり

○「言葉の力」と「聴く力」を身につけ、論理的な思考力と高いコミュニケーション力
○「主体的な学び」の成果をもとに、より高い進路目標の実現に向けて「挑戦する力」

・多様性を尊重し、それを受け入れる価値観と多様な人々とともに、目標にむかって「協力する力」
・自分の意見をわかりやすく伝える発信力と他者の意見を丁寧に「聴く力」

・現状を分析し、目的や課題を明らかにする「課題発見力」とそれを解決しようとする「行動力」
・物事に進んで取り組む主体性と他人に働きかけ巻き込む力をもったリーダーシップ

☆これらの力を身につけることによって、学校教育目標を達成できる。

2 SDGs達成の担い手育成（ESD）の視点で 取り組んだこと

- イーストタイム（課題探究学習）
- イーストタイム プレミアムプログラムⅠ・Ⅱ（Ⅰでは、進路選択を見据えた大学による説明・講義を受ける。Ⅱでは、34の企業・団体がそれぞれ取り組んでいるSDGsについて分科会を開き、プレゼンをしていただく）
- グローバル（有志が参加する地域学習）
- ESD Day（大学での講演やワークショップ・国連WFP（国際連合世界食糧計画）の講演とグループディスカッション）
- サステイナブル研究部（部活動として様々なイベント参加・啓発活動・企業との共同開発等）

○グローバル・シチズンシップ・キャンプ（留学生を交えて、SDGsについての課題を設定し、二日間英語で学び、発表し合う）

○ACCU（アジア・ユネスコ文化センター）国際交流事業（インド教職員招へいプログラム・オンライン）

3 ESDによる「変容の視覚化」の手法

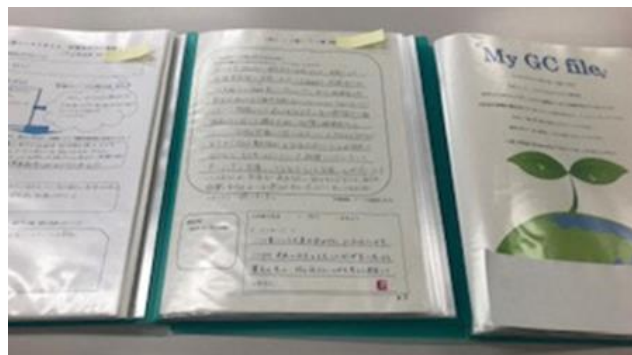
あらゆる取組において、生徒自身の振り返りを行い、次の行動へとつながるように努めている。

イーストタイム（課題探究学習）における 「GCファイル」の活用

イーストタイムでの取組をつづった、「GCファイル」と呼ばれる探究のファイルを各自作っていて、ポートフォリオとしている。

1年次からの活動を通して、生徒自身が考えたこと、気づいたことなどが蓄積されていく。

今年度は1年次において、取組の到達度を自己評価するツールとして、ループリック評価を用いている。振り返り等へのコメントは複数の教員が担当して、さまざまな視点でのフィードバックができるようにしている。



ACCU国際交流事業（インド教職員招へいプログラム・オンライン）におけるリフレクションから見られる気づきや変容

- ・サステイナブルな商品は現在世界中で様々なものが出回っているが、インドの先生方が“サリー”をサステイナブルな商品として紹介しているのを伺い、自分が注目してこなかった部分について触れることができ、サステイナブルに対する自分自身の視野の広がりを感じた。
- ・これまでインドといえば、“カースト制”や“ヒンドゥー教”が根付いているというイメージが強かったが、それはインドの一面にすぎないことがわかった。
- ・日々の生活では無意識のうちに、自分の身近なことだけで完結してしまいがちだということに気づいた。
- ・どのようなことでも、「言葉にしてみること」は大切だと感じた。言葉にしてみなければ当然なことであるが、コミュニケーションは取れない。相互理解を深める上での「言葉」の重要性を体感した。
- ・国際交流に対するイメージが変わった。これまでは国際交流というと何か大きなことのように感じていたが、真の国際交流は実は地域と地域が関わりをもつことなのだと感じた。
- ・インドでは、それぞれの民族の多様性を尊重するために共通言語である英語が存在していることを学んだ。日印の英語に対する意識の違いを感じ、言語に対する認識が改められた。



4 ESDによって引き出すことができた価値 (evaluation=評価)

地球市民としての視野

小学校では自分の住んでいる「地域」について学び、中学校では日本という「国」全体についての理解を深め、高校では「世界」というレベルに広げている。世界を見つめる中で改めて「地域」を捉え、グローバルに考えてローカルに行動するという力や自分たちを地球市民として捉える視野が培われている。

文化の多様性の尊重

企業やNPO法人の方々・留学生など、学校関係者以外の人たちとの関わりの中で、「多様性」に対する認識を深めている。多様性を尊重していくことが相互理解につながることを、グローバルシチズンシップキャンプや国際交流事業などを通して体得している。

自分で考える力（主体的に考える力）

1年次・2年次の経験を通して、「問題」や「課題」について自分なりの考えをもつ力、そして自分の考えや気持ちを表現する力が養われている。インドとの交流において、インド教職員への質問では、問題や課題の本質を見つめ、批判的に思考する力が育成されていることが感じられた。

言語のコミュニケーションツール化

「受験勉強」としての語学の重要性から、コミュニケーションツールとして言語を捉えることで、語学に対する意識の変容が顕著にみられた。

5 横浜市立三保小学校 【ユネスコ・スクールキャンディデート】

学校教育目標



進んで学び、高め合う子 ～元気・勇気・根気～



1 学校教育目標と ESDを通して育成したい資質・能力とのつながり

【学校教育目標】
進んで学び、高め合う子 ～元気・勇気・根気～
【ESDテーマ】

- ⑦ 未来をつくる ⑧ ほんきのまなび
- ＜持続可能な社会づくりを担う力＞
- 興味・関心を広げ、主体的に学び続ける力。
- (② 未来)
- 他者を思いやる心を持ち、自他を大切に
する態度。(I 多様性の尊重)
- 社会の一員として、自分の役割を進んで果たす
態度。(⑦ 参加)

II ESDを通して育成を目指す「構成概念」と「能力・態度」の学年別重点化

昨年度に引き続き、ESDを通して育成を目指す「構成概念」と「能力・態度」を学年別に重点化を図り、1年間を通しての変容を探った。

学年	構成概念	能力・態度
1年生	I 多様性 多様性を尊重する態度	⑦(参加) 進んで参加する態度
2年生	III 有限性 ものを大切に する態度	④(伝達) コミュニケーションを行う力
3年生	V 連携性 互いに連携・協力する態度	⑤(協力) 他者と協力する態度 ⑥(関連) つながりを尊重する態度
4年生	II 相互性 つながりやかわり を大切に する態度	③(多面) 多面的、総合的に考える力
5年生	VI 責任性 責任と義務を自覚し、 自ら進んで行動する態度	①(批判) 批判的に考える力
6年生	IV 公平性 公正・公平に努める態度	②(未来) 未来像を予測して計画を立てる力

▲「構成概念」と「能力・態度」の学年別重点

また、昨年度作成した「ESD評価規準例集」を活用し、学習評価の妥当性、信頼性の検証にも少しずつ取り組んできた。

第1学年では、ESDで育成を目指す「構成概念」【多様性】と「能力・態度」【⑦《参加》進んで参加する態度】の重点化を図り、授業研究やESDの教材開発に取り組んだ。学級活動「かかりをパワーアップして『にこなかびかきら』パーティーをたのしもう」では、「係活動をパワーアップする」という活動を通して主体的に生活や人間関係をよりよくしようとする態度の育成を目指した。



▲ 第1学年 学級活動

「かかりをパワーアップして『にこなかびかきら』パーティーをたのしもう」

2 SDGs達成の担い手育成(ESD)の視点で取り組んだこと

本校は、地域の豊かな自然を活用しながら「持続可能な開発のための教育」(ESD)を推進しカリキュラム開発と授業実践を進めてきた。持続可能な社会づくりを担う児童の育成を目指し、環境やキャリアなどの教育課題をクロスカリキュラムにより整理し、全教科等において授業実践を進めてきた。今年度の取組は次の通りである。

I 持続可能な“授業研究”に向けて

昨年度は、授業研究会を学年で1学級の授業公開に絞ることとしたが、本年度は各学年2本の授業を公開することとした。各回の授業研究会では、教科等を揃えることを原則とし、教科等の教授法を学びながら、カリキュラム・マネジメントのPDCAサイクルの確立に努めた。また、昨年度より取り組んでいる「ESD教材研究」に取り組む時間を今年度も継続し、授業のデザイン力や指導力の向上につなげようとした。限られた時間の中で教材研究が充実するとともに、経験年数の浅い職員が多い中で、人材育成にもつなげることができた。

またICTの活用やESDに関する研修を適宜行い、授業力向上に努めた。

多様な係活動をすることが、学級目標という共通の目当てを達成することに目を向けさせることで、多様性を尊重する態度の育成を図ることとした。また、「パワーアップ」という合言葉を用いて係活動の工夫、改善を児童が図ることで、目標達成に向けたアイデアを考えたり、係の友達と一緒に計画をして実践しようとしたりする姿が見られた。

第5学年では、ESDで育成を目指す「構成概念」【責任性】と「能力・態度」【⑦《批判》批判的に考える力】の重点化を図り、授業研究やESDの教材開発に取り組んだ。理科「とけるの謎をとけ！～“本当にそうかな？友達の考えもよく検討し、「もののとけ方」の本質を見抜け！～」では、ものが水に溶ける量や様子に着目して、水の温度や量などの条件を制御しながら、もの溶解方の規則性を調べる活動を通して、予想や仮説をもとに、解決の方法を発想する力や主体的に問題解決しようとする態度の育成を目指した。



▲ 第5学年 理科
「とけるの謎をとけ！」

「溶ける」という事象一つをとっても、物質によって異なる特徴があることなどから、多様性について概念形成を目指した。また、事前にアンケートを行ったり、ウェビングマップを使って児童が「溶ける」ことに対して持っている概念の可視化をしたりし、それに基づいて単元づくりを行った。そのことで、「本当にそうかな。」と児童が立ち止まりながら実験を行うことができた。児童は、自分自身の考えや概念を見つめ直し、新たな理解を構築することができた。

また、結果の共有方法として「Jambord」というアプリを活用し、他の班の結果をリアルタイムで共有できるよさなどがあつた。

3 ESDによる「変容の視覚化」の手法

今年度も授業における児童の思考を「見える化」するために、積極的に思考ツールを取り入れてきた。また、GIGA端末の導入に伴い、iPadを活用した授業づくりを、これまで以上に推進することができた。

第3学年の国語「2年生に大豆のことを詩で伝えよう」では、ウェビングなどの思考ツールを活用して、自分もつイメージを広げている児童の姿が見られた。また、前時までの板書や学習の履歴が分かる掲示物を、児童が必要に応じて写真に残し、自分が作ったウェビングマップと教師の見本を見比べたり、学習の進捗の度合いを確認しながら言葉を吟味したりする姿が見られた。



▲ 第3学年 国語

「2年生に大豆のことを詩で伝えよう」

4 ESDによって引き出すことができた価値 (evaluation=評価)

本校はESD研究の始めて10年目となるが、常に新しいものを求めて、研究・研鑽に努めてきた。昨年度に作成した「ESD評価規準例集」の検証やESDカレンダーを活用した「ESD教材研究」の充実などを通して、授業改善を推進してきた。教科等の授業との関連を図って授業づくりをすることで、SDGsの視点から物事を見ようとしたり、自分事として課題解決を図ろうとしたりする児童が増えた。

今後も、指導方法の一層の工夫や改善を図るとともに、「ESDの指導と評価」についてさらに研究を深めていきたい。

6 横浜市立羽沢小学校

学校教育目標

笑顔いっぱい(E) すこやかいっぱい(S) 大好きはざわの人とまち(D)

1 学校教育目標と

ESDを通して育成したい資質・能力とのつながり

学校教育目標では、地域や社会に豊かに関わりたいしながら主体的に学ぶ子どもの育成を目指している。そのために下記の資質・能力に重点を置いて様々な教育活動を進めている。

- 多面的・総合的に考える力
- コミュニケーションを行う力
- 他者と協力する態度
- 自ら課題をみつけ主体的に最後まで取り組む力

2 SDGs達成の担い手育成 (ESD) の視点で取り組んだこと

①全校の取組

- ESDごよみの作成。
- 「カーボンオフ」「アースアワー2021」
地域・保護者にも呼びかけ全校で実施。

②エコフォーラムへの参加 (5年生)

③SDGsと関連した単元づくり

学年	単元名と関連SDGs
6年	「ハザワ・レインボー・マシンを作ろう！」 11・12・17
	「羽沢の魅力伝えよう」 8・11
	「Flower Garden Project in Hazawa」 11・12・15
5年	「地球守ろう！はざわSDGsプロジェクト」 11・12・15
	「地球みんなBee Happy!ミツバチ守ろうプロジェクト」 11・14
4年	「上菅田特別支援学校の友達と交流しよう」 3・11
3年	「知りたい！育てたい！羽沢のキャベツを広めたい」 「羽沢キャベツを有名にしてみんなハッピープロジェクト」 8・11・15

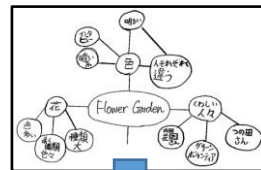
3 ESDによる「変容の視覚化」の手法

◆資質・能力に着目した言語分析

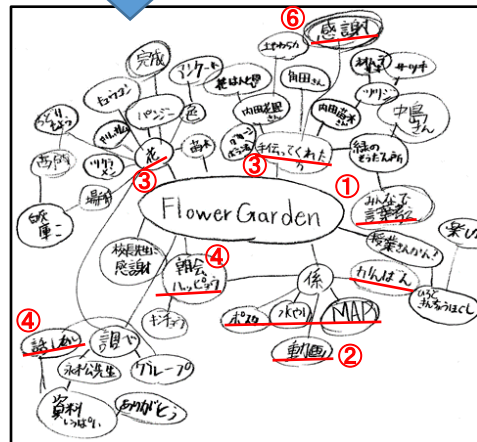
ウエビングマップやふりかえりの言語に着目し、ESDでねらう資質能力の何に該当するかについて、国立教育政策研究所「学校における持続可能な発展のための教育 (ESD) に関する研究」最終報告書 H24. 3 をもとに分析した。

6年生 「Flower Garden Project in HAZAWA」

コロナ禍でも元気が出るように、校内の人や地域の人達に自分達の育てた花を届け、学校に見に来て楽しんで欲しいと考えた。内田花園さんに花の育て方を教えていただき、素敵なフラワーガーデンを創ることができた。



- ①批判
- ②未来
- ③多面
- ④伝達
- ⑤協力
- ⑥関連
- ⑦参加

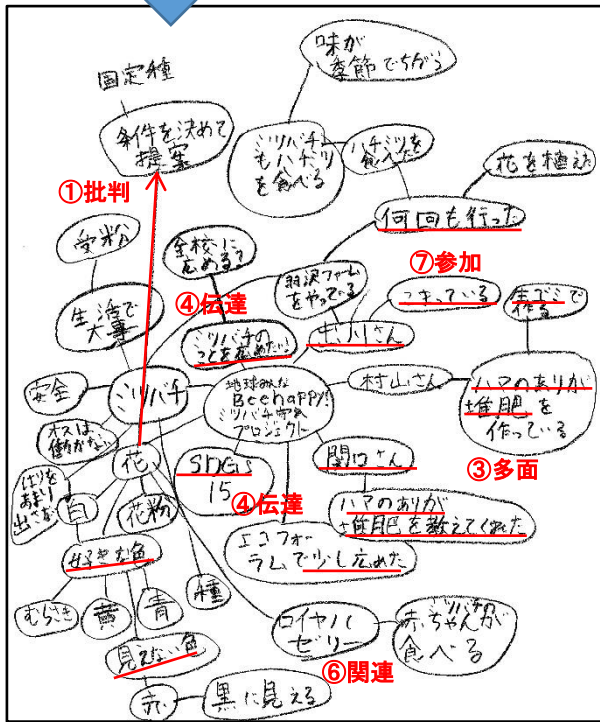
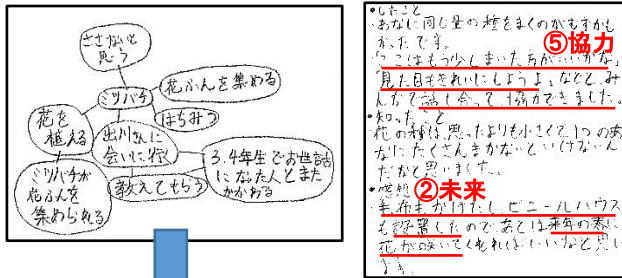


作り置き
⑤⑥
色紙を貼って手紙を送る前に、前のやりかたを思い出して、その時のことを
物心もわいてきてあとうま！全体練習は、いよいよはざわのみんなの
おかげで、完成し、このお花や写真を送って見てほしい、そして、ほめてもらって
いよいよ、このお花をみんなに届けてあげよう

5年生「地球みんな Bee Happy！ ミツバチ守ろうプロジェクト」

地元養蜂家の方と出会い、ミツバチが減少しているという悩みを聞き、ミツバチの蜜源を増

やすことに挑戦した。話し合い等で自分の考えを相手に伝えられた喜びや達成感を味わうことができた。

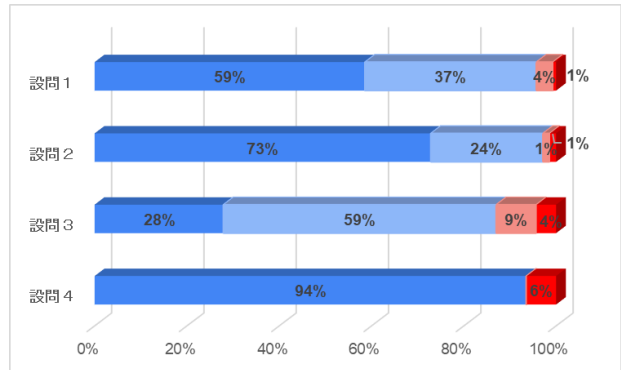


【子どもの言語をESDで重視する資質能力態度で見とる】

- ①批判 ミツバチを増やすためにミツバチの見える色の花を、みんなで話し合い条件を決めて提案した。
- ②未来 「種に毛布もかけたし、ビニルハウスも設置したので、あとは来年の春に花が咲いてくれればよいと思います」
- ③多面 生ごみで「ハマのありが堆肥」を作っている。
- ④伝達 ミツバチのことをエコフォーラムで少し広めた。全校に広める (TV朝会で)
- ⑤協力 「ここではもう少し蒔いた方がいいかな」「見た目もきれいにしようよ」などとみんなで話し合っ て協力して植えられた。
- ⑥関連 自分たちがハチミツをもらって食べた。ミツバチもハチミツを食べる。ローヤルゼリーはミツバチの赤ちゃんが食べる。ハチミツの味は季節でちがう。SDGs 15につながっている。
- ⑦参加 出川さんが、ミツバチが減って困っているからミツバチのことを広めたい。出川さんの羽沢ファームに何回も行った。ミツバチの好きな色の固定種の花の種を蒔いた。思ったより種は小さくてたくさん蒔いた。

◆SDGs に対する全校児童の意識の変容

今年度、SDGs の浸透の様子を見取るために、児童にSDGs に対するアンケートを取ってみた。



【設問1】SDGs の目標について知っていますか。
 【設問2】学校の中に、SDGs のマークがあるのを知っていますか。
 【設問3】学校の中で、SDGs のマークがあることで、自分の気持ちや行動で変化したことはありますか。
 【設問4】SDGs に関する授業をしたことがありますか。
 ■ある ■ややある ■あまりない ■ない

上のグラフは高学年の結果である。95%以上の児童が目標を知っていると回答し、SDGs に関する授業についても94%が「ある」と回答している。気持ちの変容や行動の変容についても「ある」「ややある」が87%を占め、知ることよりも数値は低いものの、これまでの取り組みによって自己の変容を実感できている割合が高いことがうかがえる。「その学習をしたことで、自分の気持ちや行動で変化したことはありますか」という質問に対し、高学年では「自分たちにもできることはあるんだな。楽しみつつSDGs に関わっていることはうれしいことだと思う」「無意識にやっている活動が地球や他の人のためになっていると知った」という回答があった。また、低学年では「分別するようにしている。」「ものを捨てずにリサイクルしようと思った。」という回答が得られた。

学年が上がるほど、SDGs が子どもたちに浸透していることが分かった。

4 ESDによって引き出すことができた価値 (evaluation=評価)

コロナ禍ではあるものの、「持続可能な社会を創る「オンラインでの交流」や「地域のために、社会の役に立つことにチャレンジしたい」という児童の意識が芽生え始めた。引き続き「自分にも何かできる」「地域や社会のために」と考えられる児童を育成していきたい。

7 横浜市立日枝小学校

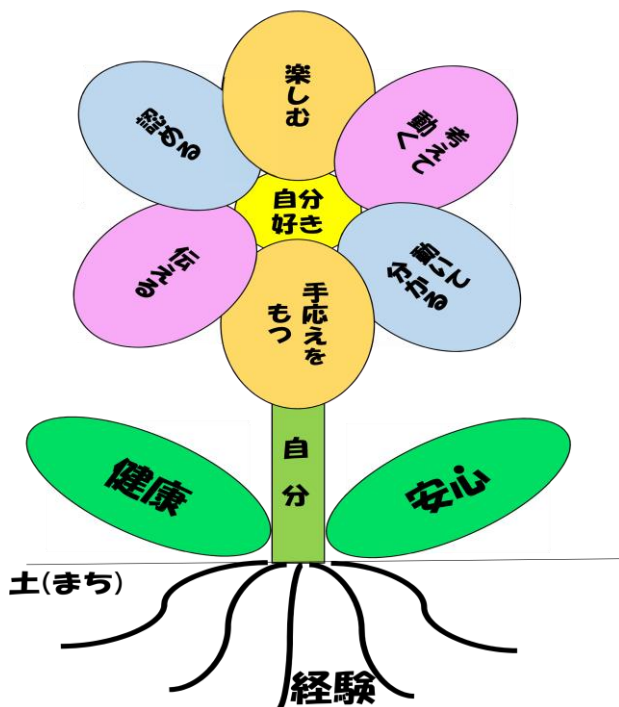
学校教育目標

生き生き日枝っ子

1 学校教育目標と ESDを通して育成したい資質・能力とのつながり

学校教育目標である「生き生き日枝っ子」の具現化を目指し、自分たちが生活している学校やまち等を中心に日々気づき、課題をもったり感動したりする中で、どうしたらよりよくなるかを判断し、「解」を見つけていくことができる「生きる力」の育成を図っている。目指す子どもの姿、花を開く子どもの姿としてイメージし、6つの花びらで「資質・能力」を表した。2枚の葉は、花を開くための栄養のことで、健康や安心できる状況づくりのことであり、また、これまでの経験を根で表し、経験の根を伸ばすことで土壌から栄養を得る。茎は、自分で、根を下ろし、葉を大きくし、花を咲かせることで自分を好きになっていく。これらの力を高め、また相互に関連させながら働かせることによって、子どもたちに将来生きて働く力が身に付き、予測困難と言われるこれからの時代を強く、幸せに生き抜く力になるのではないかと考えた。

学校教育目標「生き生き日枝っ子」のイメージ図



2 SDGs達成の担い手育成(ESD)の視点で 取り組んだこと

ESD(SDGs)という視点をもって、学校教育目標「生き生き日枝っ子」を教職員のみならず、一人ひとりの子どもが共有し、自尊意識を高める取組を続けている。

【生活・総合】

年間を通して子どもが問いを立てながら問題解決学習に取り組み、学校周辺を流れる河川の調査、スタンプラリーを企画してまちを元気にする、しあわせ絵手紙でまちの人たちを笑顔にするなど、各クラスで様々な学習を実践している。

2年2組：「川が大好きはくぶつかんをひらこう！」単元目標では、川が大すきになる博物館に近づくために川の生き物を捕まえて育てたり、川を楽しむことができるコーナーを工夫したりすることで、生き物が知恵を働かせて生きていることや川が地域の人々からも大切にされていること、大切にすることができるようになった自分に気づき、これからも身近な自然を大切にしようとする。



6年1組：「Hie World Smile プロジェクト～フェアトレードで世界を笑顔に～」単元目標では、フェアトレードの知識を深めたり、フェアトレード商品をまちに広めたりしていく活動を通して、世界的な問題に目を向け、専門家にフェアトレードの現状を聞いたり、生産者・販売者の思いや願いに気付いたりする中で、自分自身の行動が、まちだけでなく、世界を豊かにする可能性があることを実感し、消費者として今後の生き方を考えようとする態度を育てる。



【SDGs は学校図書館から】

学校図書館司書が中心となり、学校図書館内にSDGsコーナーを設置。意識的に本を選べるようにしている。



【この指とまれプロジェクト】

教職員が生き生きと働くことで、生き生きとした子どもが育まれる。事務職員が中心となり、企業や施設と連携し、様々なプロジェクトの活動が行われている。



3 ESDによる「変容の視覚化」の手法

【体験の充実による行動の変化】

材に対して体験を通してかかわっていくことで、その対象への知識・理解が深まり、問題を自分事としてとらえ、自ら解決していくことができる。2年2組「川が大好きはくぶつかんをひらこう！」では、生き物の様子から、生き物の命や成長、環境に合わせる知恵、特徴、適した環境や関わり方があることに気付いている。治水事務所やNPO法人、水族館、公園利用者等とつながり、川や海を大切に様々な関わり方や思いがあることに気付いている。環境や生き物の様子を手掛かりに、自分の生き物に適した世話の仕方を工夫したり、公園利用者と一緒にアクアパークを楽しむための活動を考えたり、命の問題に向き合い活動を見直したりすることができる。自分たちの振り返りや参加していただいた公園利用者の感想から、さらに生き物人も喜ぶ、関わり方を発信していくことができる。生き物を見つけたり捕まえたりする楽しさ、協力して島をつくったり、漁をしたりして川で遊ぶ面白さを感じて、前向きに取り組ん

でいる。生き物を長生きさせる世話ができるようになったり、紹介できるようになったり、公園利用者と一緒に楽しむことができるようになったりする手応えを感じて、粘り強く活動に取り組んでいる。このような変容を、一年間の長期単元をカリキュラム・マネジメントすることで視覚化している。

【SDGs サーベイ】

SDGsにまつわる50の質問に答えることを通して、SDGsに関わる関心・意欲・行動を分析することができる。個人ごとに結果を蓄積し、項目ごとの変化を見ることで、自身の変容を感じることができる。また、学年ごとの結果を比較することで、年齢に応じた意識の変化や違いを考察することができる。

コロナウイルスの影響により、年度初めに集計することができていないため、年度末に全学年で実施予定である。

(QRコードを貼付してあるので、皆さんの学校でもやってみてください。)



4 ESDによって引き出すことができた価値 (evaluation=評価)

子どもたちが充実した体験をすることによって、一人ひとりがより強く思いや願い、疑問や課題をもち、体験を繰り返しながら協働して問題解決を図ることによって、子どもたちが伸び伸びと成長し、子どもたちに将来生きて働く力が身に付き、予測困難と言われるこれからの時代を強く、幸せに生き抜く力になるのではないかと考える。

何よりも子ども同士が励まし合い、支え合い、元気づけ合い、笑顔あふれる学校にしよとする姿が見られるようになったことが、大きな成果である。

8 横浜市立恩田小学校

学校教育目標

「自ら学びともに豊かな生活を創り出す子どもの育成」
～思いやり すすんで行動 だれとでも協力 恩田の子～

1 学校教育目標と

ESDを通して育成したい資質・能力とのつながり

学校教育目標に深くつながるものとして、下記の資質・能力に重点をおいて様々な教育活動を進めている。

- ①批判的に考える力
- ②未来像を予測して計画を立てる力
- ③多面的・総合的に考える力
- ④コミュニケーションを行う力
- ⑤他者と協働する態度
- ⑥つながりを尊重する態度
- ⑦進んで参加する態度

今年度は、生活・総合的な学習の時間だけでなく、算数科においても上記の①③④の力に重点を置き、「実生活に根ざした学習活動のあり方」のテーマで授業研究を進めている。

2 SDGs達成の担い手育成（ESD）の視点で取り組んだこと

総合的な学習の時間 5年2組

【5-2 発見隊～恩田のみりよくを伝えよう～】

SDGs目標

⑪自分たちが住んでいる恩田の町のみりよくを伝えよう

〈単元目標〉

恩田小学校や、学区の公園や自然などの魅力を、在校生や地域の方に伝える動画制作を通して、自分たちが住んでいる地域の良さを再確認するとともに、町づくりや地域活性化のために取り組んでいる人々や動画制作をしている方の思いや願いにも気づくことができる。

ESD視点

〈構成概念〉V連携性

一人ひとり、自分の意見を持ちながら、互いの意見を受け止めて、問題解決するためにはどうすべきか折り合いをつけたり、連携したりすることで、充実した活動になるという実感をもった活動を進めた。

〈能力・態度〉①批判的に考える力

③多面的・総合的に考える力

自分たちがやりたいことだけをやるのではなく、「どうしたら恩田のみりよくを伝えることができるか?」「恩田をもっと好きになってもらうにはどうしたらよいのか?」という目的意識を明確にしながらかつ活動が進められるようにした。その

視点も大切にし、相手の動画を見て批判的に意見を発することも大切である。ダメ出しではなく、「もっと動画を良くするため」という考えを大切にし、話し合いを進めている。

具体的な活動

① 恩田のまちを探検しよう!



☆恩田の町だけではなく、今年35周年の恩田小についても伝えたいな!

☆来年に入学する1年生や、在校生に恩田小を好きになってもらいたいな!

② 動画制作のポイントを聞こう!

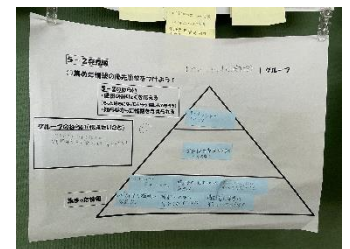
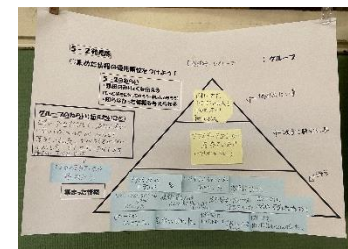
NHKで動画制作をしている服部さんに聞きました。



動画制作のポイント

- ① 目的にあった情報を集める
- ② 動画のねらいをしぼる
- ③ 見る人が分かるように工夫する

③ 恩田小について調査し、情報をしぼろう!



④ 動画制作をしよう!



☆「恩田らしさ」「恩田ならではの」にこだわって動画を作りたいな

3 ESDによる「変容の視覚化」の手法

本校が重点研究として、ESDの視点をもった生活科・『横浜の時間』の学び作りを始めて、今年度で4年目に入る。また、昨年に引き続き今年度も、児童の委員会活動をSDGs 17の目標とつなげて展開してきた。

そういった活動を進めてきたことで児童の中にどのような変容があったのかを探るため、「SDGs 17の目標につながる活動についてのアンケート」を全校児童にロイロノートを活用して実施した。

SDGs 17の目標につながる活動についてのアンケート

1: SDGs 17の目標について知っていますか？

2: 学校の中に、SDGsのマークがはってあるのを知っていますか？

全校のほぼ全ての児童が知っていた。17の目標の意味まで知っているのは高学年にいくほど多かった。(高学年での理解は、8割程度)

3: 学校の中に、SDGsのマークがはってあることで、自分の気持ちや行動で変化したことはありますか？

学年を問わず、電気や水などの資源を大切に使う、ごみを分別する、ルールを守る、残さず食べるなど、世界のことを考え、身近なところでできることから実践していこうという回答が多くあった。

4: 授業で、SDGsに関係する学習をしたことがありますか？

5: その学習でうれしかったことや楽しかったこと、できるようになったことは何ですか？

6: その学習をしたことで、自分の気持ちや行動で変化したことはありますか？

主に生活科・『横浜の時間』で全クラスがSDGsに関わる学習を行った。うれしかったこととしては、地域の人とのつながりが深まったことや取組を家族に褒めてもらえたこと、色々なことを知っただけでなく、実践できたことなどがあった。また、自分の生活が世界とつながっていると感じている子もいた。

7: すべての人々にとってよりよい世界をつくるため、今の自分に出来ることで、何かやってみたいことや興味のあることはありますか？

全体的には、節水や節電などのエネルギーを大切に使うという日常生活ですぐに実践することができることを意識していきたいと感じている子が多く見られた。

中学年からは、「もっとSDGsに関わる学習をしたい」「生き物を大切にしたい」と身近なことにも目を向けつつ、「地球温暖化対策をしたい」「プラスチックを減らして海をきれいにしたい」「誰かを助けたい」など実社会での問題についても考え、より広い視点での回答が見られた。

8: 今年は、新型コロナウイルスの影響によって学校が休校になったり、分散登校になったりしました。その中で、学校での学習やあなたの世界についての見方で変化したことはありますか？

分からないと感じている子も多く見られたが、「新型コロナウイルスの影響があっても、できることはたくさんある」「離れていてもオンラインでつながることができる」など前向きな意見も見られた。新型コロナウイルス流行の前と比べてマスクを外すことへの罪悪感や恥ずかしさ、給食の時間があまり楽しくなくなってしまうというように不満などを抱えていることも事実だが、「生きていればいろいろなことがある」「不測の事態にも臨機応変に対応する力を身に付けたい」と現状を受け入れ、新型コロナウイルスに打ち勝つ自分たちの未来を想像し、できることに取り組んでいこうという心の強さをもっていることが分かった。

4 ESDによって引き出すことができた価値 (evaluation=評価)

教職員がESDの取組を意識的に行ってきたことで、多くの児童が、世界には様々な課題があること、世界中の人たちが協力してその課題を解決しようとしていることを知ることができたということが、一つの大きな価値だと思う。さらに、生活科・『横浜の時間』と算数科を中心としたESDに関わる学習活動に取り組むことで、身近な問題を自分たちで解決することが、今、世界が抱えている課題を解決するきっかけになるということを実感することができたことも、価値の一つだと考える。

アンケートの結果からも、低学年から高学年へと進むにつれ、自分の生活に関わる身近な視点から、地域や社会へつながる広い視点で物事を考え、実践していこうとする姿勢が見えてきた。他者につながり、他者への思いをもって日々の行動を選択していくことができる恩田の子どもたちが、身近な世界を変え、これからの世界をよりよいものに変えていってくれることを期待している。

9 横浜市立荏田西小学校

学校教育目標

心豊かにかかわり、互いに高め合いながら、学び続ける子。

1 学校教育目標と ESD を通して育成したい資質・能力とのつながり

現代社会における課題の解決に向けて、地域の人や友達と協力しながら、社会に主体的に働きかけようとする子どもの育成。

低学年	<ul style="list-style-type: none"> ○感じたことを言葉にする力【言語能力】 ○家族や友人を愛する気持ち【グローバルの中で生きる力】 ○身近な事象に積極的に関わろうとする態度 <p>【持続可能な社会の創造に貢献する力】</p>
中学年	<ul style="list-style-type: none"> ○互いの考えの違いに気付き、自分の考えを伝える力【言語能力】 ○他者の考えや思いに対する受容性や協調性【グローバルの中で生きる力】 ○自然や文化に感動し、思いや考えを表現する力 <p>【持続可能な社会の創造に貢献する力】</p>
高学年	<ul style="list-style-type: none"> ○自分の考えを深化させ、他者に的確に分かりやすく伝える力【言語能力】 ○人々と協働・協調するコラボレーションする力【グローバルの中で生きる力】 ○リーダーシップを発揮し、考えを出し合って新提案する力 <p>【持続可能な社会の創造に貢献する力】</p>

2 SDGs 達成の担い手育成 (ESD) の視点で取り組んだこと

◎総合的な学習の時間と ESD

第4学年では、総合的な学習の時間で、福祉に関する学習を行った。福祉に関する学習を通して、身近な環境に目を向け、関係する様々な人の意見を参考にしようとして、自分たちにできることを考え、具体的に行動する力の育成を目指した。

この学習は、国語の「思いやりのデザイン」をきっかけに、校内には思いやりのデザインが足りない、もっと増やしていきたいという思いが深まり、総合的な学習の時間へと展開した。調べていく過程で、バリアフリーの考えが大切であることに気付き、「荏田西小学校のバリアフリーをパワーアップしよう」という学習課題を設定した。学習課題を解決するために、まずはバリアフリーについての理解を深めたいという思いが高まり、社会福祉協議会にバリアフリーに関する出前授業を依頼した。さらに、自分たちの考えだけでは一方的であるとして、教職員や保護者、学援隊など、学校を利用する様々な人の生の声を集め、その声を参考にして、具体的な取組を検討した。この過程で、実社会に触れて(学校から手紙を出すためには、学校長の承認が必要であり、承認を得てアンケートを出すために何度も内容の精査、交渉を繰り返した)、大人の考え、荏田西小学校を取り巻く環境、実態などを知ったり、考えたりして、自分たちの思いにブレがないかを確かめながら進めていく姿が見られた。バリアフリーの理念とアンケートの結果、自分たちの思いを子どもたちなり

に総合し、①校歌の手話バージョンをつくる、②校内案内図を充実させる、③学校紹介ビデオを作る、の3つに活動を焦点化し、各クラスの分担にすることで取り組むことができた。学習を通して、様々な人の意見を聞くことの重要性、自分たちにとって身近な環境にも課題の解決があることを認識し、解決するために積極的に関わることの大変さと充実感を得ることができた。



【学校以外の施設での、バリアフリー探しの様子】



【山内図書館のバリアフリーの取組を聞く様子】



【社会福祉協議会の出前授業に参加する様子】



【社会福祉協議会でバリアフリーの取組を聞く様子】

◎図工の学習と ESD

第5学年では、図工「読書感想画」の学習と、SDGs を関連させた単元デザインで学習を行った。

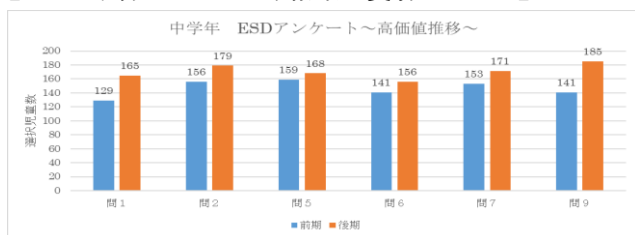
単元の導入では、「人間が捨てたプラスチックゴミを間違えて食べて死んでしまったクジラ、ゴミの浮かぶ海、大気汚染で青空がない街、戦争、飢餓」などの世界各地で起こっている悲しい現実社会の写真から、「本当の幸せとは何か、社会はどうあってほしいのか」について考え、絵を描くことで子どもたち自身が幸せや実現するための行動を考えた。また、読書感想画と関連させた単元デザインだったので、「それしかないわけじゃないでしょう」という絵本を読み、幸せな未来に必要なことを発想できるようにした。子どもたちの振り返りでは、「差別や偏見がない、そして、森や川は自然豊かな風景を描きました。」「絵には違う国の子どもたちが、仲良くいじめのない、楽しく遊んでいる姿を描き、四つ葉のクローバーの絵には、『みんな違って、みんな良い』という気持ちをこめました。」「11番の住み続けられ

るまちづくりを、15 番陸の豊かさも守ろうの観点から、家を持つことができ、食べ物が十分にある人とその近くに自然が豊かで植物が生えている場所があると良いと思い、描きました。植物などが豊富にあるため、空には鳥が飛んでいます。また虹は空がきれいで、空気も汚れていない風景を表しています。未来は、このようになってほしいと改めて思いました。」のような記述が見られた。SDGs と関連させたことで、自分たちが生活している社会と世界の本当の社会の違いを理解することができ、広い視野で物事を捉えることができるようになった。



3 ESDによる「変容の視覚化」の手法

【ESDに関するアンケート結果の変容について】

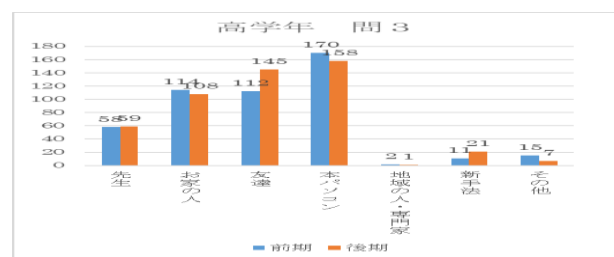
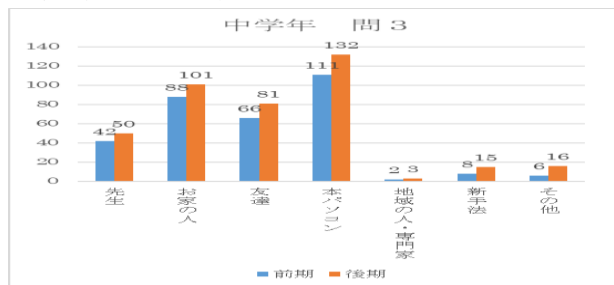


・すべての項目において漸増、増加した。特に、問1「自分でめあてや課題をつくり、自分から進んで学習に取り組むことができましたか」問2「学習を進める中で、新しいめあてや課題を見付け、解決方法を改善しながら学習しましたか」問9「季節の生き物などに興味をもって、気付いたことや見付けたことを発表したり、観察カードに書いたりすることはできましたか」において、顕著な増加がみられた。

【考察①】

iPad を活用した授業を行う中で、「自分で調べることが当たり前になり、学習に対して自主的に臨む姿・意識の変容が見られてきた。また、ロイロノートの活用で友達と自分の考えを共有する学習を行ったことで、友達のやり方を取り入れやすくなったことが、課題の発見や解決方法の模索につながっていると考えられる。しかし、高学年のアンケート結果では、前期と後期の変化が大きくは見られなかった。しかし、これは ESD や SDGs の活動に高学年が中心となって取り組み続けたことで、児童の意識が前期から高まっていたことが考えられる。高学年の問13「友達と協力して、考えを出し合ったり、提案したり活動したりしましたか。」に対しては、「できて

いる」の回答が154と高く、また、この経験を多方面に活用できているという回答も多かった。ESD 推進、また GIGA スクールの取り組みの上での1つの成果が見られた部分である。



・各項目中でも、今年度変化が大きかった部分は問3である。

問3「課題を解決するために、どのような方法で学習に取り組みましたか。」に対して、中学年は全てにおいて増加した一方、高学年では「友達に相談した」が増加し、他項目が減少する傾向が見られた。

【考察②】

高学年においては、前述した問13でも、高学年は友達との活動の意識の高まりが見られた。協働学習、ICT 活用がこの結果に繋がっていると考えられる。中学年、高学年共に「地域の人・専門家に聞く」項目は非常に低く、外部講師や地域の人材活用が十分に行えていないことが子どもの意識の結果として顕れているため、外部人材とのかかわりを視野に入れた授業づくり等、教師の側の今後の課題としても取り組んでいきたい。

4 ESDによって引き出すことができた価値 (evaluation=評価)

SDGs の17の目標と各教科の内容や児童会活動を関連付けて行ったことで、学習内容の深まりや広がりが見られた。特に世界や地域の問題に関心をもつことができた。

自分の課題に対して主体的に調べたり、考えたりする姿が見られるようになった。自分の課題について友達に意見を求めたり、家の人に聞いたりしたことで一つの問題に対して複数の意見や考えがあることに気付くことができた。育成したい資質・能力の高まりと評価したい。

10 横浜市立南本宿小学校

学校教育目標

- 南本小の子 ～私たちがともに学ぶ、「緑豊かなこのまち」の学校の子どもたちを～
ともに明日をつくる子 ～つながりあう「自分たち」の思いと力で、明日の社会を変えていけると信じ、～
楽しみ学び続ける子 ～どんな時でも前向きに、楽しみながら学び続け、生き抜いていく人へと育みます～

1 学校教育目標と ESDを通して育成したい資質・能力とのつながり

本校では、上記学校教育目標を実現するために、教育課程全体で育成を目指す資質・能力として、「自分づくりに関する力」と「持続可能な社会の創造に貢献する力」を位置付けている。

また、小中ブロック9年間で育てる子ども像である「主体的に行動し、自ら学び、互いに高め合うことのできる子ども」を実現するための本校卒業時の姿として「周りの人々や環境に積極的に関わり、持続可能な社会のために自分の考えを進んで表現できる子ども」を設定した。

2 SDGs達成の担い手育成（ESD）の視点で取り組んだこと

<全校の取組>

◇年間指導計画の作成

本校では、ESDの視点の獲得のために、低・中・高学年ごとの目標を設定し、その達成のための具体の資質・能力を各教科等の学習に紐付け、系統的に各学年の年間指導計画を作成している。今年度も、年度当初の学年研究会で年間計画を確認した。

◇南本フェスティバル 2021

恒例の学校行事である教育水田活動の収穫祭および振り返りの会にあたるフェスティバルを12月に行った。これは例年、何度も通う教育水田と周囲の環境について振り返り、自分たちが育てたもち米について食べることで、実体験を伴う深い学びの機会となってきた。

しかし今年度は、教育水田活動自体は規模を縮小する形で実施することができたが、もちについて実際に食べるという活動は、新型コロナウイルス感染予防の観点から、実施を見合わせざるを得

なかった。

そこで、フェスティバルをSDGsに関する学習会の場とし、各学年に応じたテーマで学びを深める機会とした。低学年では、教育水田とその周囲の生き物との関係を知り、里山に棲む生き物にとって田んぼが重要な役割を果たしていることを理解した。また、中学年では、SDGsの17項目について学び、教育水田活動とどのようにつながっているかを考え、その価値を改めて理解した。高学年では、教育水田活動を実施する大池公園に代表される里山が、地域の環境にどのような役割を果たしているのかを考えた。学習会の最後には、ブロック内で発表し合う時間を設けた。



<学年や委員会での取組>

◇SDGs達成のためにできること（6年）

学年行事である「成長を伝える会」に向けて、SDGsに関わる学習に取り組んでいる。それぞれが、各目標の内容や世界の現状について調べ、今、最も達成すべきと考えるものを選んだ。それに関するニュースやデータを定期的に集め、問題の本質に迫りながら、解決に向けて自分たちにできることについて考えている。



◇総合的な学習の時間の課題設定（5年）

総合的な学習の時間の活動を立ち上げる際に、SDGsの目標について学習し、そこから課題を設定するという流れを取り入れた。自分たちに身近な問題については、具体的な見通しも立ちやすく、今の状況でも取り組めることから活動を始めていくところである。

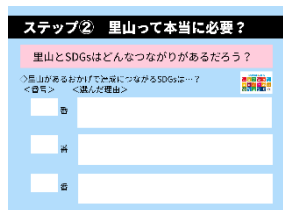
◇SDGs委員会の活動

昨年度に引き続き、水田活動と関連付けて、SDGsの17の目標の各項目を紹介するとともに、「人や国の不平等をなくそう」の実現につながる「手話の紹介動画」を作成して発表した。

3 ESDによる「変容の視覚化」の手法

◇ワークシートの活用

フェスティバルの学習会では、各学年に応じたワークシートを、ロイロノートなども活用しながら学習に用いた。



その結果、中学年では、教育水田活動とSDGsとのつながりを考えていく中で、始めは14・15番などの環境に直結する目標しか思い浮かばなかった子どもたちが、次第に「教育」や「責任」、「パートナーシップ」といった、間接的なつながりにも言及していく様子が、非常に分かりやすい形で視覚化された。高学年では、里山の価値を生態系や自然環境という視点だけでなく、まちづくりや憩いの場としての意味合いから捉え直す姿が見られた。また、教科学習とも関連付けながら学びを深めることができていた。



◇課題設定におけるSDGsの活用

総合的な学習の時間の切り口にSDGsを取り入れることで、活動のゴールやそれに伴う評価を、ESDの枠組みの中で捉えられるように工夫した。コロナ禍もあり、活動が十分に行える状況とは言い難いが、子どもたちはSDGsの達成につながる活動を考え、そのために自分たちにできることを考える姿が見られている。

◇学校評価アンケートによる関心の可視化

昨年度より学校評価アンケートに取り入れた「持続可能な社会の創造に貢献する力の育成が図れていると思うか」という項目は、今後も継続とした。昨年度については、90%近くの肯定

的な回答が得られた。今年度はまだ集計まで至っておらず、経年の変化を示すことができないが、保護者や児童のSDGsへの関心を視覚化する手立てとして、今後も活用していく。

◇発言内容や行動の比較

折に触れてSDGsの話題に触れたり、学習のテーマとして設定したりすることで、子どもたちは、次第に他の教科の学習の中でも、SDGsに絡めた発言が増えるようになった。また、教室の電気をこまめに消すなどの姿も見られている。これらを記録して比較することで、子どもたちの変容を捉えることができる。

4 ESDによって引き出すことができた価値 (evaluation=評価)

【SDGsの「自分事」化】

教育水田活動のまとめの会で、全学年が身近な場所や活動をSDGsと紐づけて考える学習をしたことで、自分に関わりのあるものとして捉えることができた。低学年では身近な自然、中学年では教育水田活動、高学年では地域の里山、それぞれの価値をどう守っていくべきかを真剣に考える姿が見られた。

また、高学年ではSDGsの話題に定期的に触れる機会を設けることで、一人ひとりが「自分なりに大切にしたい目標」をもち、より具体的な行動につなげようとする様子があった。

【ESDとICTの親和性】

今年度、全校に整備された一人一台端末は、ESDを進める上でも大きな効果を発揮している。様々な教科領域で展開されるESDに関わる学習は、学びの足跡を積み重ねて振り返ることの難しさがあった。そこにICTを活用することで、教科横断的な学習の振り返りが容易になり、評価も含めて、一貫した教育活動を行いやすくなった。また、インターネットなどを活用すれば、世界の実情に自ら触れていくことができ、SDGsに対する子どもたちの思いが高まっていく様子が見られた。

11 横浜市立みなとみらい本町小学校

学校教育目標 「みな」と「みらい」を創る子

1 学校教育目標と ESD を通して育成したい資質・能力とのつながり

学校教育目標 「みな」と「みらい」を創る子

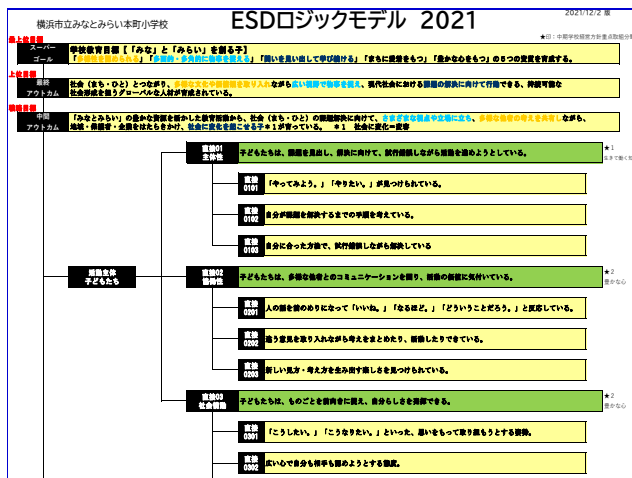
この教育目標を目指すために、5つの資質能力を身に付けることが必要と考えて取り組んでいる。

- 「多様性を認められる」
- 「多面的・多角的に物事を捉える」
- 「問いを見い出して学び続ける」
- 「まちに愛着をもつ」
- 「豊かな心をもつ」

これらを小学校で育むことが ESD につながると考えている。それぞれの目標を具体的な活動の目標として意識することが、ホールスクールで取り組む ESD になっていくと考えている。

2 SDGs 達成の担い手育成 (ESD) の視点で取り組んだこと

本校では、学校教育目標を達成できるように、必要な資質・能力をロジックツリーに表している。



学校教育目標と育てたい資質・能力を最上位目標に据えて、それを達成するための目標を立てていく。最上位目標につながる目標として、最終ア

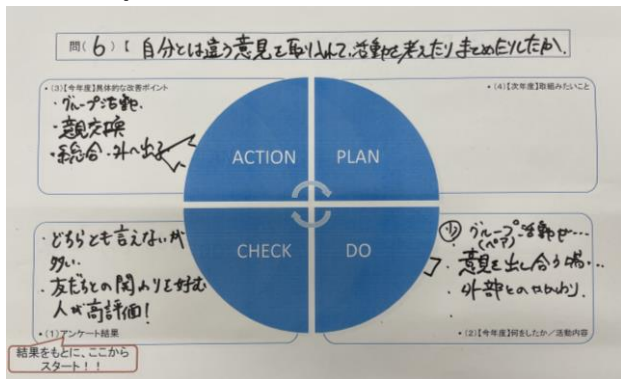
ウトカムを「社会（まち・ひと）とつながり、多様な文化や価値観を取り入れながら広い視野で物事を捉え、現代社会における課題の解決に向けて行動できる、持続可能な社会形成を担うグローバルな人材が育成されている。」とした。さらに、最終アウトカムを達成するための目標（中間アウトカム）は、「みなとみらい」の豊かな資源を活かした教育活動から、社会（まち・ひと）の課題解決に向けて、さまざまな視点や立場に立ち、多様な他者の考えを共有しながら、地域・保護者・企業をはたらきかけ、社会に変化を起こせる子とした。

中間アウトカムを達成するための目標や指針（直接アウトカム）は小学校の教育活動に直接関わるような、より具体的な内容を検討した。直接アウトカムを児童、保護者、地域の多様な人々、教職員のそれぞれの視点で話し合い、検討することで ESD につながる学校教育をホールスクールで具体化していくことができると考えている。

今年度の取組としては、昨年度の児童の声や自己評価、教師の所見を基にして直接アウトカムに足りないところや目指したい子ども像について話し合った。

話し合いは、P D C A の流れに沿って行った。まずは、CHECK（児童アンケートの振り返り）を行い、課題や成果について話し合った。問題解決の力や主体的に学ぶ姿勢に係わるような振り返りが多い中、主に友達との関わりやコミュニケーション能力、情操面に課題があった。次に、DO（なぜそのような結果になったのか）を話し合うと、学習活動ではロジックにつながるような教師の働きかけが多く挙げられたが、情操面に関しての手立ては少なかった。これらを踏まえて、ACTION を検討し、グループ活動を積極的に取り入れることや生活・総合の学習で外部機関と協働的に問題解決を行うことに、情操面のねらいも取り入れる

ことを考えた。また、主に児童に関する直接アウトカムを主体性、協働性、情動面に整理しなおした。

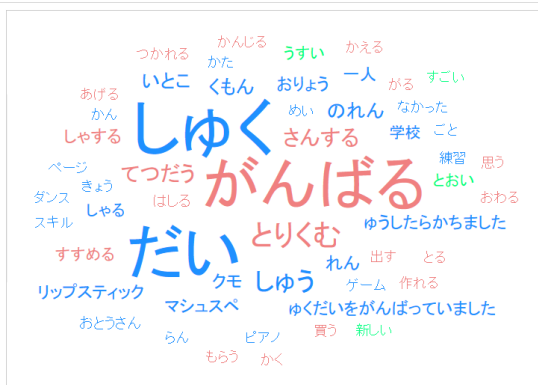
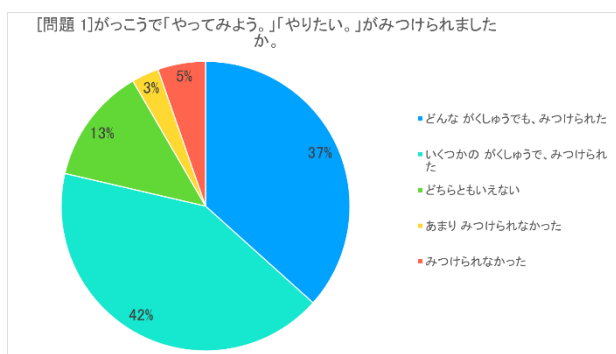


このように、ESD に向けて、教職員でロジックツリーについて検討をし続けていることが本校の取組である。

3 ESDによる「変容の視覚化」の手法

本校ではロジックツリーの作成に合わせてプログラム評価の手法を用いて、ESDの視覚化を行っている。

ロジックツリーの直接アウトカムに関連したアンケートを児童、保護者、教職員にとり数値で表したり、ワードクラウドで表したりする。教職員でアンケート分析を行う時には、主に数値化したグラフを活用して話し合いを行う。



ワードクラウドは外部に傾向を伝える時などに活用している。

4 ESDによって引き出すことができた価値 (evaluation=評価)

本校の取組には、ロジックツリーの作成、プログラム評価がある。ロジックツリーの策定を続けることで、本校児童の実態を教職員で共有したり、ESDの子ども像を具体的に考えたりすることができるようになってきた。さらに、プログラム評価の手法を取り入れることで、児童自身が身に付ける資質・能力を意識することができるようになってきた。年に2回の評価を行うことで、自分自身の変容についても振り返ることができる。

また、アンケート結果の分析からは、一人一人の資質・能力の変容も捉えることができる。これを教育活動に取り入れることで、教師の授業づくりにも活用されている。



ESD によって引き出すことのできた価値には、SDGsの指標を生活科や総合の学習、特別活動などで児童も意識するようになってきていることも挙げられる。教科学習の時間にも SDGsとの関連が子どもの声として表れているなどがある。

12 横浜市立大門小学校

学校教育目標

大門大好き いい仲間 進んで学ぼう 元気な子

1 学校教育目標と

ESDを通して育成したい資質・能力とのつながり

「地域の人、もの・ことを活かした活動を通して未来に目を向けられるようにする」という中期取組目標から「人とのつながりを通して豊かな人間関係及び未来を創り上げる人間性を育むこと」という育成したい資質・能力を設定した。地域の材をESDの観点から見つめ直し、大門の地域という資源や特色を最大限生かす中で、「人とつながる 未来へつなげる 大門小」というESDのテーマを掲げ、教職員や子ども、保護者、地域が輪となって活動を行っている。

2 SDGs達成の担い手育成（ESD）の視点で取り組んだこと

○生活科及び総合的な学習の時間

SDGsの視点を取り入れながら生活科や総合的な学習の時間を「課題解決学習」となるように活動を進めている。事例として各クラスの取組を一部紹介する。

【個別級】⑰パートナーシップの視点を意識して、自分たちが学んだことを楽しく工夫しながら1年生に紹介して仲を深めていく取組。

【1年生】繰り返し公園に行き、「秋のよさ」について気付き共有して⑮陸の大切さを学んだ取組。

【2年生】⑫つくる責任、つかう責任の視点を意識して、家で捨てるはずだった身近な物を持ち寄って、遊び方を工夫し、再利用した取組。

【3年生】⑮陸の豊かさを意識して、自然でつくられたものを大切にしたいという思いから草木染めに挑戦した取組。

【4年生】パラリンピック2020を機に誰もが過ごしやすい環境を考え、⑩不平等をなくすために自分でできることを考えた取組。

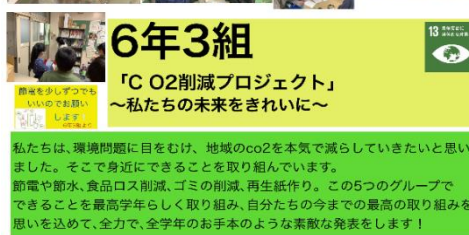
【5年生】廃棄される食品を減らすために、自分たちにできることを「生産」「加工」「流通」「消費」の観点から考え、⑫つくる責任、つかう責任の意識が高まった取組。

【6年生】⑬気候変動に課題を感じ、CO₂削減のために「食品ロス」「クリーン作戦」「節水」「節電」「再生紙」のチームに分かれて、自分たちができることを実施した取組。

また、活動の発表の場である大門フェスティバルについても、コロナ禍において相手意識や活動目的、手段等を議論し、実行委員の児童とともに、できることを考えた。そして、今回新しい取組として、タブレットを活用した「ポスター作成」と「リハーサル動画の撮影及び視聴」を行い、ペーパーレスを意識したフェスティバルを創り上げた。

○タブレットを活用したポスター作成

大門フェスティバルの各クラスの取組の紹介では「自分たち活動の魅力の発信」と「ペーパーレス」という視点をもとに各クラス1枚のポスターをタブレットで作成し、パンフレットにまとめた。データ上でいつでも児童が見られたり、最小限の印刷で掲示をしたりすることで、分かりやすく且つ環境に配慮した取組を実践できた。



○リハーサル動画視聴

コロナ禍の制限を設けたため、児童の参観数は限られてしまった。そこで、事前に各クラスでリハーサルビデオを撮影しておき、フェスティバル後、当日見られていない児童に発表を見せることができた。動画ではあったが、各クラスの取組が伝わった様子が見られた。

3 ESDによる「変容の視覚化」の手法

○振り返りカードによる子どもの変容の見取り

振り返りカードから子どもの変容を見取り、分析した。6年3組「CO₂削減プロジェクト～自分たちの未来をきれいに～」では、温暖化対策に取り組んでいるNPO法人の方の話聞いた後の気持ちの変容が記述から分かる。

【A児 B児の振り返り】

食品ロスや節電を中心に取り組んだA児やB児を見ると、世界的な環境問題に目を向けていることが分かる。はじめは、「温暖化対策は大事である」という抽象的な思いから、継続して活動を行う中で、自分事として捉えていく変容が見られた。そして、身近なところから世界的な問題に目を向けられるようになった。諦めずに粘り強く取り組む力や自分事としてとらえる力、行動する姿勢が見られるなど資質・能力に対する変容がうかがい知れる。活動ごとに丁寧に振り返りを行い、変容を価値づけることが大切であると感じた。

【A児】

って、日本のせいでちがう所へも影響をおよぼしていることが大変だ!!と思ふ。アフリカの人たちを助めてるのに日本でせいかして快適にすごしてるのはわからないと思った。

【B児】

佐藤さんはアフリカの考えているので僕もアフリカのことを考えてやる。
LEDにかえた!
アフリカ人は夏は60℃とかだから僕もアフリカの人とかのことを考えて夏をすごしていきな。

○自己の姿を分析

ESDによる変容を見とるために、本校で目指す資質・能力に沿って、児童自身が振り返られるアンケートを作成した。総合的な学習の時間の活動を本格的に始めた時期と年度末でアンケートを行い、総合的な学習の時間を中心としたESDの実践による児童の変容を見とろうと考えた。同じアンケート項目に対して、10月と2月の自分の姿を目盛りに色づけしていくことで、SDGs

に対する自己の変容を見取ることができる。また、年度末に同じ用紙に書くことで、自分の1年間の変容をメタ認知でき、次年度の課題を見つけることができる。資料1の結果は5年生のある児童の実施結果である。このクラスの取組は「難民の生活をよりよくしたい」という思いで、使い古した靴を難民に届ける活動している。10月のアンケート結果を見ると、この児童は「外国のことについてもっと知りたい」の項目が低いことが分かる。年度末にこの項目がどのように変容したかアンケートを通して見取っていきいたい。

【資料1】

1	めあてや課題をつくり、自分から学習にのぞんでいる	10月	2月
1	めあてや課題をつくり、自分から学習にのぞんでいる	10月	2月
2	苦手なことにも、ねばり強く取り組んでいる	10月	2月
3	友達の見解をよく聞き、友達の見解を受け入れたり一緒に考えたりしている	10月	2月
4	学校や地域のために自分にできることがある	10月	2月
5	新しい課題や方法にもチャレンジできる	10月	2月
6	ちがう学年の人とも協力したりかわりあったりすることは大切だ	10月	2月
7	世界の問題は、ぼく・わたしの生活にもえいきょうする	10月	2月
8	なるべく資源のむだづかいはしていない	10月	2月
9	まずしさのない平等な世界にしたい	10月	2月
10	わたしは自分の住んでいる地域の人たちのためになることをしたい	10月	2月
11	外国のことについてもっと知りたい	10月	2月
12	未来の世界でも今と同じように生活したい	10月	2月
13	地球環境をまもるために自分にできることをやりたい	10月	2月
14	ある一つの問題に対して、いろいろな意見や考え方があ	10月	2月
15	自分の学校で何か問題があれば私はその問題を、みんなといっしょに協力して解決できる	10月	2月
16	ぼく・わたしはSDGsを達成するために協力する責任がある。	10月	2月

4 ESDによって引き出すことができた価値 (evaluation=評価)

- <児童アンケート結果から見えてきた価値>
- ・地域や世界の問題に関心をもつこと
 - ・諦めずに粘り強く取り組む力
 - ・協働して問題解決しようとする力
 - ・一つの問題に対して複数の意見や考え方があること
 - ・自分に気づくこと
 - ・自分事としてとらえる力

継続したESDの教育活動によって、子どもたちの資質・能力に変容が表れてきていると感じている。これからも身近な問題を見つめたり、関心をもったりして、友達や地域の方とつながり、「今、自分たちにできること」を考え、未来へつなげていく取組を大切にしたい。

13 横浜市立中和田中学校

学校教育目標

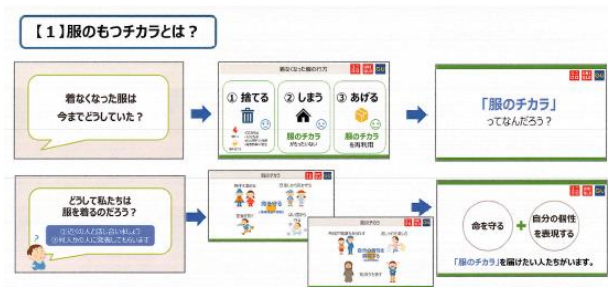
自ら学び、自他を大切にして、社会に貢献する生徒を育てます

1 学校教育目標と ESDを通して育成したい資質・能力とのつながり

具体的な課題の発見・探求・解決の過程で生徒自らが持続可能な社会づくりに関する価値観を身に付け、自らの意思を決定し、行動を変革していくことができるようにする。

2 SDGs達成の担い手育成 (ESD) の視点で取り組んだこと

ユニクロの“届けよう、服の力”プロジェクトに参加することで、多くのことを学ぶことができました。まず、事前学習のためにユニクロが作成したDVDで、“服のもつチカラ”、服を必要としている人たち“難民”について学習し、SDGs目標3の『すべての人に健康と福祉を』や目標10『人や国の不平等をなくそう』について考えるきっかけとすることができた。



実際に使わなくなった子ども服を集めて、必要としている国や地域へ送ることを通して、SDGs目標12の『つくる責任・つかう責任』や自分たちだけでは解決できないことも、多くの企業や仲間との協力でやり遂げようとするSDGs目標17の『パートナーシップで目標を達成しよう』といった様々な視点で物事を考えることができた。

3 ESDによる「変容の視覚化」の手法

ユニクロの“届けよう、服の力”プロジェクトの事前学習でユニクロが作成したDVDで、“服のもつチカラ”、“難民”について学習したあと、感想文を書くことで、自分たちが感じたことや今後の取り組みについて主体的に活動するきっかけとなった。

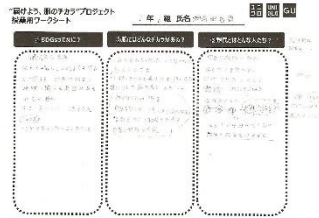
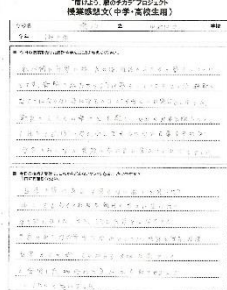
“届けよう、服のチカラ”プロジェクト
授業感想文(中学・高校生用)

学校名	立	学校
学年		

■ 今日の授業を受けて感想や学習などに気づきを書いてください。

■ 今日の授業を受けて、これからどんなアクションを起こしたいですか？
箇条書きで書いてください。

生徒の感想文からは“難民”について学習することを通して、服を届けるということだけでなく、自分たちに出来るSDGsは何か、自分たちの身の回りのことを見直したいなどという意見が見られた。



4 ESDによって引き出すことができた価値 (evaluation=評価)

本校では“届けよう、服のチカラ”プロジェクトに平成29年度に参加をしました。それ以降、毎年参加しているのではなく、今までに参加した生徒がゼロになった今年度、あらためて参加することを決めました。事前学習を通して、“服のちカラ”や“難民”について学習しました。“服”という普段の生活の中で必要不可欠なものをテーマとしたプロジェクトは『当たり前』が『当足り前ではない』ということを考えさせられるきっかけとなりました。生徒会が中心となってポスター作り、呼びかけ、回収、発送とすべての作業を生徒が行い、以前の実施とは異なり、本校だけの取り組みとせず本校に進学してくる周辺小学校にも取り組みについて賛同していただき、服の回収などに協力していただきました。自分ひとりでは難しい課題も、学校や地域、そして企業など様々な人たちと協力をする事、パートナーシップの大切さを学びました。



服のチカラプロジェクト

in 中和

2021.10.4 ~ 2021.10.15

宣伝

生徒会本部がポスターを作り掲示しました。

回収

10月4日から「職員室前」「一年生フロア」「生徒会室前」に箱を2箱ずつ設置し、11日間回収しました。



集計

生徒会本部と先生で協力して集計しました。1枚1枚数えました。「かわいいー」や「ちいさーい」などの声もありました。

今回集まった服の合計は

1110着

生徒会本部も予想をたてました。

皆さん本当にご協力ありがとうございました!!

14 横浜市立西本郷中学校

学校教育目標

自ら挨拶、自ら判断、自ら行動、人とのつながりを大切にする思いやりある西本中生

1 学校教育目標と

ESDを通して育成したい資質・能力とのつながり

時代の変化を先取りし、持続可能な社会の創り手となることを意識し、自らできることを考え実践する力

「コミュニケーション能力」

「つながる力」

「自ら判断して行動する力」

「多様性の尊重」



2 SDGs 達成の担い手育成 (ESD) の視点で取り組んだこと

①自分たちの住む地域の防災対策について考え、地域の人とつながろう。

ステップ1 災害想像ゲーム

1年生の総合的な学習の時間を使って、グループに分かれ学区内の地図を活用し、災害想像ゲーム（災害時にどのように避難するかを試行錯誤する）を行った。地震、水害時に身近な地域の危険はどこにあるかを検討した。検討結果は模造紙に図示し、グループで出た考えをクラス内で発表しあい、身近な地域の危険箇所をあらためて意識し、共有することができた。

ステップ2 地区懇談会

地区懇談会で1年生の各クラスの代表者が、災害時の危険性をプロットした学区内地図を用いて、発表した。懇談会に参加した地域の方からは、生徒視点では気づかない危険性について、すでに経験したこの地区の危険性の特徴について重要な示唆をいくつもいただいた。参加した生徒は地区懇談会の内容を各クラスにもってかえり、共有した。

②西本郷中として取り組めることを考え行動する。

ステップ1 緑の募金運動

公益社団法人「かながわトラストみどり財団」の実施する「緑の募金運動」に参加。生徒会本部役員が2週間にわたり、登校時に募金協力を呼びかけた。



ステップ2 「植えて楽しい！咲いてうれしい！チューリップの球根栽培体験」に応募

株式会社グリーンファームの行っている取り組みに申し込んだ。見事当選し、チューリップの球根を100個いただいた。

ステップ3 学校の緑化に向けて手入れ

生徒会本部役員が中心となって周囲に呼びかけ、定期的に中庭の花壇の手入れを行った。学校の花壇に一年中花が咲いているように、植える植物についても話し合った。その結果、いただいた球根と合わせて、緑の募金運動で集まったお金の一部で芝桜を購入した。レイアウトや植える時期も考え、有志で集まった仲間とともに、中庭の花壇に球根や芝を植えた。



③多様性の尊重、コミュニケーションの意識

ステップ1 国際平和スピーチコンテストへの参加

SDGs 17の観点から、自分にできることは何か考え、3年生全員が国際平和スピーチコンテス

トの原稿を書いた。持続可能な取り組みについて自分の考えを深めた。

ステップ2 訪問授業

栄区人権協議会同時開催でセーブ・ザ・チルドレンの方を招き、「子どもの貧困について」講話をいただいた。地球規模の課題を身近なこととしてとらえ、これから自分にできることは何か考えるきっかけとなった。



ステップ3 人権作文の朗読を聴く

昼食時の放送の時間を利用し、校内優秀作品に選ばれた5人の人権作文を朗読。他人の考えを聴き、自分と他者の考え、捉え方の違いを知り、多様性について理解を深めた。

ステップ4 人権ツリーの作成

これまで学習してきた自他の「人権」を大切にする視点をもって、よこはま子ども会議のテーマ『居心地のよい学校づくり』を生徒全員で考えた。そのために自分ができること、やりたいことをカードに記入し昇降口に掲示した。全校でシェアリングし、日々の生活の中にある「人権感覚」を磨いていくきっかけとした。



④横浜市温暖化対策について理解を深め、学校で取り組めることを考え提案する。

ステップ1 横浜市温暖化対策統括本部の出張授業

グーグルの提供する温室効果ガス排出量可視化ツールEIE (Environmental Insights Explorer) を活用した授業を1年生全4クラスで実施。講師は横浜市温暖化対策統括本部課長の宮島弘樹さん、社会科の授業を2コマ利用し、1時間目は地球温暖化の概要。メカニズムを知り、2日目は横浜市として

温室効果ガスを減すことができる分野はどこにあるのかを考えるというテーマで講義してもらった。一人一台のクロームブックで、EIEツールを活用し、横浜市ではどのくらい温暖化効果ガスが排出されているのか、自動車などからの排出量はどうなっているのか、もし、建物の屋上に太陽光パネルを設置したら、どのくらい排出量が減るのかなどを確認した。授業の中では、排出量を減らすにはどうしたらよいか、まず班で討議し発表、その後は個人で質問、発表した。横浜市は人口が多いので、家庭からCO₂が排出される割合が他都市に比べて多いことを認識した。

ステップ2 環境活動家の講演会

全国の学校を回り、「気候変動の危機」などの講演を行っている大学生に本校に訪れていただき、同世代の立場から、世界規模の課題をどう自分ごと化していくかのモデルを提示してもらった。

3 ESDによる「変容の視覚化」の手法

12月に学校評価アンケートを実施した。その中の「西本郷中学校はSDGsの取組に積極的である。」という質問に対し、全校で8割近い生徒が、「そう思う」「大体思う」という回答を得た。学年別にみると、1・3年生が「大体そう思う」と「そう思う」がほぼ同じ数なのに対し、2年生は「そう思う」が2倍多い結果となった。

4 ESDによって引き出すことができた価値 (evaluation=評価)

3年生からは、「僕たちには大きなことはできない。けれども、小さなことはできる。」などの声とともに、今まで行ってきた活動に加え、新たな活動案として“お残しゼロキャンペーン”や“いたち川清掃”といった、地球規模の課題を、自分ごと化として主体的にとらえている様子をうかがうことができた。

Think globally, act locally.

15 横浜市立西柴中学校

学校教育目標 共に学び、たくましく、豊かな心をもった生徒を育てます

1 学校教育目標と

ESDを通して育成したい資質・能力とのつながり

- 世界に目向けることで、国際理解・国際協調の意識を持ち、多様性を尊重できる豊かな心を育む。
- 自ら課題を見出し、学び続ける姿勢を育成する。
- まちに愛着を持ち、コミュニケーション力を高める。

2 SDGs達成の担い手育成（ESD）の視点で取り組んだこと

▽JOCA国際理解教育

「100人村ワークショップ」の体験（2年）

「キャリア教育講話」（全校）

ケニアの海外協力隊の体験から

▽WFPチャリティーエッセイコンテスト2021

世界の貧困・飢餓についての学習後、エッセイの制作（全校）

▽SDGs達成のための課題解決学習（3年）

3年生が総合的な学習の時間を使って、17のゴール（目標）の中から8のゴールを選択して、今日の課題・解決に向けての手立て・目指すべき姿について探求していきました。



○1 貧困をなくそう 2 飢餓をゼロに

貧困な国、飢餓が多い地域を調べ、課題をみつけた。その中でコロナ感染症の影響から貧困が起きていることが新たな発見としてあった。そのデータを利用してアンケートや映像発信に取り組んだ。企業の取組を調べて、基金活動での援助

を知り、学校の自動販売機への導入を目指した。

○4 質の高い教育をみんなに

「質の高い教育がなぜ必要か」「他国の現状・課題」「日本の教育の歴史」「日本の教育の課題と解決方法」を今日の課題として調べ、プレゼンにまとめた。また、わかりやすい劇にして発表した。

○5 ジェンダー平等を実現しよう

男女格差をいろいろな角度から調べ、プレゼンにまとめた。LGBTQに対する意識調査を行い、掲示物としてまとめた。

○6 安全な水とトイレを世界中に

「世界の安全な水」と「トイレの普及」「企業の取組」について調べて、プレゼンにまとめた。SDGsデザインセンターの方と交流をした。

○12 つくる責任つかう責任

持続可能な消費と生産のパターンを確保することにアプローチして、廃材から様々なものをリメイクした。無駄のない生活について調べて、デジタルマガジンとしてまとめた。

○14 海の豊かさをまもろう

15 陸の豊かさをまもろう

海の今日の課題、森林の今日の課題を調べて、意見交換をして、スライドにまとめた。



▽外国語教育

絶滅危惧種について調べ、レポートにまとめた。調べる中で、様々な環境問題が起因となっている事を知り、SDGsへの理解を深めた。

3 ESDによる「変容の視覚化」の手法

▽SDGs達成のための課題解決学習前

- ・世界の多くの場所では、私たちが当たり前のように過ごしていた毎日とまったく違う生活をしていて、自分の生活を改めるべきと思った。
- ・政治、経済、社会の中で、女性も男性と同じように権利をもって、また、リーダーになることができるか。
- ・発展途上国は衛生環境が悪く、手洗いの習慣がない。水道の設備がない暮らしをしているのは22億人。2030年までに、すべての人が安全な水とトイレを利用できるか。

▽SDGs達成のための課題解決学習後

- ・「飢餓をゼロ」では貧富の差が問題になっている。太りすぎの人と栄養不足の人の差は、貧富の差とも関係している。
- ・職種、育休制度、ICT産業などに男女格差がみられる。日本は世界からも先進国の中でも遅れている。
- ・当たり前が当たり前ではないことに気づいた。地球上の99.9%の水は手を加えないと安心して飲める水にならないことから、手を加えなくても飲める水にできるような機械を作り出すことで水問題が改善されると考える。

4 ESDによって引き出すことができた価値 (evaluation=評価)

▽SDGs達成のための課題解決学習の取組から生徒が実感した意識変化

生徒A・私は一人ひとりの行動の重大さを学びました。現在、SDGsで達成しようとしている課題には、プラスチック問題や食品ロスなど私たち人間の行動によって大きな課題となっているものがあります。これらの課題には一人ひ

とりの行動の改善によって解決していくべきではないでしょうか。すぐに結果は出ないかもしれませんが、今までそれぞれのグループが発表してくださった具体的な取組を今から積み重ねていけば、目標達成に少しずつ近づいていくと思います。

生徒B・私は今回の学習を通して、今の自分にも「できることはたくさんある」ということに気づかされました。また、行動を起こさなければならないと感じました。世界の現状を知るだけでなく、そこから自分のできることを考え、小さいことからでも、行動に移していきたいと思います。(学年学習発表会后)

▽SDGs達成のための課題解決学習取組後の生徒の変容

17のGoal(目標)から興味をもったGoalを選んだ。その8のGoalを6グループで、現状・解決・発表方法を考えた。

最初にインターネット等で調べたり、意識調査を行ったりして、現状について考えた。6グループとも、内容に沿った学習を行っていた。「なぜ」という疑問から解決への手立てや発信の仕方を考えた。進めていく内に、「1つのGoalを達成できると、複数のGoalの達成に近づく」ことに気がついた。日本は多くのGoalの達成に近づいているが、改善する必要があるものや達成するためにはかなり難しいGoalがあることも知った。

まずは「より多くの人がこの現状を知ること」が、「私たちができる第一歩だ」とわかった。

▽SDGs達成のための課題解決学習取組に有効であったこと

この学習に至るまで、GIGA構想の取組が有効であった。各教科で、chromebookを使った授業が進められていたため、生徒が操作に慣れていた。グループ・学年単位でのClassroomを作成し、積極的に活用した。職員も研修を重ね、操作方法などの情報共有を進めた。

グループごとの担当者が各自でアイデアをもって進めたことが、生徒に大きな影響を与えた。

1 学校教育目標と ESDを通して育成したい資質・能力とのつながり

なかよく ふれ合いを大事にする子

かがやいて自分らしさや自分の可能性を高める子

お互いに高め合う子 友達のよさを認め合い、学び合える子

- コミュニケーションをとる力・・・自分の気持ちや考えを伝えるとともに、他者の気持ちや考えを尊重し、積極的にコミュニケーションをとる力。
- 進んで参加する態度・・・集団や社会における自分の発言や行動に責任をもち、自分の役割を理解し、ものごとに主体的に参加しようとする態度。
- 多面的・総合的に考える力・・・ひと・もの・ことを多面的・総合的に考える力。
- 問いを見出して学び続ける力・・・ひと・もの・ことから問題意識をもち、よりよい社会を創ろうとする力。

2 SDGs達成の担い手育成（ESD）の視点で 取り組んだこと

昨年度は、ESDについて学ぶ“初年度”として、「知ること」から始めた。その中で、ESDの視点に立って普段の授業を見直すことで、より子どもたちの未来につながる、実態を踏まえた単元づくり・授業づくりを行うことの大切さが見えてきた。

今年度は、昨年度見えてきたことを生かすために重点研究主題を「持続可能な未来を創ろうとする子どもの育成」とした。「ESDの構成概念を意識した単元づくり」「問題解決に必要な能力・態度の育成を目指す学習過程」をそれぞれ主題に迫るための視点として設定し、重点研究を軸にESDについて深めていくことを目指した。

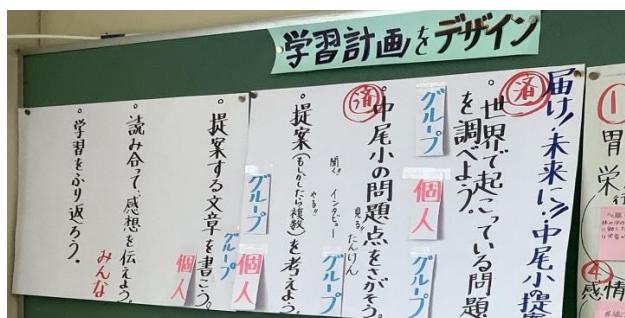
また、昨年度末に4・5年生で行った委員会活動についての話し合いで、「SDGs委員会を作りたい。」という子どもの発案でSDGs委員会が発足し、活動を始めている。

【事例1】6年(国語科)「届け！未来に！！中尾小の提案『私たちにできること』」

提案する文章を書く単元で、SDGsの17の目標の中から、子ども一人一人が関心の高い目標を選び、身の回りにある問題と関連付けながら自分たちにできることを提案した。

ESDの構成概念は、一人一人がSDGsの達成において果たすべき責任に気付き、自分に何ができるか考えてほしいという“責任性”を、**問題解決に必要な能力・態度**は、自分も相手も納得できる提案文にしていくためにグループで話し合いを重ねるための“伝達”をねらいとした。

子どもたちは、関心のあるSDGsの問題について詳しく調べ、自分事として考えながら、自分たちにできることについてまとめていた。また、自分たちだけではなく、中尾小学校全体に広めていく必要性を感じ、校内に提案文を掲示することで周知していこうと考えていた。



【事例2】5年(総合的な学習の時間)「Plus Voiceで発信！～パラリンピックの魅力を伝えよう～」

2021年の夏に開催された東京オリンピック・パラリンピックを終えて、パラリンピックの放送が少なかったことに問題意識をもち、「パラリンピックの魅力を伝えたい。」と活動が始まった。

ESDの構成概念は、パラリンピックの魅力を考えていく中で、性別の違いや障がいの有無に関わらずに楽しめるパラスポーツの良さに気付いてほしいという“多様性”を、**問題解決に必要な能力・態度**は、パラリンピックの魅力について話し

合う中で、歴史的な視点や競技性、体験した経験、選手だけではなく伴走者や装具技師等の関わる人々、様々な視点から考えることができるようになるための“多面”をねらいとした。

子どもたちは、パラリンピックの歴史や種目等の基本的な情報を調べたり、実際に体験できそうな競技を体験したりすることを通して、魅力や良さについて考えていった。それを踏まえて話し合い、「公平性」「競技性」「協力性」の3点が魅力だと考え、校内に広めていく活動を続けていった。



【事例3】SDGs 委員会「食品ロスをなくそう」

今年度発足したSDGs委員会は、“食品ロス”について重点的に取り組んだ。横浜市資源循環局と協働して、家庭で使い切れない食料品を集め、食料品を必要としている人へ配る「フードドライブ」の活動を行っている。

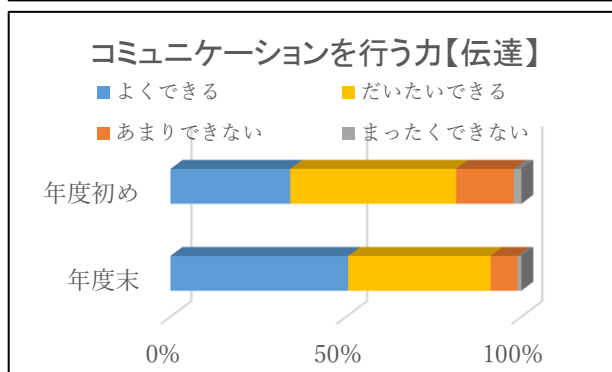
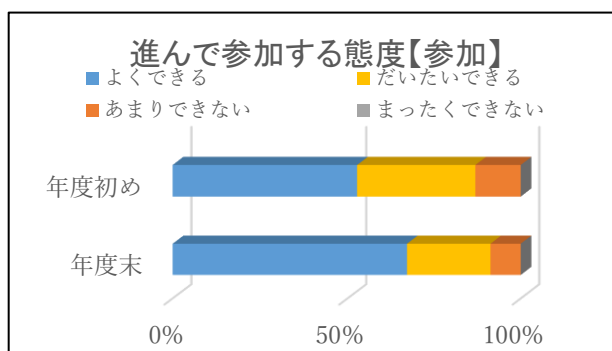
SDGs委員会のメンバーで、開催方法や広報活動について話し合い、当日に向けて準備に力を入れた。その結果、247個(約48kg)の食料品を集めることができた。

今後もフードドライブ活動を定期的に行い、地域と連携しながら“食品ロス”問題に取り組んでいこうと意欲が高まっている。



3 ESDによる「変容の視覚化」の手法

今年度は、ESDを重点研究の中心に位置付けて取り組んだ初年度となる。そのため、年度の初めと終わりで子どもたちの意識調査を行い、比較がしやすいと考える。同じ項目で子どもたちの意識の変化を比べ、グラフで表す。



(第2章に質問紙を掲載)

昨年度の意識調査の結果からは、いずれの項目でも意識や能力・態度の向上が見られた。今年度の結果を、来年度につなげていけるようにしていく。

4 ESDによって引き出すことができた価値 (evaluation=評価)

昨年度、「知ること」から始めたが、今年度は、その知ったことを「行動すること」「発信すること」へと歩みを進めることができたように思う。事例として挙げた高学年の学習を見ても分かる通り、子どもたちのより主体的な学び、創造的な活動を行っていくことができた。

今後は、子どもたちが自分たちの活動の効果や成果を実感できる指導や手立てを考えていくことで、さらに「調べたい」「伝えたい」「行動したい」「続けたい」という意欲や、活動の質の高まりが期待できると考える。

17 横浜市立本牧中学校

学校教育目標

見つけ

認め

高める

School Inclusion～私たちの居場所～ふるさと本牧

1 学校教育目標と ESDを通して育成したい資質・能力とのつながり

見つけ

→物事や事象、人（他者や自分）をクリティカルに捉えたり、客観的・俯瞰的に把握したりする力を伸ばす。

認め

→物事や事象、人（他者や自分）について、多面的・総合的に考え、それぞれの関連性やつながりを尊重する。

高める

→他者と協力しながら活動を行う中で、コミュニケーション力を伸ばし、進んで参加する態度を伸ばす。

2 SDGs達成の担い手育成（ESD）の視点で 取り組んだこと

見つけ

現状の課題を生徒目線で把握する

（1）生徒会本部役員主導によるSDGsの周知

今年度、生徒会本部役員はSDGsを全校生徒により身近に感じてもらうために、全校集会で「SDGsクイズ」を行った。特に本校では「SDGs 11 住み続けられるまちづくりを」を合言葉に現行の校則と実生活におけるギャップを、全校アンケートの実施によって視覚的に捉え、教員と生徒会本部役員が協議するなどして改善に取り組んできた。



認め

新聞から様々な考え方を学ぶ

（2）朝日新聞社による出前授業

朝日新聞発刊「朝日SDGsジャーナル」を用いた朝日新聞社の出前授業を行った。日頃、新聞をあまり読まない生徒たちが、「ペタッとSDGs」を貼っていくことで、内容を17のターゲットに分類しながら読むことができた。

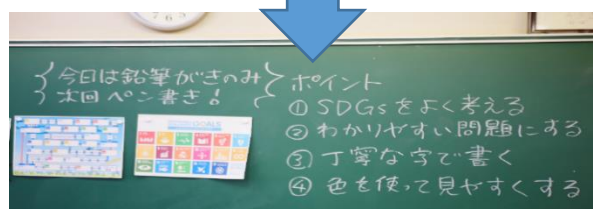


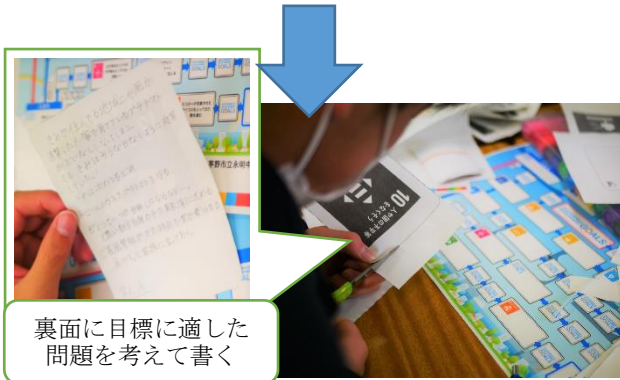
高める

課題の達成のために協力し合う

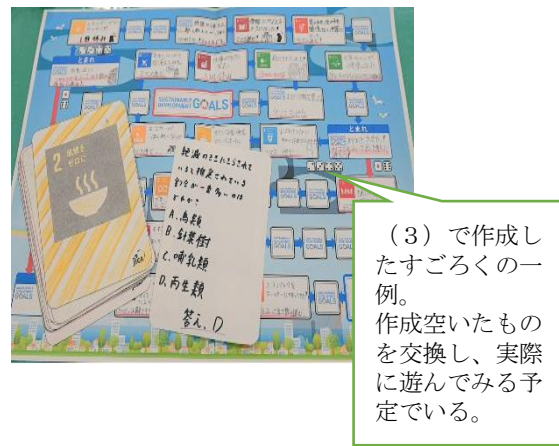
（3）総合的な学習の時間におけるSDGsの 取り組み

総合的な学習の時間でSDGsについて知る発端になることを目的として、国際連合広報センターが作成した「Go Goals」ですごろくを行った。その後、各学年、クラスごとにグループとなって、それぞれが問題と考えている出来事を白マスに書き入れ独自のすごろくを作成した。





裏面に目標に適した問題を考えて書く



(3)で作成したすごろくの一例。作成空いたものを交換し、実際に遊んでみる予定でいる。

(4)「いじめ防止市民フォーラム」への参加

本校は地域一丸となった教育を目標として、本牧地区中学校・小学校を2中4小ブロックとして捉え、児童・生徒を育てている。今年度は2中4小の各校の代表生徒が、いじめのない学校づくりのために取り組んでいることを横浜市役所で発表した。



今年度生徒会目標「Revolution」

4 ESDによって引き出すことができた価値 (evaluation=評価)

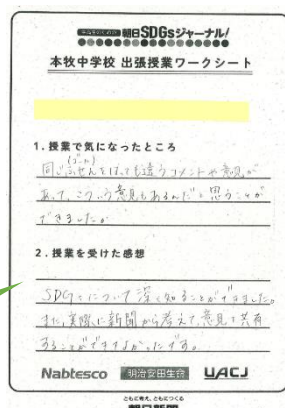
「(1) 生徒会本部役員主導によるSDGsの周知」においては、全校にアンケートを行うアンケート用紙に裏紙を使いたいと生徒から要望があったり、「(3) 総合的な学習の時間におけるSDGsの取り組み」においては身近な事柄からインターネットを用いて知った世界的な事柄まで、様々な視点で問題を見つめたり、「(4)「いじめ防止市民フォーラム」への参加」においては、2中4小ブロックとして校種を超えた交流を行い、昨年度に引き続き【多面的・総合的に考える力】【コミュニケーションを行う力】【他者と協力する力】などに関連した力が現れていた。

3 ESDによる「変容の視覚化」の手法

「変容の視覚化」として、今年度も昨年度同様に①生徒の表現（コメント・文章・発表など）の可視化、②振り返りやフィードバックを重視した。



(2)で作成した新聞の可視化の一例。廊下に掲示し、意見の共有を図った。



(2)の授業のフィードバックの一例。

加えて、ESDによる変容の視覚化を図ることによって自らが行ってきたことを振り返ることができるため、教師側から声かけを行わなくても自発的に自らを省み、次回はこのように改善をしたいなどと具体的な声がかかるようになった。

今後は生徒会活動を核としながら、全校生徒への推進を図るとともに、教科指導をはじめ全教育活動においてESD推進を意識した取り組み行っていきたい。そのため、生徒による取り組みを「見える化」し発信力を高め、学校全体で取り組んでいく意識と、前向きに取り組める環境を作っていきたい。

18 横浜市立小田中学校

- 学校教育目標 1. 個性が発揮できる学校生活（知） 自ら学び、自分らしさを発揮し、生きる喜びを実感できる生徒を育てます。
2. 誰もが尊重される学校生活（徳・体） 自らの心と体を健やかに育み、互いの立場を尊重しあえる生徒を育てます。
3. 地域とともにつくる学校生活（公・開） 地域との交流を積極的に進め、地域の一員としての自覚を育てます。

1 学校教育目標と

ESDを通して育成したい資質・能力とのつながり

ESDを通して育成したい資質・能力は、

- ・コミュニケーション力
- ・課題発見・問題解決力
- ・持続可能な社会の創造に貢献する力

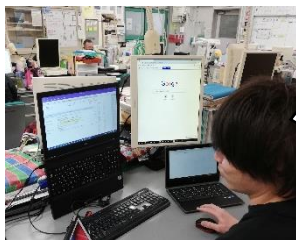
である。

本校では、真面目に落ち着いて学習に取り組むことができる一方で、自ら積極的に学んだり、自分の思いや考えを表現したりすることに課題がある生徒が多い。ESD という視点から教育活動を振り返り、改善していくことで、教職員や生徒の行動変容を目指している。

2 SDGs達成の担い手育成（ESD）の視点で取り組んだこと

(1) まずは教職員の働く現場を持続可能に！

ESDを推進していくためには、まずは教職員がいきいきと働く必要がある。そのために、校内で働き方改革のプロジェクトチームを作り、それぞれの職員の「強み」や「好き」を生かした活動を行った。コロナウイルス感染症によって向き合わざるを得なくなった教育活動の見直しや改善には、やはりエネルギーが必要である。しかし、自分の得意な分野で実施できる体制や雰囲気を作ることで前向きに取り組めるようになった。



複数画面で作業ができるので、比較・参照・点検などで作業効率UP♪

職員室内に会議・作業スペースを新設。日々使わない資料は別室へ。

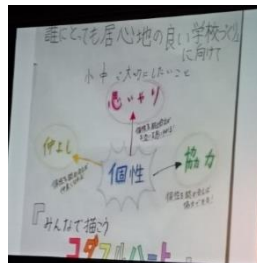


(2) 生徒がつくる創立 30 周年式典

今年度、小田中学校は創立 30 周年を迎えるため、併設校の小田小学校とともに、合同の 30 周年式典を行った。式典では、小田小中の過去を振り返ることによって現在へのつながりを再確認した。さらに、より良い未来を作っていくために現在行っている取組を紹介した。どれも ESD にかかわる内容であるが、いくつか注目すべき活動を取りあげて紹介する。

①小中の合同スローガンづくり

毎年新しい生徒会本部が立ち上がると、どんな学校を作りたいのかをスローガンにし、そのシンボルとなるモニュメントを作っている。今回のスローガンである「みんなで描こうコダフルハート」は、昨年度から次のリーダーとなる小学校 5 年生と中学校 2 年生が合同で話し合いを行い、作成されたものである。



このスローガンの実現に向けて、各専門委員会や学級でさまざまな取組が行われた。今までは、生徒会本部といった一部の人たちで行われていた活動が、「自分たちはどんな学校を作りたいのか」とみんなで話し合い、目指すものをみんなで共有したことで、「自分たちの学校をより良くするのは自分たちだ」という意識につながっていった。

②小田ファンディング

個別支援学級が行った、返礼品付きの募金活動。本校の個別級は、担任が国際協力の活動をしている

たこともあり、授業のなかでも SDGs を積極的に取り扱っていた。生徒のなかから「私たちにできることはないのか?」「自分たちも人の役に立ちたい」という想いを拾い、募金活動を立ち上げた。



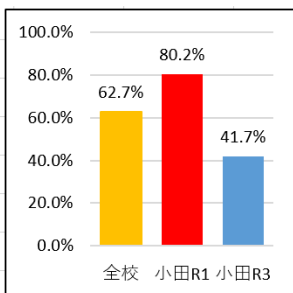
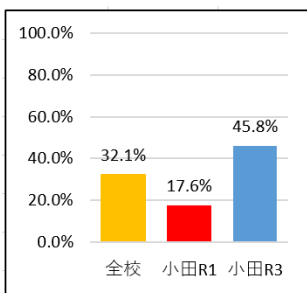
返礼品のポーチとキーホルダー

この活動で特筆すべきなのは、生徒が募金先を吟味して選んだこと（募金先は難民の障害者を支援している AAR Japan）、募金を集めるために、お菓子の袋やペットボトルキャップをアップサイクルして作ったポーチやキーホルダーを返礼品とすることで、プラスチックごみの活用にもなっていることがある。さらに、その広報活動を生徒会本部にも協力を依頼することで、全校へ活動が広がっていった。今後は募金先である AAR Japan を訪れ、ボランティア活動を行う予定である。

3 ESDによる「変容の視覚化」の手法

①教職員のストレスチェック

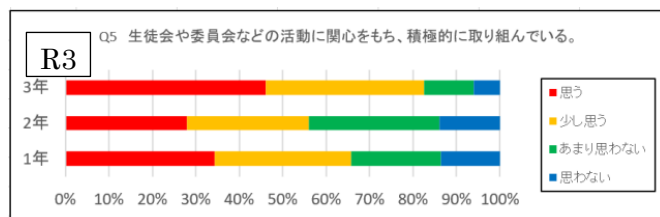
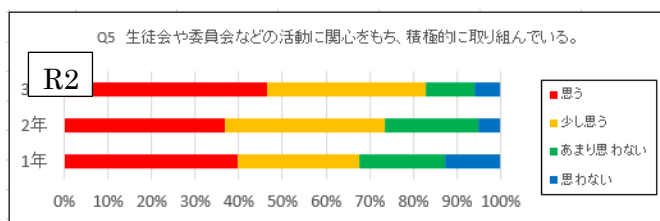
ESD 推進のためにも、子どもたちに接する教職員が生き生きと働ける職場にするために、その変容を視覚化する方法としては毎年実施しているストレスチェックを取り上げたい。グラフ左の質問は「職場には、過去の慣習・既存ルールにとらわれることなく、柔軟に考えることが推奨される雰囲気がある」で、右の質問は「仕事をするうえでストレスを感じていますか」であり、どちらも肯定的に答えている割合を表している。



「ESD 推進は大切だと思うけど、ちょっと負担…」という状態から、「これも ESD につながるはず! やってみようかな!」と思える職場にするために、管理職はもちろん、教職員や事務職員・技術員などチーム小田で努力した成果である。

②学校評価アンケート

ロジックモデルの作成も試みたが、現状であるアンケートを活用できないかと考え、毎年行っている学校評価アンケートを活用・分析した。「生徒会や委員会などの活動に関心をもち、積極的に取り組んでいる」という項目では、3年生は昨年度よりも向上したものの、2年生は昨年度より悪化する結果となってしまった。



この原因は、生徒会や委員会活動の改革の中心となったのが3年生であり、下級生にまで活動が広がらなかったことが考えられる。また、その他のアンケートでも、アンケートをとるタイミングによって結果に変化が出てしまうことを確認している。次年度の課題としたい。

4 ESDによって引き出すことができた価値 (evaluation=評価)

ESD をきっかけに「このままでいいのか?」「これを本当に続けることはできるのか?」など、日々の教育活動を見直すことにつながっていると感じている。さらに、それが結果として数値に現れなくても、生徒の反応から SDGs を身近に感じるとともに、育成したい資質・能力の成長につながっていることがわかった。

19 横浜市立中川西中学校

学校教育目標

「自立と貢献」「健康と思いやり」「対話と融和」

1 学校教育目標とESDを通して 育成したい資質・能力とのつながり

本校の教育理念である「自立と貢献」「対話と融和」を達成するために、問題解決型・参加型体験を通し、個々の生徒に適した生きる力の育成に努めた。コロナ禍の限られた中ではあったが「主体的・対話的で深い学び」である、調べ学習やグループ討論などの手段を各教科で用いて学習する機会を設けた。活動を通して、コミュニケーションの大切さを感じることができた。また、身近な問題から世界へと視野を広げ、自ら考えることを積極的に行うことができた。

2 SDGs達成の担い手育成（ESD）の 視点で

全学年：「SDGsブック（新聞）」

月に2回、全校一斉に朝読書の時間にSDGsについての新聞記事を読み、自分の意見をまとめている。各学年の総合的な学習の時間でSDGsについて学んできたが、3年間を見通した学習するために本年度から実施している。1年生はSDGsについてはIntroduction 1 & 2を取り入れ、基本的なSDGsについての知識を学ぶ機会を設けた。

新聞記事の内容

- (1) introduction 1 SDGs考えよう
- (2) introduction 2 17のゴールから世界の現状を知ろう！
 - 1 SDGsでより良い世界に
 - 2 海中で分解するレジ袋
 - 3 無印「衣料」、半分が男女兼用
 - 4 食品ロス削減へ コンビニ各社
 - 5 経済と両立 起業しアプリ開発



全学年：「食品ロス」をテーマに国際交流

SDGs新聞同様に、学年間のつながりをつくるべく、今年度より1年間のテーマ(目標)を決め、総合的な学習の時間に取り組んできた。また、他教科でも同じテーマ(目標)に向かつての横断的な学習ができるためであり、多角的な考え方が視野を広げるためである。1年生は実際にフードエコロジーセンターより講師を招き、講演会を実施。また、家庭科では、各学年の学習に合わせて「食品ロス」についての理解を深める活動ができた。今後は昨年度より行っているギリシャとの国際交流を2022年1～2月ごろにかけてオンラインで開催を予定している。



生徒会：SDGsに対する意識向上プロジェクト

昨年度に引き続き、SDGs 17の目標と各委員会の取り組みを関連させる目標設定を行った。生徒総会では、SDGsに対する意識向上を図るため、映像を使って1年生にもわかりやすく伝える工夫を行った。また、毎月発行される生徒会新聞にもSDGs 17の目標の目的と自分たちができることを書き出し、全校生徒に伝えた。

生徒会：学生団体WORLD FUTとの

オンライン交流会

7月に本校生徒会本部、二年学級委員と学生団体のWORLD FUTでZOOM上でのオンライン交流会を行った。カンボジアの子どもたちの未来をサッカーの力でつっていき、WORLD FUTの活動の様子を伺ったり、中学生にこそできることは何かをグループに分かれて話し合ったりした。

WORLD FUT の話から生徒たちは、漠然としていた世界の貧富の差の現状の輪郭が見え、より活発な話し合い活動を行うことができた。今回の交流会で学んだことを、今後の生徒会活動にも生かしていきたいと考えている。



3 ESDによる「変容の視覚化」の手法

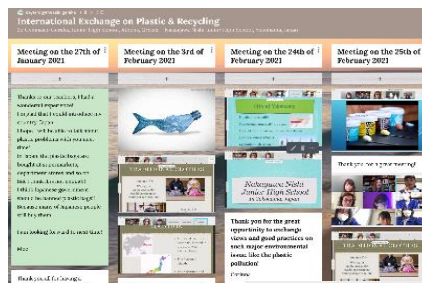
SDGsについて一昨年度から社会科や家庭科などの授業の中で学んできた。昨年度からは生徒会活動の中でSDGsに関連する取り組みを行ってきた。各委員会の目標にもSDGsが組み込まれている。また、昨年度の反省から、今年度は4月と3月にアンケート調査を行い、生徒たちがどのように変容してきたかを数値として可視化する予定である。2020年に東京大学大学院教育学研究科によって行われたESDの実施に関するアンケートに沿って25の質問を生徒たちに投げかけた。4月の調査結果では、入学してきたばかりの一年生の84%が「SDGsについて聞いたことはある」と回答しているが、小学校で実際に学んできた生徒は30%であった。生徒が「よく知っている」と答えた質問は、「世界には学校に行きたいのにいけない子どもたちがいること」であり、53%であった。「よく知っている」と一番回答率が低かった質問は「会社や工場、お店、自治体が行う街づくりには環境の影響があること」で24%であった。

今年度の本校の取り組みである「食品ロス FOOD WASTE」回答率が低かった質問に特に関連してい

る。今年度の取り組みの中で、生徒たちの考え方がどう変わっていったかを研究したい。

4 ESDによって引き出すことができた価値 (evaluation=評価)

本校の英語科では5ラウンド学習方式を採用し、3年間に渡って英語でのコミュニケーション力向上の育成を行ってきた。確実に英語でのコミュニケーション力の向上が見られる中で、実践的な活動の場を目標に生徒たちが主体的に取り組む姿が見られる。その中で、実際に海外の中学生と環境問題について話をするができることは、自分たちの国だけの問題でなく、世界全体を考えることができる機会となっている。昨年度オンライン国際交流に参加した生徒は、「日本の文化との違いが感じられて楽しかった。海外の生徒も私たちと同じ環境問題について考えていて、世界の繋がりを感じた。」と感想を寄せている。昨年度卒業した生徒の中には、高等学校でSDGs部を発足するなど、卒業後も自主的に取り組む姿が見られる。



また、SDGsが学校、生徒、教員間に浸透し、様々な教科指導の場面でSDGsを基盤として取り組む活動が増えつつある。上記でも述べているように、学校全体でテーマを決め、3学年共通して取り組むことができたのは、とてもよかった。教員間でもお互いに情報交換をすることができ、高めあう授業展開ができたと感じている。

20 横浜市立相沢小学校

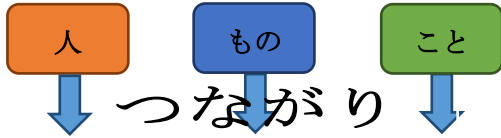
学校教育目標

学びあい 認めあい 支えあい 夢をはぐくむ あいざわっ子

【知】自ら考え 学び続ける子を育てます 【徳】自分も 周りの人も 大切にすることを育てます 【体】進んで 健康的な生活をする子を育てます

【公】自分の役割を考えて 行動する子を育てます 【開】目標に向って ねばり強く取り組む子を育てます

1 学校教育目標と
ESDを通して育成したい資質・能力とのつながり
「人、もの、こととの「つながり」から、自己の考えを伸長し、未来へはばたくことができる」



【これまでの自分の見方・考え方をもとに】
○つながりに関心をもち、大切にする（関連）
○役割を考え、進んで参加する（参加）
○友だちや関係機関と協力する（協力）
○未来に向かって計画をする（未来）

伸長

2 SDGs達成の担い手育成（ESD）の視点で 取り組んだこと

【総合的な学習の時間（AIAI）】

○4年生「相沢のまちを守るンジャー」

昨年度学んだ相沢のまちのよさを活かして、「誰もが住み続けられる相沢のまち」の実現を目指して活動を行った。2つのグループに分かれてまちの課題について調べ、解決策を考えた。

安全 誰もが安心して安全に過ごすためにはどのようにしたらよいかと考え、まちの危険な場所を調べた。地域の人にインタビューしたり実際に交通量を調べたりして、あいざわっ子発表会で自分たちの考えた対策などを発表した。

環境 学校の近くにある瀬谷市民の森にホテルが生息していることに着目し、人間だけでなく生物も住みやすい環境づくりを目指そうと活動した。ホテルの生態を調べ、ごみのないきれいなまちにしたいと考えた。

○6年生「『食』を通じて世界を変える」

「食」を通じて身の回りの様々な問題に気づき、少しでも解決に向かうよう地域のお店や人とつながりながら活動に取り組んだ。「地域」「給食」「多文化共生」「エコクッキング」の4つのグループに分かれて活動した。6年生一人ひとりが「私たちの取り組みが全校のみんなや地域に広がるといいな。」という思いで主体的に活動した。

多文化共生 大学生とのオンライン交流を行い、「アンコンシャスバイアス」について学んだ。「外国人だから」などの思い込みで接するのではなく、平等に接しようと新たな価値観を育んだ。



地域に外国の方が経営している飲食店があることに気づき、取材を行った。お店の人の話を聞き、多様な考え方があることを知った。



【学援隊への広がり】

学校でのESDの活動が地域に伝わり、学援隊と連携してエコバックを作成した。デザインは技術員が行い、SDGsマークと相沢小のマスコットキャラクターを取り入れるなど、ESDの活動を地域にも広げたいという思いが込められている。



3 ESDによる「変容の視覚化」の手法 6年生【イメージマップの活用】



活動の節目に自分たちの考えを整理し、新たな考えや価値を見出すことができた。視覚化したことで、一見関わりの無いような物事でも相互性があることに気付くことができた。課題解決に向けて探求しようとする意欲が高まり、友達や地域の方と協力しながら取り組もうとする姿が見られた。

4 ESDによって引き出すことができた価値 (evaluation=評価)

自分たちの身近な問題に目を向け「見直す」ことで、課題を見出し地域の人・こと・ものに「つなげる」ことができた。これらの活動を通して、児童一人ひとりが誰もが住み続けられる社会を考える素地を養うことができた。ESD推進校として2年目を迎え、教師や児童にもESDの視点をもって様々なことを考えようとする態度が身に付いてきた。3年目は、学校全体で「変容の視覚化」に重点を置き、「変わる」ことの実感を得ながら取り組みを続けた。

21 横浜市立旭小学校

学校教育目標

あかるく さわやか ひとみきらきら あさひっこ

・自己有用感 ・思考力 判断力 ・規範意識 ・防犯 防災などの安全意識

1 学校教育目標とESDを通して 育成したい資質・能力とのつながり

学校教育目標の「自己有用感・思考力判断力・規範意識・防犯防災などの安全意識」という4つの視点をもって取り組んでいる。その中でも本校児童の良さである「思いやりがある」「素直」「優しい」というところを生かし、他者とコミュニケーションを図り、自分も相手も認められる子の育成を目指す。また、様々な「人・もの・こと」とふれ合う中で、事象を批判的に考える力や物事を多面的に捉えられる思考力や判断力の育成を目指し、最後まで粘り強く取り組む姿を育む。

そして、困ったとき、その課題をどう解決していくかを見通す力を養っていく。

2 SDGs達成の担い手育成（ESD）の視点で 取り組んだこと

【事例1】「旭小の過去・現在・未来」（6年生） ～SDGsと地域の視点から～

6年生が興味をもった「SDGs」と「地域」の2つのグループに分かれて学習を進めた。

インターネットや本を用いて調べ、みんなに知ってほしいことを発表し合った。「SDGs」では、食品ロス、プラスチックごみと海洋問題、恵まれない子たちの現状や教育などについて、「地域」では、旭小学校の歴史、運動会で行われていた競技・誰でもできるこれから行いたい競技、などについて発表があった。



【未来の地域・旭小ジオラマ】

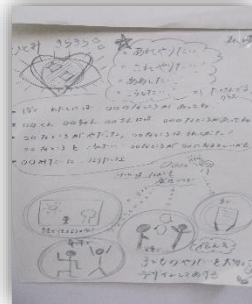
得られた知識をもとに、120周年式典の場で、家族や他学年にSDGsの視点から考える

「未来の地域・旭小」について伝えた。方法は、夏休みにある児童が行った「ジオラマ作り」を参考にして、未来

の旭小や地域のジオラマを制作した。

発表から「SDGs」への理解をさらに深め、自分たちが「地域」のためにできることは何かを考えることができた。

【事例2】重点研究会で目指す子どもの姿の共有 （教職員）



今年度の重点研究会では、「わかる できる」につながる授業づくりを目指し、教職員全体で学校目標に関連付けてそれぞれどのような子どもの育成をしたいか

を話し合い、それぞれがもっている教育観の共有をし、常に確認できるように印刷室に掲示した。また、重点研究会も研究授業1回のみを参観するのではなく、「参観WEEK」を設定し児童の変容を見られるようにした。そのことによって、それぞれの授業や複数日での異なる児童の姿も見ることができた。その変容がなぜ起きるのかを考えることもでき、教師の「見取る力」の育成にもなった。

3 ESDによる「変容の視覚化」の手法

ESDの視点を取り入れた学年暦の作成や教員間でアンケートを実施し、本校のESDに対する考えを共有する。また、研修の機会を設けて、ESDについて学ぶ場を作っていく予定である。

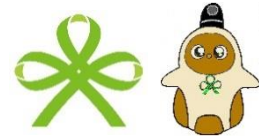
4 ESDによって引き出すことができた価値 （evaluation=評価）

子ども自身が持続可能な社会を考えることで、自分の生活を見直し、今ある資源が有限であることに気付くことができた。普段の生活の中でも地産地消の重要性を話す姿も見ることができた。

教職員の中で、教育観を共有することで、個人として大切にしていること、全体で大切にしていきたいことを知ることができた。

22 横浜市立本牧南小学校

学校教育目標 元気いっぱい・やさしさいっぱい・何でもチャレンジ南っ子



1 学校教育目標とESDを通して 育成したい資質・能力とのつながり

- ・自ら問題を解決しようとする、実践力のある子ども
- ・知識・技能の基本を習得し、健康な体をつくる子ども
- ・地域等の人とのつながりやものを大切にする子ども
- ・社会の変化に関心をもつ子ども

2 SDGs達成の担い手育成（ESD）の視点で 取り組んだこと

○教職員向け ESD 研修会

- ・小中学校企画課 渡辺 徹 主任指導主事
- ・横浜国大大学院 野中陽一 教授

を講師として教職員向け研修会を実施

○学校図書館の機能の拡充

本校では、学校図書館を「読書センター」「学習・情報センター」として学年・教科の横断的活用を重要視している。子どもたちはもちろん、教職員にとっても重要な情報が集まる「情報発信基地」として、SDGsに関することを多面的・多角的に発信している。

・シトラスリボンプロジェクトの導入



コロナ禍の差別・偏見をなくし「学校・家庭・地域」の輪を大切にする取組として、シトラスリボンプロジェクトを人権教育と結びつけている。

・AI ロボット「LOVOT」の導入

「学習・情報センター」としての機能を高め子どもたちのお互いを尊重し合う心を育む入り口として、学校図書館にAIロボット「LOVOT」を常設し、授業などでも積極的に活用している。



・情報活用能力の育成

社会をよりよくするための情報活用能力を育成するために、学校図書館を中心に様々なことを模索している。「ESD 推進のための学校図書館年間計画」(表:左下)を作成し運用している。また、「SDGsと国語科の関連カリキュラムマネジメント」(表:右下)を作成し学校図書館の蔵書構築を推進すると共にSDGsとの関連づけを行い運用している。

○LOVOTを使ったプログラミング教室

GROOVE X 社によるプログラミング教室を行い、SDGsとの関連性についても理解を深めた。



○ESDの視点を意識した授業（5年生社会科）



3 ESDによる「変容の視覚化」の手法

情報リテラシーチェックシート・テキストマイニングなどを活用して、変容の視覚化をしていく構想を立てている。

4 ESDによって引き出すことができた価値

(evaluation=評価)

子どもたちの中には主体的にSDGsの視点で学習に取り組む姿が確認できている。自分たちの未来をよくする教育的ツールとして全校が取り組み 変容の視覚化・評価を進めていきたい。

1 学校教育目標とESDを通して 育成したい資質・能力とのつながり

自分や友達のよさを認める力

「⑤他者と協力する態度」を身に付けることによって、友達のよさに気づき、認め合い、自分自身の自己肯定感も上がると考える。

共に学び合う力

上記のこともそうだが、「⑥つながりを尊重する態度」を身に付けることによって、友達、職員、地域の方々、様々な立場の人と共に学び合うことができるようになると思う。

持続可能な社会の創造に貢献する力

「③多面的、総合的に考える力」を身に付けることによって、物事を一つの側面だけで見るのではなく、様々な視点で考えられるようになる。そのような力を普段の生活から生かしていけば、現在の状況のみにとらわれず、将来への影響について想像することができるようになるのではないかと考えている。

2 SDGs達成の担い手育成（ESD）の視点で 取り組んだこと

本校で取り組んだ活動の中で、6年生で行った総合的な学習の時間の活動を例にあげる。

6年1組では、「みんなで安全で楽しいお散歩をしよう」という単元づくりをしている。栄区は横浜市内でも高齢化率が高く、本校の周りも高齢化が進んでいる。そんな本校の周りを高齢者の方が散歩をよくしており、子どもたちはその様子を見て、「どんなところを楽しいと感じているのか。」と疑問に思っていた。そのような中から地域の高齢者の方が安心して楽しい散歩コースを作る活動へとつながっていった。何度も地域を歩き、より楽しいと思える散歩コースを作っていた。

可視化の手立て①「身近な題材」は、子どもたちが何度も繰り返し関わるができることで、

実感しやすくなる。

手立て②「ケアプラザとのつながり」は、子どもたちが4年生の時に関わったケアプラザの方に協力を自分たちで依頼し、テレビ電話を2回行った。専門家の方に価値付けてもらったり、アドバイスをもらえたりすることは実感につながる。

手立て③「体験」は、テレビ電話の後ケアプラザの方の紹介で、地域の高齢者の方8名と一緒に散歩をした。実際に地域の方と触れ合い、直接感想などをもらえることが、自分たちの行っていることと実際の生活とのつながりを強く感じることができることにつながっている。

手立て④「アンケート」は、体験してもらった方々にアンケートをお願いし活動のよかった所、改善した方がよい所、また子どもたちの活動への価値付けをしてもらった。活動の振り返りに使用した。

手立て⑤「学校HPの活用」は、子どもたちの作った散歩マップを学校HPに載せる予定である。地域へ広めることで活動の意義がまた強く感じられるであろう。

手立て⑥「地域でのイベント」は、活動の終末に、地域で散歩を行うイベントを計画している。達成感を感じられる活動を行うことで、育成したい資質・能力がより実感できる。

3 ESDによって引き出すことができた価値 (evaluation=評価)

まだ活動が終わっていないので分からないが、子どもの変容は、単元としてのねらいにそった変容であると感じる。そもそもそれぞれの単元には、その単元目標にESDの視点が入っていると感じた。活動を真摯に取り組んでいけば、それがESDにつながる。ESDの考え方は各単元の中にあるESDの視点に教師が気づきやすくなるということがよさなのではないだろうか。

24 横浜市立牛久保小学校

学校教育目標 共に生きる たくましく生きる かがやいて生きる 牛久保の子

1 学校教育目標とESDを通して 育成したい資質・能力とのつながり

本校では、学校教育目標の下「人・もの・こと」と関わり合いながら、主体的に学び続ける子どもたちの姿、資質・能力を共通理解し、持続可能な牛久保らしい教育課程のカリキュラムマネジメントの作成や生活・総合的な学習の時間を中心にした授業改善に取り組んでいる。

2 SDGs達成の担い手育成（ESD）の視点で 取り組んだこと

今年度は子どもたちを持続可能によりよく育成していくための授業改善、教職員の取組改善、カリキュラムの編成を中心に取り組んだ。

① 1コマ40分午前5コマの取組

時間	月	火	水	木	金	土	日
8:00	朝の会・運動	朝の会・運動	朝の会・運動	朝の会・運動	朝の会・運動	朝の会・運動	朝の会・運動
8:40							
9:20							
10:00							
10:40							
11:20							
12:00	牛久保タイム	牛久保タイム	牛久保タイム	牛久保タイム	牛久保タイム	牛久保タイム	牛久保タイム
12:40							
13:20							
14:00							
14:40							
15:20							
16:00							

上記のような日課表にすることで下校時間を早くした。その結果、放課後の時間を確保することができ、教科横断的な視点で教職員が教材研究をしたり、情報交換をしたりし、目指す子どもの姿、資質・能力の育成に余裕をもち取り組めるようになってきている。また水曜日以外は給食、清掃活動終了後に牛久保タイムを20分設け、6校時とつなげて20分+40分=60分の授業も可能にし、柔軟なカリキュラムに対応できるようにしている。牛久保タイムでは、スキル等の習熟だけでなく、午前中に学習でできなかった課題などもその日のうちに取り組めるようになってきている。中休みまで3コマ、中休み後2コマ、午後が1コマだけなので、子どもたちがどの時間も集中して取り組んでいる様子が見られ、1コマ1コマの学びの質

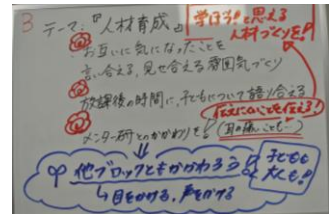
の向上が継続的に図られている。実技や移動の時間が足りないという点については特別教室配当を工夫し、各学年体育館や校庭を連続3時間で使えるようにし、準備や片付けで時間をとられないようにしている。

② 教科分担時間割調整システムの作成

教科分担を行い、より専門的な指導ができるような授業改善に取り組んでいる。教科分担の仕組みが持続可能なものとなるように、毎週の週予定の作成が負担にならないようにするために上記の時間割調整システムを作成した。

③ 学年主任会の設定

チーム学年経営の要となる各学年のまとめ役の学年主任の力量向上のために、年に4回ほど学年主任会を行う計画を立てた。学年主任会では、それぞれの悩みや取組を共有し、主任同士の縦のつながりもでき、持続可能な組織力向上が子どもたちの日々の指導にもつながった。



3 ESDによる「変容の視覚化」の手法

子どもたち、教職員にESDの取組についてアンケートを取った。90%以上から肯定的な回答が得られ、効果を感じている。

4 ESDによって引き出すことができた価値 (evaluation=評価)

持続可能な仕組みを作ることで、子どもたちにとっても教職員にとってもよい実践が続き、目指す子どもたちの姿、資質・能力の向上が継続的に図られている。今後は学年同士の縦のつながりを意識して目指す姿を学年ごとに具体化し、今年度の取組のよさを生かして実践していきたい。

25 横浜市立新井中学校

学校教育目標「自立・共生・学び合い」

- 自ら学び、考え、行動する力を育てます。
- 互いを認め合い、共に成長しようとする豊かな心を育てます。
- 自他の生命を大切にし、健康でたくましく生きようとする精神を育てます。
- 様々な人と学び合い、広い視野をもって社会に貢献できる力を育てます。

1 学校教育目標とESDを通して 育成したい資質・能力とのつながり

よりよい社会を形成するため、また、自分づくりのために、社会と出会う場を大切にする。そして、学ぶ「内容」として、持続可能なまちづくりや、環境問題への関心、貧困等の社会問題を解決することなどを重点にして、体験的、参加型の手法を実践する。

2 SDGs達成の担い手育成（ESD）の視点で 取り組んだこと

○地域学校協働本部との連携

- ・SDGsすごろくづくり
- ・みどりアップ事業と地域のグリーンサポーターの活動と生徒会の**環境保健委員**をつないだ活動



○地域協働本部と学校の教職員、生徒会がそれぞれの立場で「持続可能なまちづくり」という価値を共有した実践。

○「バス停の前の正門という」立地を生かして、まちの人に緑を楽しんでいただく取組。

学校の職員は入れ替わる。地域や子どもはまちに生き続ける。

- ・折り紙プロジェクトの実施（予定）
- コロナ状況の社会に元気を届けよう！

○図書委員会の活動

- ・SDGs 関連図書の購入
- ・図書室へのコーナーの設置
- ・紹介の充実、図書だよりでの広報
- ・SDGs に関連する図書の動画作成（全校へ放映）



○校内に、SDGs ロゴの掲示



○教職員・地域等の研修として、ジェンダー平等に関する講演会

3 ESDによる「変容の視覚化」の手法

- ・授業、特別活動等の学習活動の中で、ESDに関わる内容を確認し、価値化するシートの作成（予定）
- ・ESDカタログの作成（予定）

4 ESDによって引き出すことができた価値 (evaluation=評価)

- ・生徒の社会への関心の増加（地域とのつながり）
- ・教科学習とその他の学習との連関
- ・自己有用感の涵養（役立つ自分）
- ・これまで行ってきた地域学校協働活動のESD×SDGsの視点での価値の確認

26 横浜市立南希望が丘中学校

学校教育目標 ～挑戦・発信・錬磨～

- 主体的に考え、伝える力と課題を解決する力を高める。【知】
- 人を思いやり、自分や周りを大切にする心を育てる。【徳】
- 様々なふれあいを通し、豊かな心と体を鍛える。【体・開】
- 社会の一員として、広い視野に立ったものの見方や考え方を身に付ける。【公・開】



1 学校教育目標とESDを通して育成したい資質・能力とのつながり

本校には3つのスローガンがあります。それは、「挑戦」「発信」「錬磨」です。

まずは「挑戦」です。今回ESD推進を始めるにあたって子どもたちはとても意欲的で新しいことに挑戦するよい機会となりました。

次に「発信」です。今回の取組をなぜ行おうとしているのかを聞かれて答えることで、自分の考えや思いを多くの人に伝え、多くの人とコミュニケーションを取ることで、世界が広がっていくと考えます。

三つ目は「錬磨」です。それぞれ一生懸命取り組んでみることによって、きっと今までとは違う「自分」に出会えるはずです。

2 SDGs達成の担い手育成（ESD）の視点で取り組んだこと

ユニクロ服のチカラプロジェクトの取組です。約760枚近くの洋服が集まりました。



美術部新聞班の取組です。今回の服回収について特集を組んでくれました。あわせて、ペットボトルのキャップの回収についても書かれています。



図書館でも、SDGsの展示をしていました。子どもたちが手に取って読んでいる姿が何人も見られて、少しずつですが広がりつつあるのがわかりました。

3 ESDによる「変容の視覚化」の手法

今年度の取組は、スライドや動画を作成し、全校に流し報告となります。



SDGsの説明から始まるので、もう一度SDGsとは何かを確認できます。また、発送したところまでスライドがあるので、学校としてどんな取組をしたのかを認識できます。

4 ESDによって引き出すことができた価値 (evaluation=評価)

まだ、取組を始めたばかりなので、ESDとは何かを考え、気づくということができればそれでよいと思います。街中にはたくさんのSDGsのマークがあふれています。その中で、来年度以降子どもたちからと組んでみたいことが出てくるとより効果的な取り組みになるかと考えています。

第2章

ESD推進による変容の視覚化の手法
(ESDに取り組むことのよさ=価値を引き出す)

(1) アンケートを取り入れた手法

持続可能な社会づくりの「構成概念」やESDによって育む「能力・態度」を年度始めと年度末にアンケートを実施し変容を視覚化している取組例。（結果は次ページに掲載）

中尾小学校の「今日よりいいアース（明日）への学び」

年 組 番 名 前

		いつまでもみんなが幸せにくらせる社会をつくるために 大切にしたい考え		とても意識する	すこし意識する	あまり意識しない	まったく意識しない
I	環境に関すること	いろいろあるということ 【多様性】	いろいろな「人・もの・こと」には、それぞれちがいやよさがあり、その中でわたしたちが生活しているということ	3	2	1	0
		関わり合っているということ 【相互性】	いろいろな「人・もの・こと」は、たがいにつながり、関わり合いながら、それぞれの役割を果たしているということ	3	2	1	0
		限りがあるということ 【有限性】	わたしたちをとりまく環境や資源には限りがあり、未来のことを考えて使うことが大切だということ	3	2	1	0
IV	意志や行動に関すること	一人一人を大切にすること 【公平性】	だれでも一人一人の人権や命をもち、それらをみんなで守ることが大切だということ	3	2	1	0
V		力を合わせること 【連携性】	問題を解決するためには、いろいろな「人・もの・こと」がたがいに協力することが大切だということ	3	2	1	0
VI		責任をもつということ 【責任性】	問題を解決するためには、一人一人が責任をもち、自ら進んで行動することが大切だということ	3	2	1	0
合計(0~18)							

		身に付けたい力（資質・能力）		よくできる	だいたいできる	あまりできない	まったくできない
①	批判的に考える力 【批判】	人の意見や他からの情報をそのまま信じることなく、「本当かな」「自分でたしかめよう」などと考えることができる。	3	2	1	0	
②	未来像を予測して計画を立てる力 【未来】	課題に対して、見通し、目的や目標をもって、学習や活動の計画を立てることができる。	3	2	1	0	
③	多面的・総合的に考える力 【多面】	いろいろな立場や視点で物事を考えたり、いくつかの物事を比べたりつなげたりしながら考えたりすることができる。	3	2	1	0	
④	コミュニケーションを行う力 【伝達】	自分の思いや考えを分かりやすくまとめて伝えたり、友達の考えや意見をしっかりと聞いて取り入れたりすることができる。	3	2	1	0	
⑤	他者と協力する力 【協力】	おたがいのよさや考えを生かしながら友達と協力して活動することができる。	3	2	1	0	
⑥	つながりを重視する態度 【関連】	自分と友達、人と環境など、目に見えない様々な物事の間を大切にすることができる。	3	2	1	0	
⑦	進んで参加する態度 【参加】	自分の言葉や行動に責任をもって、進んで活動に取り組んだり、最後まで自分の役割を果たしたりすることができる。	3	2	1	0	
合計(0~21)							

E S D 児童アンケートの結果

E S D パンフレットの作成に活用するねらいもあり、今年度の教育活動の成果を知る一つの手立てとして、高学年向けにE S Dに関するアンケートを実施しました。
 下の表は、その結果をまとめたものです。

大きな傾向としては・・・

- 全ての項目で「年度初め→年度終わり」での向上が見られた。
- 「視点」では、比較的【公平性】が高く、【多様性】が低い。
- 「能力・態度」では、比較的【協力】が高く、【多面】が低い。

細かく見ていくと、他にもいろいろと気付く点があると思います。
 今後の指導や支援に生かせるといいですね。

			年度始め				年度末			
6つの視点			とても意識する	少し意識する	あまり意識しない	全く意識しない	とても意識する	少し意識する	あまり意識しない	全く意識しない
I	環境に関する こと	いろいろあるということ 【多様性】	38	40	13	0	48	39	3	1
II		関わり合っているということ 【相互性】	39	41	10	1	55	31	5	0
III		限りがあるということ 【有限性】	39	32	14	6	64	25	2	0
IV	意志や 行動に 関する こと	一人一人を大切にすること 【公平性】	60	25	6	0	76	15	0	0
V		力を合わせるということ 【連携性】	43	37	10	1	65	23	3	0
VI		責任をもつということ 【責任性】	44	37	10	0	68	22	1	0

		年度始め				年度末			
7つの能力・態度		よくできる	だいたいできる	あまりできない	まったくできない	よくできる	だいたいできる	あまりできない	まったくできない
①	批判的に考える力 【批判】	24	39	28	0	40	43	8	0
②	未来像を予測して計画を立てる力 【未来】	27	45	17	2	43	41	7	0
③	多面的・総合的に考える力 【多面】	28	47	15	1	38	43	10	0
④	コミュニケーションを行う力 【伝達】	31	43	15	2	46	37	7	1
⑤	他者と協力する力 【協力】	53	30	8	0	65	23	3	0
⑥	つながりを重視する態度 【関連】	35	45	7	4	54	33	4	0
⑦	進んで参加する態度 【参加】	48	31	12	0	61	22	8	0

中学年アンケート 前期

年 組 番 名前 ()

学校生活の様子について、しつ問をします。自分に当てはまるものに、○をつけてください。問7については、その理由を自由に書いてください。成せきには、全くかんけいしないので安心してください。

問1：自分で決めためあてにそって、学習に取り組むことができましたか。

5とてもそう思う 4そう思う 3どちらとも言えない 2そう思わない 1全くそう思わない

問2：学習を進める中で、新しく調べたことをみつけながら、取り組むことができましたか。

5とてもそう思う 4そう思う 3どちらとも言えない 2そう思わない 1全くそう思わない

問3：か題をかい決するために、どのような方法で学習に取り組みましたか。

- 先生にそうだんした
- お家の人にそうだんした
- 友達にそうだんした
- 本やパソコンで調べた
- 地いきの人やせんもん家に、そうだんした
- まだ、ためしていない方法でためした
- その他 ()

問4：これまで、友達の意見を受け入れたり、いっしょに考えたりして、話合いに取り組みましたか。

5よくしている 4だいたいしている 3たまにしている 2ほとんどしていない 1全くしていない

問5：自分と友達の考えをくらべながら、自分の考えを表現していますか。

5よくしている 4だいたいしている 3たまにしている 2ほとんどしていない 1全くしていない

問6：友達の考えを聞いて、自分の考えとのちがいに気づいたり、広げたりしたことはありましたか。

5よくあった 4まあまああった 3どちらとも言えない 2あまりなかった 1全くなかった

問8 人とかかわり合って、活動することに、どんなよさがあると思いますか。

問9 きせつや生き物などにきょうみをもって、気づいたことや見つけたことを発表したり、観察カードに書いたりすることはできましたか。

5とてもそう思う 4そう思う 3どちらとも言えない 2そう思わない 1全くそう思わない

高学年アンケート 前期

年 組 番 名前 ()

学校生活の様子について質問をします。自分に当てはまるものに、○を付けてください。

問7と問9については、その理由を自由に書いてください。成績には、全く関係しないので安心して下さい。

問1：自分でめあてや課題をつくり、自分から進んで学習に取り組むことができましたか。

5とてもそう思う 4そう思う 3どちらとも言えない 2そう思わない 1全くそう思わない

問2：学習を進める中で、新しいめあてや課題を見つけ、解決方法を改善しながら学習しましたか。

5とてもそう思う 4そう思う 3どちらとも言えない 2そう思わない 1全くそう思わない

問3：課題を解決するために、どのような方法で学習に取り組みましたか。

- 先生に相談した
- お家の人に相談した
- 友達に相談した
- 本やパソコンで調べた
- 地域の人や専門家に相談した
- まだ試していない方法で試した
- その他 ()

問4：地域の人や家の人たちに、自分たちの学習へ協力してもらえるように、働きかけましたか。

5とてもそう思う 4そう思う 3どちらとも言えない 2そう思わない 1全くそう思わない

問5：友達の意見を受け入れたり、一緒に考えたりして、話し合いに取り組みましたか。

5よくしている 4だいたいしている 3たまにしている 2ほとんどしていない 1全くしていない

問6：自分の考えを人に的確に分かちやすく伝えようとしていますか。

5よくしている 4だいたいしている 3たまにしている 2ほとんどしていない 1全くしていない

問7：友達や学年の違う人と、かわり合うことはできましたか。

5よくできた 4できた 3どちらとも言えない 2あまりできなかった 1全くできなかった

問8 人とかわり合って、活動することに、どんなよさがあると思いますか。

問9：友達の考えを聞いて、自分の考えを広げたり、深めたりした経験はありましたか。

5よくあった 4まあまああった 3どちらとも言えない 2あまりなかった 1全くなかった

問10①：友達と協力して、考えを出し合って、提案したり活動したりしましたか。

5よくしている 4だいたいしている 3たまにしている 2ほとんどしていない 1全くしていない

②提案や活動をしたことを振り返って、自分にどんな変化があったと思いますか。また、今後のような活動に生かせると思いますか

(2) 思考ツールなどを利用した記述の分析

南本宿小学校の事例

視覚化の手法について

南本宿小学校

<児童の変容の見取り>

アンケートとマッピング

児童のE S Dに関わる態度や考え、行動の変容を捉えるため、理科学習に関わる 15 項目のアンケートと、「環境を守る」ことを出発点としたマッピングを複数回実施してきた。アンケートは数値を経年で比較し、マッピングについてはテキスト・マイニングに近い形で子どもたちが書き出した単語の表出率で変容を分析した。

【理科学習アンケート】

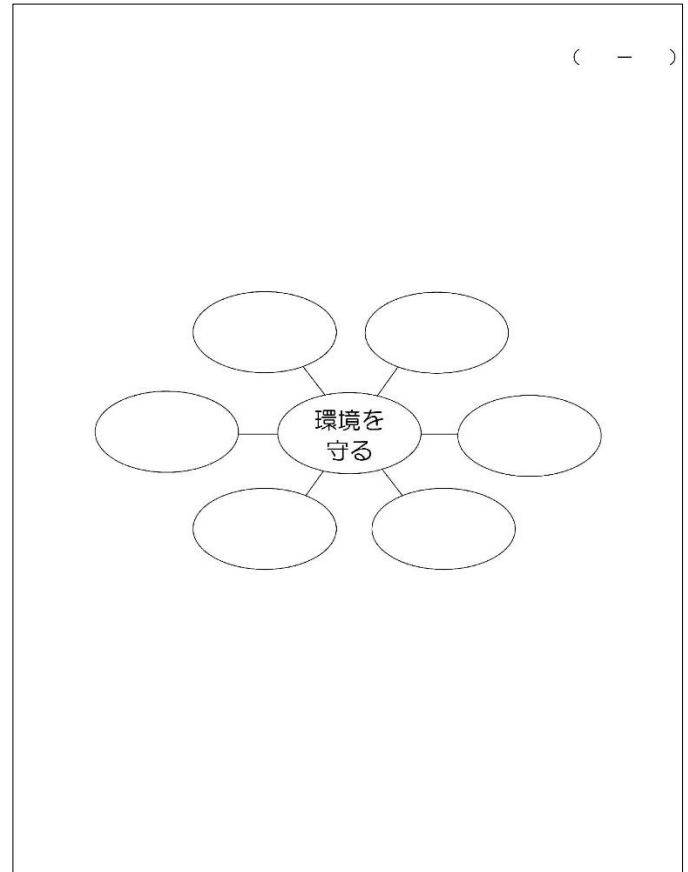
【マッピング】

理科学習アンケート

年 組 名 前 ()

☆次の質問に対する答えとして、自分の状況に最も近いものを選んで○を付けましょう。

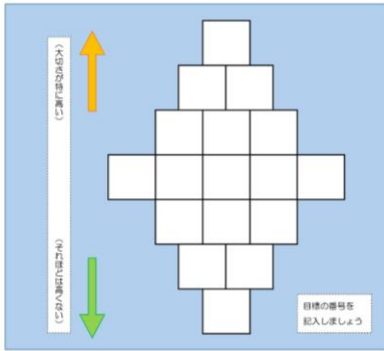
	質問	当てはまる	わりと当てはまる	あまり当てはまらない	当てはまらない
1	理科の勉強が好きですか。				
2	理科の勉強は、大切だと感じますか。				
3	理科の勉強をすれば、自分自身のふたんの生活や社会に出て役立つと思いますか。				
4	理科の授業の内容は、分かりますか。				
5	理科の観察・実験は、好きですか。				
6	理科の学習で考えたことを文や図で表現することは好きですか。				
7	理科に対する想像力を、自分から進んで見ようと思いますか。				
8	自然の中で遊んだことや自然観察をしたことがありますか。				
9	理科の授業で学んだことを普段の生活の中で活用できないか考えますか。				
10	将来、理科や科学技術に関係する職業に就きたいと思いますか。				
11	理科の授業で、自分の考えを周りの人に説明したり発表したりしていますか。				
12	理科の授業では、自分の予想をもとに観察や実験の計画を立てていますか。				
13	理科の授業で、観察や実験の結果から、どのようなことが分かったのか考えていますか。				
14	理科の授業で、観察や実験の進め方や考え方が間違っていないかを振り返って考えていますか。				
15	今、社会のことがや自然のことから、「不思議だな」「おもしろいな」などと感じますか。				



アンケートを理科学習に関するものとしたのは、本校がE S Dを実践するための軸として『日常』をサイクルに取り入れた「問題解決学習」を設定し、その中心教科として理科を据えたからである。アンケートの分析からは、これまでの学習の積み重ねの結果として、身近な場面から問題を設定し、学習を通して得られた知識や考え方を日常に当てはめていくという、「E S Dを意識した理科学習の流れ」が子どもたちに定着していったことが読み取れた。

また、マッピングの分析からも、多様な主体が相互に関わりながら環境を構成していることを理解し、それら全てを大切にしながら共に生きていこうとする態度が身に付いてきているということが分かった。加えて、環境を守るために必要なSDG sの目標についても、多様な目標が相互に関わっており、多角的な視点で考えていく必要があるという発想をもつようになったことが見て取れた。

ダイヤモンドチャート



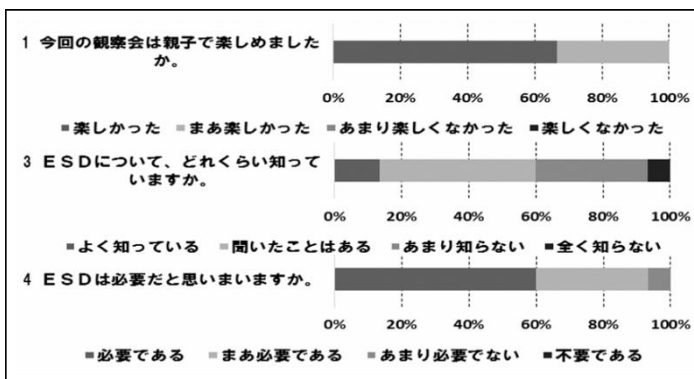
この思考ツールは、子どもたちのSDGsへの問題意識を可視化し、視野を広げるための手段として利用した。児童一人ひとりが、これからの世界のために大切だと考える目標に順位をつけるという学習を行った。

子どもたちは、自分たちのダイヤモンドチャートと外国の方のチャートの結果を比較することで、それぞれの国が抱える問題の性質の違い理解することができた。実際の子どもたちの発言からも、日本では「地球」に関わる項目を問題としているのに対し、インドなどでは「人」に直結する課題を解決しようとしているということへの気付きが見られた。

<保護者の変容の見取り>

行事実施の際のアンケート

本校はこれまで、家庭と協力しながらESDを実践していくため、自然や科学に関わる学習の機会を保護者へ提供する「親子で学ぶわくわく教室」を実施してきた。新型コロナウイルスの影響で、近年は縮小を余儀なくされているが、外部人材を積極的に活用し、星空観察会などの様々な教室を開催したり、家庭学習の資料を配付したりした。どの教室も非常に盛況で、ホテル観察会には、保護者と児童合わせて200名以上が参加したこともあった。その際にアンケートを行うことで、保護者の知識や考え方についても可視化を図った。



【令和元年度実施アンケート】

学校評価アンケート ※児童の見取りも含む

令和2年度より、学校評価アンケートに「持続可能な社会の創造に貢献する力の育成が図れていると思うか」という項目を入れ、保護者や児童のSDGsへの関心を可視化した。

	肯定的回答	否定的回答
保護者	86.2%	12.6%
児童	89.4%	10.6%

【令和2年度実施アンケート】

私たちがつくる持続可能な世界 ~SDGsをナビにして~

みなさんは、これまでの学習で、現代社会の様々な課題を学んできました。みなさんのアイディアや力が、世界のみならず2030年までに達成しようとする目標『持続可能な目標 (Sustainable Development Goals)』を達成する大きな力になります。
これらの社会を持続可能で、よりよいものにするためにはどうしたらよいでしょうか。また、あなたたちには何ができるでしょうか。レポートにまとめてみましょう。

1. テーマの設定

これまで学んだ UNICEF などのトピックを参考に、あなたたちがこれから解決策を考えたいと思った目標や課題をグループで話し合ってください。

<テーマ NO 1, 2 >

貧困をなくそう 飢餓をゼロに

学校の自動販売機を寄付型のものに変えるために

<そのテーマ (目標や課題) を選んだ理由 > 持続可能な世界を目指すうえで、すべての人が充分な食事をとれ、最低限必要なものが手に入らないと、地球全体で行動を起こせないのではいかと考え、このテーマを選びました。テーマについて調べるだけでなく、自分たちができる行動を起こしたいという思いで学習を進めました。新型コロナウィルスの影響で、学校外での活動が難しくなっていました。その中で思いついたのが、寄付型自動販売機です。校長先生に、学校の自動販売機を寄付型にするこについて、プレゼンテーションを行うこともゴールとして活動を始めました。

2. テーマを探究するため必要な資料・調査の方法

- 現在の世界の貧困、飢餓の状況をインターネットを用いて調べる
- 寄付型自動販売機とは、実際どういったものかを インターネット上で調べる
- 寄付をする先の団体などで、どのような活動も現在行っているのかを調べる

3. 現状・調査結果 (調べて分かったこと)

貧困の基準	○ 飢餓とは、最低必要なエネルギーや栄養をとれない状態が続くこと
相対的貧困ライン → その国や地域の水準の中で比較して大多数が負い状態のこと	○ 飢餓人口は、長く減少を続けてきたが、最近になり再び増加した。新型コロナウイルスの世界的影響により、今後の経済状況によってはさらなる増加すると予測されている ↓
絶対的貧困ライン → 国や地域の生活レベルに関わらず、生きていく上で必要最低限の生活水準が満たされていない状態 (国際的な基準は、1日あたり1.90ドル)	○ 子供の慢性的な栄養不良は、脳や身体の発達に影響が大きい。栄養不良は、命を失う危険がある
食事水、電気、住むところ、衣服、薬などを合計して使えるお金が、7.9ドル (約200円) であること	○ 知識の発達を遅らせるおそれがある
→ 極度の飢餓状態では、暮らしは7億9600万人のうち約半数が子どもでも、3億5600万人	○ 世界の飛躍以上に一度遅れるとその遅れも取り戻すのは難しい

4. 解決策 (現在行われている取り組み・将来に向けた取り組み)

- 特定非営利活動法人 寄付型自動販売機普及協会
 - 飲料売り上げの一部を支援したい団体に寄付できる自動販売機
 - 自動販売機に「デジタルチップ」を埋め込み、世界の様子や伝言ボードを掲示できる
- 日本国際飢餓対策機構
 - Hunger Zero という 飢餓の無い世界を目指して国内外で活動している団体
 - 自己開発協力、地震、洪水、飢饉、難民の支援、募金活動、学校給食、通学などの学校支援、海外へのスタッフ派遣などを行っている
 - 自動販売機では、3本分の寄付金に「フリカ」7食の食料支援に「フリカ」が、アフリカでは、天候不順による干ばつや洪水の影響で、3人に1人が「飢餓」の状態
 - で、特に深刻になっている

5. 分析や考察の結果・自分の考え

私はこのテーマの解決に向けて、行動力、発信力、継続力が大切だと考えました。正しいことを学ぶだけでは現実を変えることはできません。自動販売機を通じての寄付に「活動する前」に「寄付」という支援の形についてグループ内で話し合いが行われました。お金を渡すことが本当の支援なのだろうかという意見もあがり、私たちが今の状況でできる行動を実際に行うことに大切である寄付について学習を進めることにしました。また、学校に自動販売機という仕組みをつくることで、学校全体に私たちのグループが学んだことを共有し、日常的に支援を続けることができると考えました。自分たちだけの知っただけでの取り組みでは、大きな問題を解決させるには、力がたりません。自分たちの知っていることを共有して、活動の輪を広げられるような問題が解決するまで、取り組みを継続させることが大切だと思いました。

レポートを書き、考えを整理した後、アイディアを、行動宣言として下の口の中に書きましょう。

行動宣言

知識を得るだけでなく、自分の行動にいかし、その輪を周りに広げられる発信力をつける。

(3) 生徒会活動をESDの視点で見直し変容を視覚化した事例

市ヶ尾中学校の事例

市ヶ尾中学校

「多様な評価手法」の具体について

0. 年度当初に「各委員会で委員会活動と関わりのあるSDGs」「委員会活動をとおして達成させたいSDGs」を委員会の目標と関連付けて設定している。この目標の達成を通して、『担い手』に必要な資質・能力の育成を図っているのが本校の特色である。

昨年度



今年度

委員会	活動目標	具体的な活動方針
生徒会本部役員	・活動発表 ～世界中を変えよう～	・身近な課題を題材に発表しよう。広報活動も、積極的に取り組む。話し合いを大切にしよう。 ・SDGsの達成目標を達成しよう。
3年学級委員	ポピュラー～青春送り出せ～	・自分自身の成長を振り返り、SDGsの達成目標を達成しよう。
2年学級委員	創	・自分自身の成長を振り返り、SDGsの達成目標を達成しよう。
1年学級委員	TEAM T: 仲間、E: 笑顔、A: 思いやり、M: みんなで、1: 心算、2: 11月号	・自分自身の成長を振り返り、SDGsの達成目標を達成しよう。
生活	一人一歩	・自分自身の成長を振り返り、SDGsの達成目標を達成しよう。
保健	自分の失敗があなたに教訓を授けます。 ～コロナウイルスから身を守ろう～	・自分自身の成長を振り返り、SDGsの達成目標を達成しよう。
連絡	連絡委員が豊かな学校生活を届けます	・自分自身の成長を振り返り、SDGsの達成目標を達成しよう。
図書	No book, No life ～人生を本と共に～	・自分自身の成長を振り返り、SDGsの達成目標を達成しよう。
放送・広報	Let's look let's listen Pick up ～正しい情報を伝えて、みんなの力を1に～	・自分自身の成長を振り返り、SDGsの達成目標を達成しよう。
福祉	福祉 ～いろいろな人を受け入れられる思いやりを～	・自分自身の成長を振り返り、SDGsの達成目標を達成しよう。
体育人あそび	切磋琢磨 ～背負った目標を達成しよう～	・自分自身の成長を振り返り、SDGsの達成目標を達成しよう。
部文化学芸発表会	※今年度については活動なし	
選挙管理	～私たちの選挙活動～	

委員会	活動目標	具体的な活動方針
生徒会本部役員	活動発表 ～世界中を変えよう～	・身近な課題を題材に発表しよう。広報活動も、積極的に取り組む。話し合いを大切にしよう。 ・SDGsの達成目標を達成しよう。
3年学級委員	選QがMake you	・自分自身の成長を振り返り、SDGsの達成目標を達成しよう。
2年学級委員	状態変化～先陣へ、そして大団圓へ～	・自分自身の成長を振り返り、SDGsの達成目標を達成しよう。
1年学級委員	大団圓～進学年を明るく迎えよう～	・自分自身の成長を振り返り、SDGsの達成目標を達成しよう。
生活	Sad life → Happy life ～笑顔で学校生活を送ろう～	・自分自身の成長を振り返り、SDGsの達成目標を達成しよう。
保健	自分の失敗があなたに教訓を授けます。 ～コロナウイルスから身を守ろう～	・自分自身の成長を振り返り、SDGsの達成目標を達成しよう。
連絡	連絡委員が豊かな学校生活を届けます	・自分自身の成長を振り返り、SDGsの達成目標を達成しよう。
図書	No book, No life ～人生を本と共に～	・自分自身の成長を振り返り、SDGsの達成目標を達成しよう。
放送・広報	Let's look let's listen Pick up ～正しい情報を伝えて、みんなの力を1に～	・自分自身の成長を振り返り、SDGsの達成目標を達成しよう。
福祉	福祉 ～いろいろな人を受け入れられる思いやりを～	・自分自身の成長を振り返り、SDGsの達成目標を達成しよう。
体育人あそび	切磋琢磨 ～背負った目標を達成しよう～	・自分自身の成長を振り返り、SDGsの達成目標を達成しよう。
部文化学芸発表会	Make our happy ～笑顔で学校生活を送ろう～	・自分自身の成長を振り返り、SDGsの達成目標を達成しよう。
選挙管理	～私たちの選挙活動～	

昨年度より視点が広がり目標とするSDGsが増えた。また、昨年にはなかった「環境・社会・経済」のどれかに偏ることなく、3分野を統合して目標としている委員会もある。(生徒会本部役員・保健委員会・環境委員会)

1. 委員会活動の前期・後期に、7つの視点・能力に基づいたアンケートを5段階評価で実施している。対象生徒は、総勢300名近くになる。

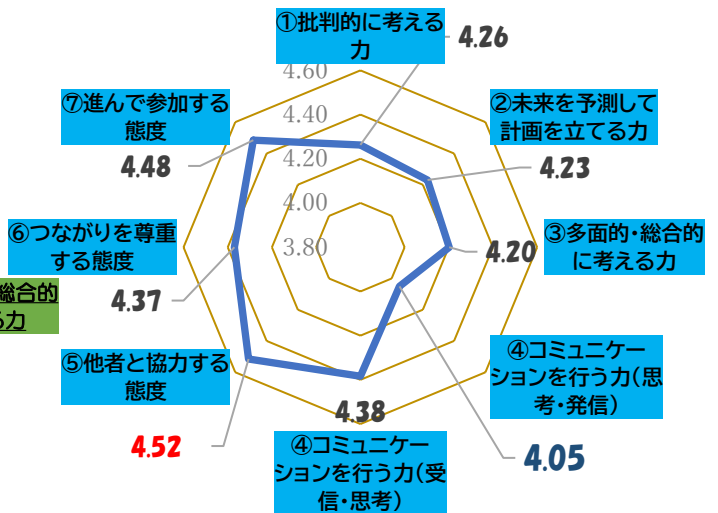
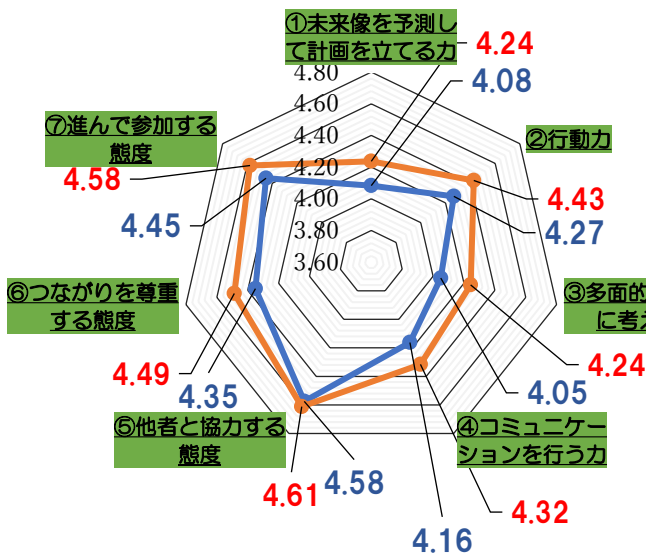
今年度アンケート項目・集計結果

	5 ; よくできた 2 ; できなかった	4 ; できた	3 ; どちらともいえない	5 %	4 %	3 %	2 %	1 %
①	他の人の意見や考え、他から得た情報をそのまま信じることなく客観的に、公平にものごとを考え、積極的に課題の解決策を考えることができた。	40%	46%	12%	1%	0%		
②	より良い学校生活を予想・予測・期待し、それらを他者と共有しながら、委員会の活動目標や具体的な活動方針を計画することができた。	41%	42%	16%	1%	0%		
③	委員会の具体的な活動を考えたり、実行したりする時、人やもの、社会、自然とのつながりや関わり、広がりを意識し、関連付けて考えることができた。	40%	40%	18%	1%	0%		
④	自分の考えや思いを簡潔にまとめて他者に発信することができた。	39%	32%	22%	6%	0%		
	仲間の考えや意見を積極的に取り入れて、自分の考えを深めることができた。	52%	34%	12%	1%	0%		
⑤	委員会の仲間の考えに共感したり、お互いに協力したり、励ましあったりしながら、前向きに活動することができた。	60%	31%	7%	1%	0%		
⑥	委員会や自分の活動が、よりよい学校生活やより豊かな社会の実現につながっていることに気付き、それらを尊重し、大切にすることができた。	52%	34%	13%	1%	0%		
⑦	委員会の活動の中で、自分の言動に責任感を持ち、課題の解決に向けて主体的に委員会活動に参加することができた。	58%	32%	8%	1%	0%		

比較考察

昨年度（前期青・後期赤）

今年度（前期）



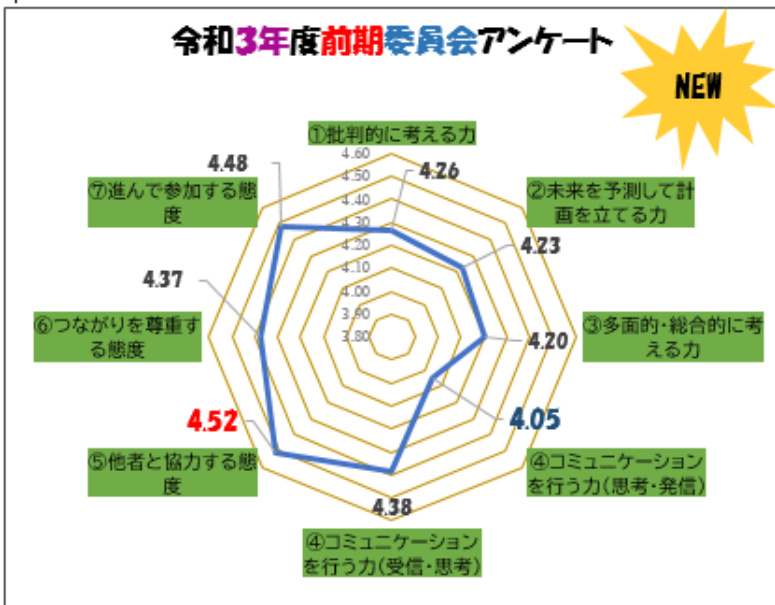
前年の前期と比較できる項目に注目すると、ほぼ全ての項目で数値が上昇している。

今年度は、コミュニケーションを行う力を「受信」「発信」に分けたところ、低かった要因が「発信」にあることが分かった。今後の文化学習発表会における生徒の研究発表を待って、後期のアンケートの結果を期待したい。

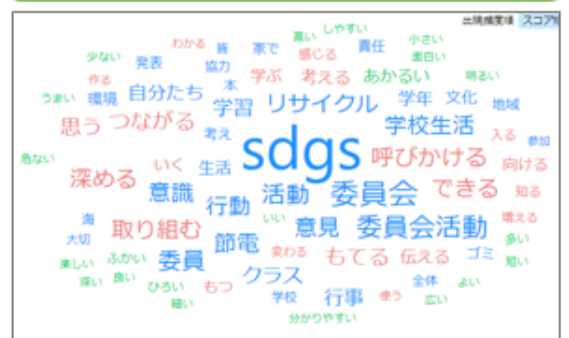
2. 実施したアンケートは、記述欄も含め職員のみならず生徒に結果を昇降口で提示している。

市中生の皆さん、ご協力ありがとうございました♡

♡ご記入いただいた自由記述欄を分析しました！



記述内容→「学校生活や地域社会をより豊かにできる委員会活動にするためのアイデア」「自分が思っていることややってみたいSDGs」
「活動を通して、自分が変わったこと(考え方や行動)」



令和2年度より、さらに多くの方が書いてくれました！皆さんの思いがぎゅぎゅ♡のワードクラウドです！
「つながる」「深める」「学校生活」「委員会活動」「行動」「できる」などの言葉が多いですね。

より身近な場所で、小さなことからでも、自分から行動が起こせる。

ことに気づいた人がたくさんいたようです。

イチオシ「自分が変わったこと」！！⇒2年生文化学習委員。
「他の人がやっていないからやらないのではなく、自分が行動を起こし、そのことを他の人に伝えていきたいと思うようになった。」

その他のイチオシ記述は、中央階段に掲示しています！！

ESD（持続可能な開発のための教育）が重視する7つの能力・態度をもとに、市中生に行った委員会アンケートの結果です。

⑤他者と協力する態度が、今年も最高ですね！

課題は、④コミュニケーション(発信)と昨年に引き続き③多面的に考える力※です。

それぞれの課題の解決のために、皆さんなら何ができますか？

※委員会活動を社会や自然とつなげて考える力です。学校以外の世界で自分たちの活動がどう役に立っていくのだろうか？

3. 記述欄は、学校全体で自分たちの価値を発見する機会としている。本校の階段踊り場に掲示。

令和3年度前期委員会アンケート

いちよし♡コメント

「学校生活や地域社会をより豊かにできる委員会活動にするためのアイデア」
「自分が思っていることやしてみたいSDGs」「活動を通して、自分が変わったこと(考え方や行動)」

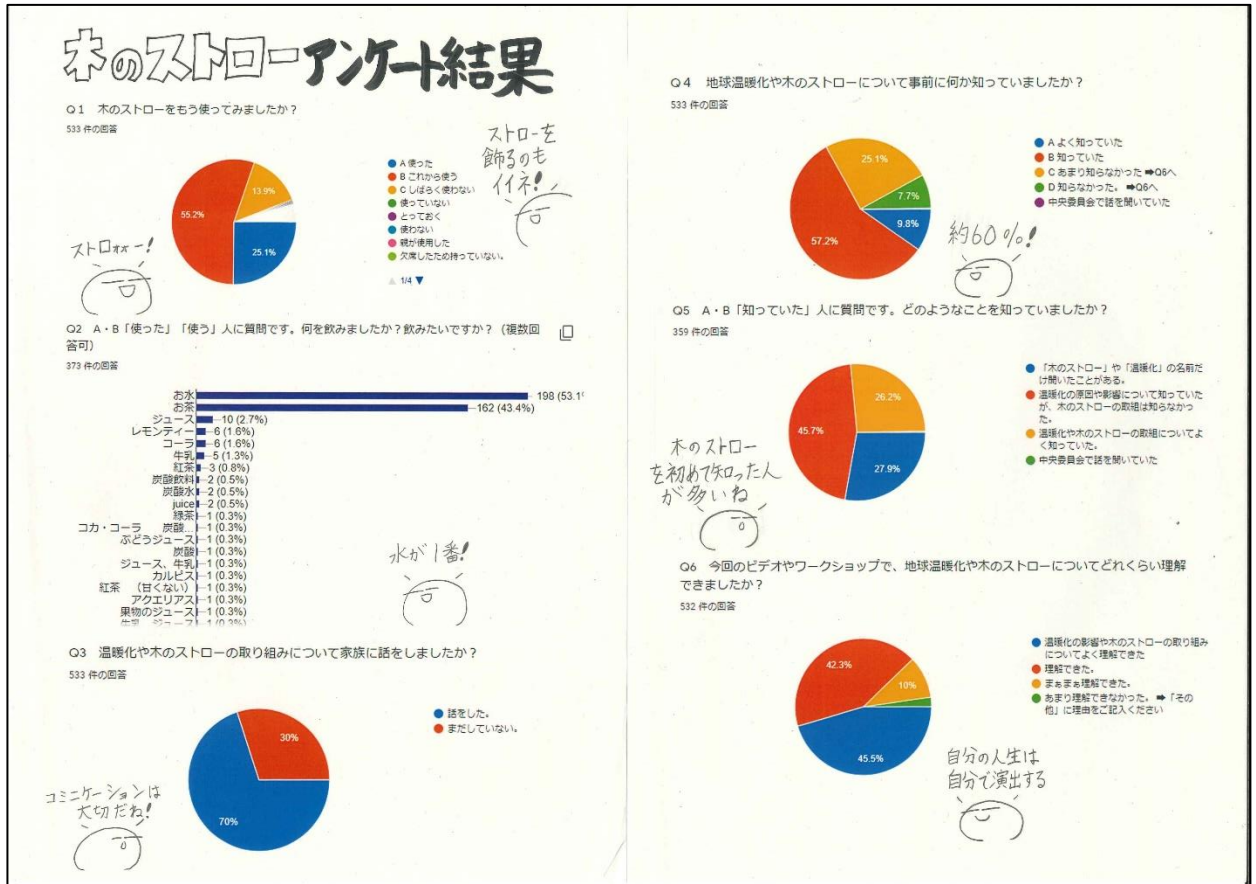
1年生

- ・自分たちの未来がこの10年で変わることを知ったので、自分たちにできることをやりたい。
- ・活動を通して、自分たちのできることが小さくても何かの役に立ったりするから、何でもやってみようと思うようになりました。
- ・自分は、14、15番の活動をやってみたいと思いました。この活動をすることで(広い意味で)地域がきれいになり、より豊かになることもつながると思いました。
- ・活動を通して、SDGsの大切さ、自分からやってみようという気持ちがありました。
- ・学校生活がよりよくなるために、身の回りにある自分ができるSDGsを実践することができた。
- ・SDGsは上の人が行動して、それに僕らが便乗すると思っていたけど、SDGsの本来の姿は、友達と歩いて会話しながら水道に水を飲んだり、木で加工して愛憎をもったりする楽しいものだと感じた。
- ・自分は生活委員に入って、小学校の委員会活動とのレベル違いを感じました。中学校の委員会は、きびきび話が進み、スピーディーに正確だと思いました。僕もそのスピーディーに正確に動く力を高めていきたい。
- ・委員会に入っている、入っていない関係なく声かけをすることがとても大切なのだなと実感することができた。
- ・歯ブラシリサイクルプロジェクトをやって、あんまり興味がなかったリサイクルに興味を持ってました。
- ・市ヶ尾中学校だけでなく、外での取捨をしたら、もっと良い結果になると思った。
- ・以前より相手の意見を取り入れながら自分の考えを尊重でき、手を挙げることも多くなった。
- ・委員会活動を通して、いつも捨てているあたり前の物でも再利用できるということを知りました。ハブラシリサイクルプロジェクトでは、身近なことでもSDGsに協力することができることを学びました。
- ・新聞を作り、全校に配布したことで、自分の考えを伝え、皆に共有することの大切さを学ぶことができた。
- ・自分の考えをまとめるのが、少し得意になりました。後期ももっと活躍したいです。
- ・曲を流すだけでなく、自分達で考えた事をやってみたらよいと思う。
- ・最近、よく近くの公園でプラスチック等(ペットボトルなど)やカンが落ちているのを見ます。そのことを注意する呼びかけや実際にゴミを取り、リサイクルなど、分別して捨てる取り組みをしてみたいと思いました。また、このように考えられるようになったので、これからもSDGsについて関わっていこうと思います。
- ・委員会の活動を通して、自分の行動が学校行事に関わってくるんだな・・・と思うことで、責任感が前よりできたと思う。
- ・活動を通して、自分が変わったことは、他人の意見をうまくまとめて、報告をするというのができた。その意見の答えを言う際、新たにでた意見にも対応することができた。
- ・SDGsについて深く考えるようになった。→家でもSDGsを意識して取り組んでいる。
- ・社会でたくさんの方が意義失調になっていることを知ったので、そういう人たちを助ける活動などを委員会活動などでできたらいいなと思いました。(無理かもしれませんが・・・)大きなことの達成は小さな行動の積み重ねです。まず、何かからできるか考えてみましょう(先生より)。

変容の可視化を教員だけでなく、生徒とも共有する効果を来年度は検証していきたい。

4. 今年度は、木のストローの「全校ワークショップ」後にもプロジェクト生徒が全校クラスルームを立ち上げ、Google フォームを使用してアンケートを作成し、結果を自分たちで公表することで意識の変化を全校で共有した。共有方法は、新聞・校内掲示・プレゼンテーションソフトによる動画放送である。

資料1 生徒作成の Google フォームからのアンケート結果



資料2 生徒作成のアンケート公表の新聞の一部 (全校に配布・校内掲示)

木のストローだよ通信

みんなの感想

3年: 1人1人とてもおもしろい...と思いはなくて自分から周りに人を取り組むと思える。SDGsに関心がある人も増えてきている。地球のために動きたい。

2年: 身近にある小さなことを積み重ねていくのが大切。自分たちが木のストローを知りたてはなくて家族や先生に教えてもらった。活動を楽しんでいる。

1年: SDGsを楽しくして、世界中で環境を守ろう。動物を守りたい。70%の製品の作用を今後、考えていきたい。

みんなの感想を読みまわすプロジェクトを通して環境への意識がより強まる人が増えていく。先が見えない環境問題に自分から身近なことを取り組んで世界中の世界を良くしていきたい。

3-1 中野

その他

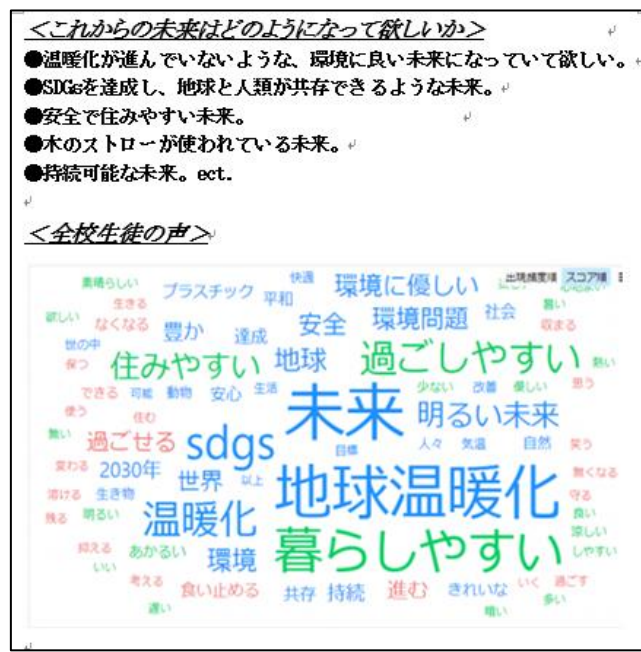
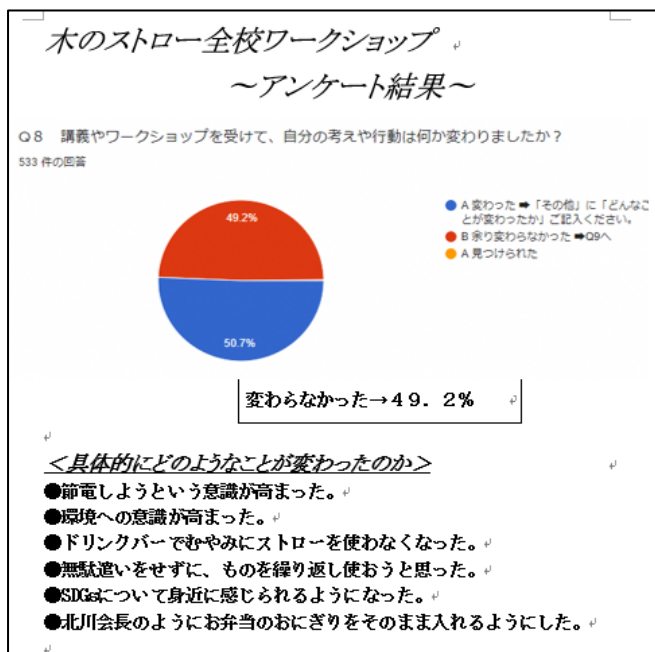
みんなさん今回のワークショップでは初めて知ることが多くあったと思います。Q7の様に薄く木がストローになることに驚いた。今のみなさんが持っている新鮮な気持ちで自分事として考え、ぜひ行動してみたい。アンケートには約50%の行動をしていますが、これを100%にしてほしい! 国結こそがです!!

Q7の質問... 今回のワークショップを通して初めて知ったことや驚いたことはなんですか? びっくり!

Q8の質問... 講義やワークショップを受けて、自分の考えや行動は何か変わりましたか? 木のストローの力は大きい!

みんなさんさまざまな意見や感想をおかかっています。私はストローで氷を飲んだ! うまかったです!! 2本目でレモンティーなどを飲もうかなと思ってるのですがレモンティーはおいしいですか? 暑い

資料3 お昼に放送したプロジェクト生徒作成のプレゼンテーション（一部）と台本



全校の意識の変化（自己の変容）を生徒自らが可視化しようと試みた実践例の1つである。

<台本>木のストロー全校ワークショップ ～アンケート編～

演A 突然だけど、この前みんなに答えてもらったGoogleフォームの「温暖化・木のストローについてのアンケート」の結果が出たみたい！

演B あ！この前僕もやったやつ！！（余り間を開けずに）

演A それでは早速見てみよう！

演A&B どうぞ！！

～～（ドキュメントの説明に入る）～～

演A まず、「講義やワークショップを受けて、自分の考えや行動は何か変わりましたか？」という質問に対して、グラフの通り「変わった」と回答した人は全体の50.7%。また、「変わらなかった」と回答した人は49.2%という結果になったんだって！「変わった」と回答した人の方が「変わらなかった」と回答した人を少し上回っていることがわかるね！

演B 地球温暖化について、より身近に感じてくれた人が多かったんだね^^)

演A 「変わった」と回答した人が具体的にどんなことが変わったのか見てみよう！

会長のようにおにぎりをそのまま弁当にいれるようにした...などがありました！環境問題についての知識が深まっただけではなく、その後の行動について考えられている人が多いね！でも、「変わらなかった」と回答した人は49%もいたけど環境についてどう思ってるんだろう？

演A 実は、「変わった」と回答した人も環境問題について関心がない訳ではないんだ！沢山の人が、ワークショップの体験を家族の人に話してくれていることがこのグラフからわかるよ(Q3のアンケート結果を見せる)

演B そうだね、まず小さなことから初めて、新しいことにチャレンジしてみることが大切なんだね

演A そうしたら、みんなが願っているこんな世界にきっとしていける！（Q9のワードクラウドを見せる）

演B そのためには、まず自分で調べてみるのが大切だね！

演A それから、それを誰かに伝えることで地球温暖化解決に向けての第一歩につながるよ！

演A みんなも小さなことからでもいいので、自分ができることから行動してみよう！

5. 生徒発信のアンケート（選挙管理委員会）～SDGs だけでなく ESD の価値に気づき始めた生徒は、アンケートが有効な自己評価の手段と気づき始め、自ら評価手法を考え、『担い手』育成のために発信している。

生徒会選挙後に、選挙管理委員会が作成した新聞。公平公正な選挙の実施を通して、どのように中核学年となる2年生の意識が変化したかアンケートをとり、公表したものの。

2年生に! 「選挙への意識」を聞いてみました!

先月行われ、1. 今回の選挙を通して、少々生徒会本部としても選挙に興味を持つことになった。これが、この市ケ尾中学校を担う中心となる2年生にアンケートをとりました。その結果をお知らせします。

A: 約68%
B: 約30%
C: 約2%

A: 約86%
B: 約13%
C: 約1%

A: 約92%
B: 約8%

あなたの一票が世界を変える?

MY VOICE

選挙管理委員会
<作成>
3年
2年
1年

アンケート結果

2. 黄色い学年がこれからの市ケ尾中学校を支えていく中心になると改めて感じたが

このような結果になりました。生徒会本部役員選挙にご協力いただいた全校生徒のみならず、アンケートにご協力いただいた2年生のみならず、ありがとうございました。

全校生徒みんなで、この市ケ尾中学校を支えていくように頑張ります。

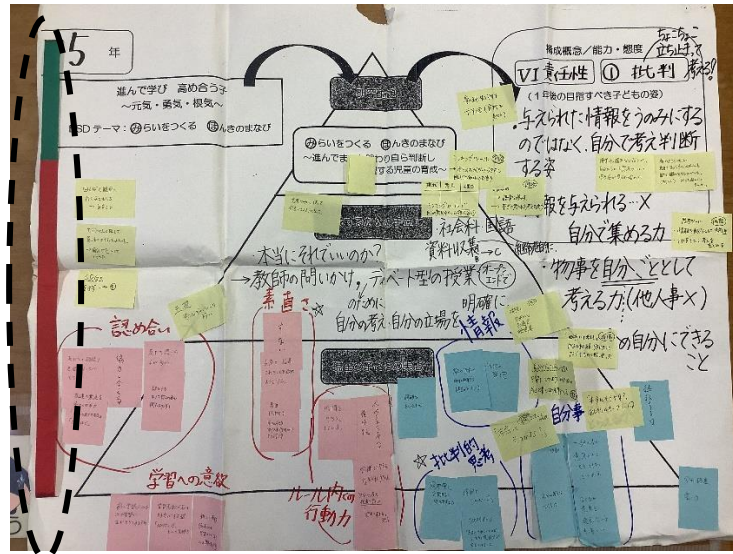
三保小学校における視覚化の手法について

本校では、開発した単元を次年度の当該学年に引き継ぐ（例：昨年度の4年生はどのような実践を行ったかを共有し、次年度の4年生でも指導に生かす）とともに、児童の学びの履歴を残す（例：4年生での学びの履歴を、新年度に新5年生の職員が理解する）ことで、カリキュラム・マネジメントの充実を目指している。同時に、研究の成果を限られた時間で効果的に整理することにも挑戦している。

今年度は、「ピラミッドチャート」と「ESDカレンダー」に書き込む形で、研究の足跡の見えるかを図ってきた。

<ピラミッドチャート>

バロメーター
学年の職員が、年度当初に設定した課題をどの程度解決したという実感がどうかを「バロメーター」で表している。（赤色が成果、緑色が今後の伸びしろ）



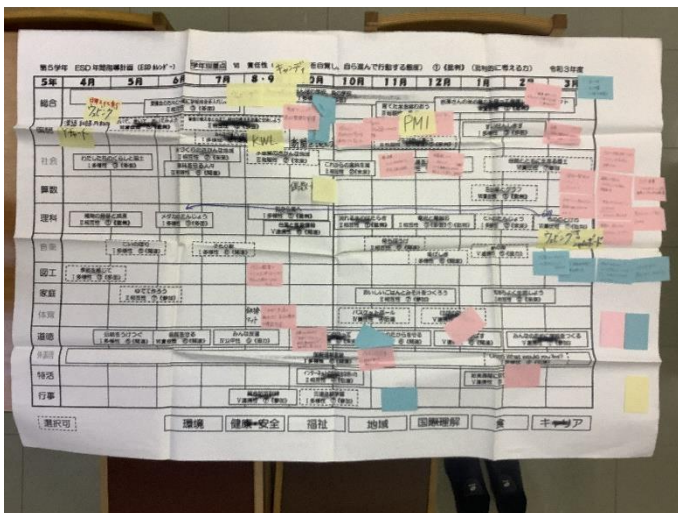
ピラミッドチャート
上段から、「研究主題」「達成するための手立て」「現在の子どもの実態」で構成されている。

学年で重点化する「構成概念」と「能力・態度」
日々の授業とESDで育成を目指す「構成概念」と「能力・態度」の関連が見えるように、ピラミッドチャートと並べている。

付箋の色は、ピンクが児童のよさ、水色が児童の課題を表しており、年度当初に前年度の担任と引継ぎをしながら書き出した。児童の実態を付箋で分析した後に、1年間でどのような取り組みをするかを考え、ピラミッドチャートに黒のペンで書きこんだ。その際に、ESDで育成を目指す「構成概念」や「能力・態度」との関連も考えるようにした。

黄色の付箋は、「児童の姿で成果を書いたもの」である。長期休業などの時間を活用して成果を整理することで、年度当初に設定した目標の見直しをすることができた。

<ESDカレンダー>



「ピラミッドチャート」で見えてきた成果や課題は、「ESDカレンダー」にも落とし込み、どの教科等で育成を図ることができるかを考え、年間の指導計画を立てた。ESD教材研究の際には、その時点までの授業における成果（ピンクの付箋）と課題（水色の付箋）で振り返るようにした。

また、本校では、「思考ツールの活用」も研究テーマの一つに据えているため、黄色の付箋で活用した思考ツールも入れ込んでいる。

第3章

協働型プログラム評価による ESD スクール・マネジメント実践に関する調査研究報告書 ver. 3（理論編）

令和3年度

SDGs 達成の担い手育成（ESD）推進事業：教育（学習）効果の評価・普及
横浜市教育委員会 ESD 推進コンソーシアム

協働型プログラム評価による ESD スクール・マネジメント実践に関する調査研究

報告書 ver.3（理論編*）

米原 あき（東洋大学／インド工科大学）

本報告書は、みなとみらい本町小学校編『ESD BOOK feat.MM 2021』を「実践編」とする二部構成になっています。本編の実践事例の詳細は、「実践編」をご参照ください。なお、みなとみらい本町小学校編『ESD BOOK feat.MM』シリーズは、当該小学校 HP にて公開されています。
(<https://www.edu.city.yokohama.lg.jp/school/es/minatomiraihoncho/index.cfm/1,0,73,212,html>)



目次

1. はじめに——本報告書の目的
2. 横浜市立みなとみらい本町小学校における ESD スクール・マネジメント
 - (1) これまでの取り組みと成果
 - (2) 「社会に開かれた教育課程」の実現に向けて
 - (3) 「協働 (coproduction)」とは
 - (4) 実践：学校運営協議会におけるロジックモデル・ワーク
 - ①実践の概要
 - ②ワークの目的と運営上の留意点
 - ③ワークの成果
 - ④「協働」の前提条件
3. 今後の展望——「情報交換の場」から「多様な教育機会の共創の場」へ

資料 I. 2021 年度版ロジックモデル

資料 II. アンケート調査票(児童用)

資料 III. 保護者-教職員アンケート調査結果

<参考：これまでの報告内容>

令和元年度報告書目次

1. はじめに——本調査研究の目的
2. 評価観の転換——ESD評価を考える視点
3. 協働型プログラム評価とは
4. 横浜市立みなとみらい本町小学校におけるESDスクール・マネジメント
 - (1) 【P】ニーズ評価・セオリー評価——“自分たちの”ロジックモデルづくり
 - (2) 【D-C】プロセス評価・アウトカム評価——指標に基づくデータ収集と分析結果
 - (3) 【A】改善に向けてのアクション——『研究のあゆみ』と全体研修による具体的改善
5. 今後の展望——教育委員会を中心とした「協働システム」と現場の当事者性

令和2年度報告書目次

1. はじめに 本報告書の目的
2. 横浜市立みなとみらい本町小学校におけるESDスクール・マネジメント
 - (1) これまでの取り組みと成果
 - (2) 「アクション2019」から「プラン2020」へ
 - (3) 重点研「しなやか部会」の活動
 - (4) ESD ロジックモデルは有用か？——MM 本町小学校教員へのアンケート調査より
 - ① LM に対する懸念
 - ② LM 作成上の難しさ
 - ③ 現実の活用への難しさ
3. 今後の展望 不確実時代のレジリエントな学校へ

1. はじめに——本報告書の目的

本報告書は、文部科学省『令和 2（2020）年度 SDGs 達成の担い手育成（ESD）推進事業』におけるカテゴリー（3）『教育（学習）効果の評価と普及』（受託者：横浜市教育委員会 ESD 推進コンソーシアム）の一部として実施されている、評価に関する調査研究事業『協働型プログラム評価による ESD スクール・マネジメント実践に関する調査研究』の成果をまとめたものである。上記の事業および調査研究は令和元年度から開始されており、今年度で 3 年目を迎えることとなる。したがって、本報告書は昨年度および一昨年度の報告書の「続編」という位置づけで作成されている。本調査研究の理論枠組みとなっている協働型プログラム評価の解説などについては、令和元年度の報告書を参照されたい¹。

本調査研究は、ESD のような、多様で動的な教育活動の評価を検討する際に、従来型の実績評価の考え方を適用しようとする²こと自体に無理があるのではないかと——換言すれば、従来型の評価の枠組を乗り越えて、異なるパラダイムで評価を捉え直す必要があるのではないかと——という問題意識のもとに計画された。この問題意識を具体的なアクション・リサーチにつなぐ方法として「協働型プログラム評価」という考え方を導入し、参加型の形成評価によって、ESD の理念をスクール・マネジメントに活用するという試みに取り組んでいる。

このアプローチのもとでは、児童個人の学習評価でも学校評価でもなく、ESD という取り組み＝プログラムの総合的な評価が行われている。この評価活動の目的は、児童の達成度を総括評価・相対評価することや、学校のパフォーマンスを監督・監査することではなく、(1)ある具体的な理念や教育目標のもとにスクール・マネジメントおよびカリキュラム・マネジメントを行うための道具を提供することと、(2)学校が取り組む ESD プログラムを包括的に計画し、改善するための情報を提供することにある。本研究は、このような(1)マネジメントの道具と(2)改善のための情報の提供こそが、まさに「評価」と呼ばれる手続きの本質的な機能であるという考え方に立脚している。

初年度の調査研究では、まず、協働型プログラム評価を ESD 評価に適用するにあたっての理論的な検討を行った。そして、その理論枠組みに基づき、本研究のモデル校である横浜市立みなとみらい本町小学校 [小正和彦校長] (以下、MM 本町小学校)の実践を報告した。続く 2 年目の報告書では、MM 本町小学校における取り組みがどのように進展したのかを考察した。具体的には、一年目に実施された取り組みのサイクルが、どのようにして第 2 周目のサイクルに架橋されていくのかを検討すると同時に、その実践を支える ESD ロジックモデルが学校現場でどのように受容あるいは批判されているのかを調査し報告した。

一年目の導入、二年目の校内展開に続き、三年目を迎える今年度、MM 本町小学校は、協働型プログラム評価実践の校外展開に挑戦した。後述のとおり、この挑戦は、「社会に開か

¹ また、過去 3 年にわたって継続している取り組みの年次報告書であることから、報告書の一部が昨年度あるいは一昨年度の報告書の内容と重複している。

れた教育課程」の実現可能性を実証する取り組みでもあると言える。今年度の報告書では、この取り組みに焦点をあてた報告を行う。

なお、児童や保護者へのアンケートおよびその分析やフィードバックについても、従来通り建設的な取り組みが継続されている。これらの点については本報告書では立ち入らないが、資料 II. III. および本報告書の「実践編」である『ESD BOOK feat.MM 2021』(<https://www.edu.city.yokohama.lg.jp/school/es/minatomiraihoncho/index.cfm/1,0,73,212,html>)を参照されたい。特に今年度は、学校運営と子どもの学びについて、保護者と教員の間にはどのような認識の違いがあるか、あるいはどのような点において認識が一致しているのかに注目した比較調査も行われた。紙幅の都合により詳細を報告できないことは残念だが、非常にクリエイティブな試みであり、注目に値することを特筆しておく。比較調査の結果は資料 III. を参照されたい。

本報告書の構成は以下のとおりである。まず次節にて、今年度の MM 本町小学校の取り組みを報告する。この節が本報告書の主要な本文となる。次節（１）ではこれまでの取り組みを概観し、（２）では「社会に開かれた教育課程」と MM 本町小学校の ESD ロジックモデルとの関連性を説明する。続く（３）では、「社会に開かれた教育課程」を実現するうえでカギとなる「協働」という概念について、coproduction と partnership の観点から理論的な考察を加える。最後に（４）において、MM 本町小学校で実施された、学校運営協議会における ESD ロジックモデル・ワークショップの様子を報告し、「社会に開かれた教育課程」の実現可能性を検討する。

なお、本報告書の内容は、筆者個人の責任によって執筆されたものであり、横浜市教育委員会及び MM 本町小学校の立場や考え方を表明するものではない。

2. 横浜市立みなとみらい本町小学校における ESD スクール・マネジメント

MM 本町小学校（2018 年 4 月開校）には、6 学年 15 学級に 414 名の子どもたちが学んでいる（2021 年 5 月現在）。開校宣言の中に「豊かな資源を活かし持続可能な社会の担い手を育む小学校として発展する」という文言が含まれている通り、開校当時から学校全体で ESD に取り組んでいる。MM 本町小学校の独自性は、ESD の考え方を、教室の中の教育活動だけでなく、スクール・マネジメントやカリキュラム・マネジメントにも取り入れ、全校的に活かそうとしている点にある。この点においてプログラム評価との親和性が高く、開校当初からプログラム評価が導入され、実践されてきた。ここではまず、これまでの取り組みとその成果を概説し（１）、今年度の主要な取り組みについて報告する（２～４）。

（１）これまでの取り組みと成果

MM 本町小学校では、2018 年 4 月の開校時から重点研究として ESD に取り組んでいる。学校教育目標である「みな[皆]とみらい[未来]を創る子」の育成を目指し、ESD を契機としたスクール・マネジメントが実践されている。開校初年次には、プログラム評価の流れ（二

ーズ評価・セオリー評価・プログラム評価・インパクト評価：令和元年度報告書参照）に沿って、まず、先生方自身がワークショップを通じて「MM本町小学校独自のESDロジックモデル」を策定した。このロジックモデルは、以後、毎年改訂を重ねている（資料I. 2021年度版ロジックモデル参照）。

ESDロジックモデルには、MM本町小学校が6年間の教育活動を通じて、また、教科や活動種別の違いを超えて、学校全体として「実現したい価値」とそのために必要な教育活動が、俯瞰的に示されている（ニーズ評価→セオリー評価）。そして、ESDロジックモデルに示された方向性のもと、『ESD BOOK feat.MM2019～2021』に報告されているように、多種多様な教育活動が実現され、その成果は先生方が作成した質問紙調査によって可視化されている（資料II. アンケート調査票参照）（プロセス評価→アウトカム評価）。ここで明らかにしようとしているのは、事前に設定した目標値に対する「達成度」ではなく、多様な教育活動を経た子どもたちの「変容」である。また、これらの評価の目的は、「成果の測定」という総括評価のそれではなく、「今後の改善」という形成評価が目指すところにある。

このような形成評価の結果は、重点研究会の場などを活用した振り返りの場を設けることによって、「評価はやったものの、やりっぱなし」にされることなく、改善に繋がられている。また、従来から行われている研究会や研修会の機会を活用することにより、教職員への時間的な負担を最小限に抑えながら、新たな取り組みが導入できるよう配慮がなされている。詳細は令和2年度の報告書にあるとおりだが、評価調査の結果が活用されることにより、教員個人の主観的な経験や印象のみに縛られない「エビデンスに基づく改善」が実現されていることが明らかになった（図1-3：令和2年度報告書より転載）。

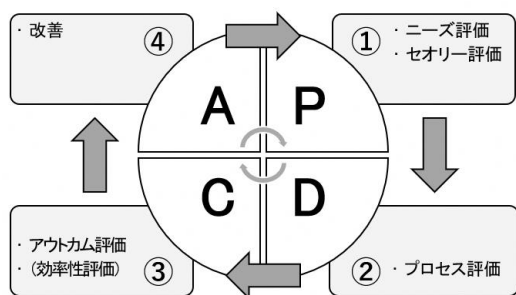


図1 プログラム評価の流れとPDCAサイクル
(出典) 筆者作成

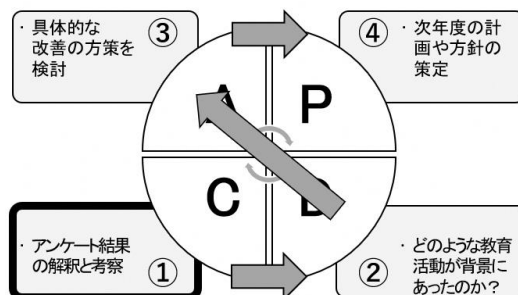


図2 改善Actionに向けての検討
(出典) 筆者作成

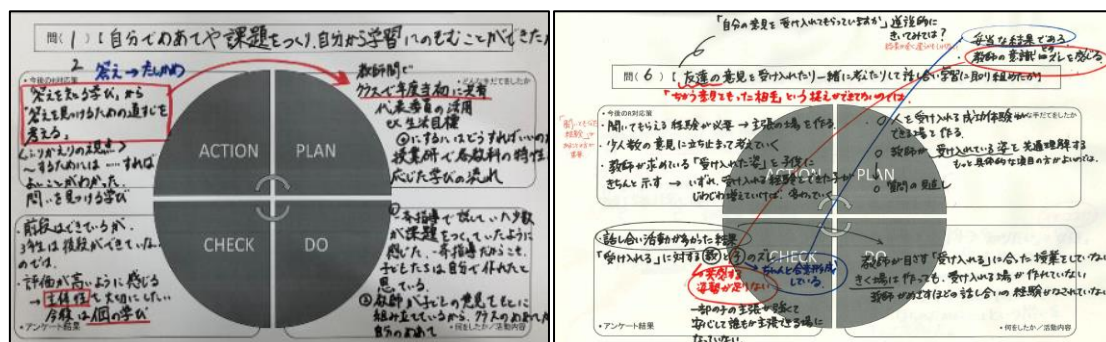


図3 重点研究会で行われたワーク(ワークシートの一例)
(出典) みなとみらい本町小学校提供

(2) 「社会に開かれた教育課程」の実現にむけて

上記に概観した通り、また、過去2年間の報告書および『ESD BOOK feat.MM』に示されるとおり、MM 本町小学校における協働型プログラム評価の実践は着実にその実効性をあらわしている。その実効性のカギは、(1) 当事者である先生方のコミュニケーションを尊重したセオリー評価とロジックモデルの活用、(2) 先生方の参加・協働・挑戦を促すための、校長によるサーバント・リーダーシップ、(3) 「監査」や「管理」ではなく、先生方がやりがいや楽しみを感じながら関われるマネジメントの一種としての「評価」、にあることも明らかにされた(米原 2021)。

一年目の「導入」、二年目の「展開」を経て、三年目を迎えた2021年度、MM 本町小学校は更なる挑戦として協働型プログラム評価の「拡張」を試みた。すなわち、学校運営協議会の場を活用して、本質的な「社会に開かれた教育課程」を実現しようという試みである。具体的には、従来教職員の間で行ってきたセオリー評価、すなわちESD ロジックモデルの作成を、学校運営協議会の委員メンバーと一緒にを行うことにした。

文部科学省(2021)は、『社会に開かれた教育課程に向けて』のなかで、以下のようなしくみを提示している(図4)。

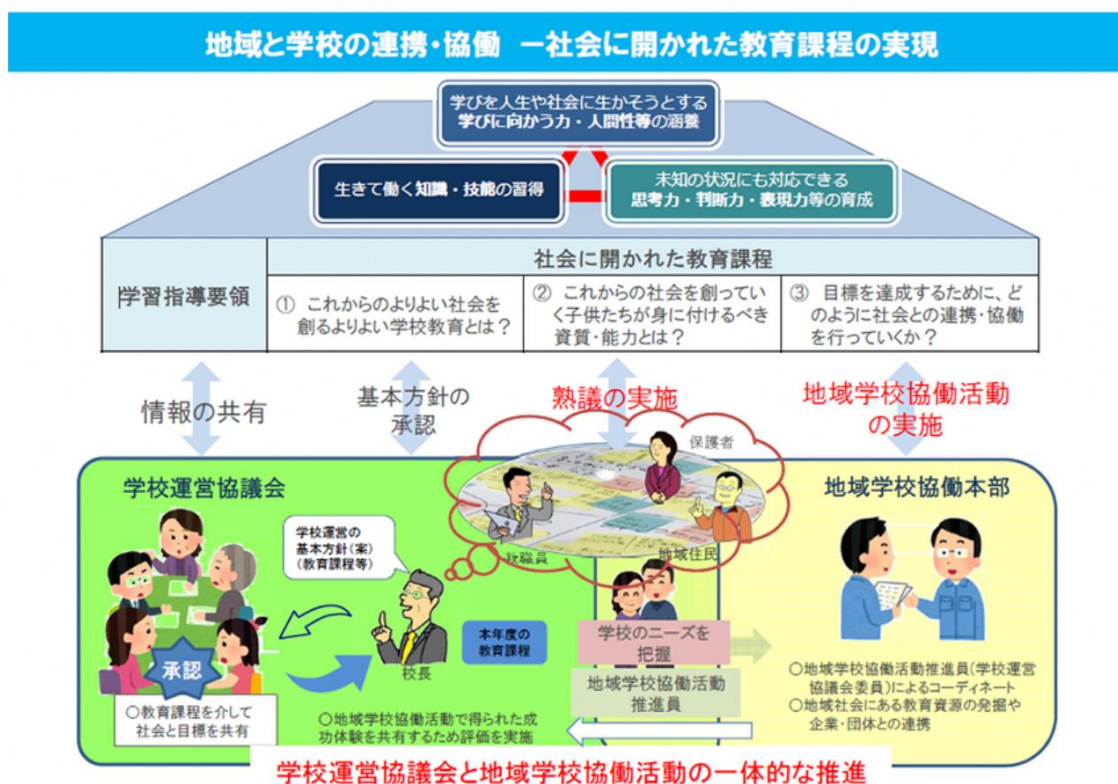


図4 社会に開かれた教育課程に向けて
(出典) 文部科学省(2021)

これに対応するかたちで、横浜市、そしてMM 本町小学校で展開されているしくみは以下のようなものとなっている(図5)。

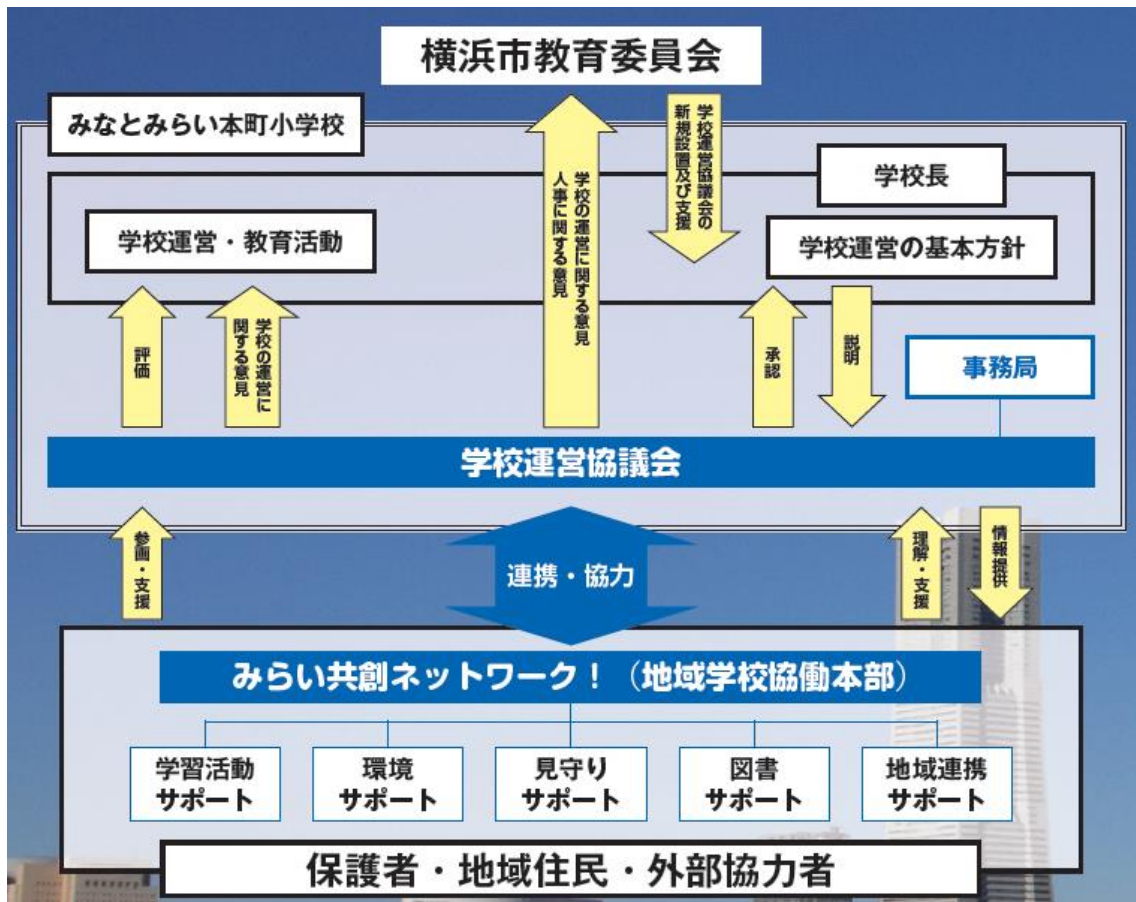


図5 みんなで支える ESD:コミュニティ・スクール&みらい共創ネットワーク！

(出典) みなとみらい本町小学校編 (2020)

図4と5を見比べてみると、地域学校協働本部と学校運営協議会が、学校と地域をつなぐしくみとしての機能を持っている点は共通している。図4のなかでは、【熟議の実施】の成果が、校長の理解を通して、【教育課程等】に整理・反映され、【学校運営協議会】の場で、【承認】され、【教育課程を介して社会と目的を共有】するという流れが図示されている。図5は組織図であるため、それぞれの組織がもつ機能や役割については詳述されていないが、MM 本町小学校の学校運営協議会には、地域学校協働本部の代表者も委員として参加しており、学校運営協議会と地域学校協働本部がダイレクトに接続している。さらに学校運営協議会の場には、校長・教頭をはじめとする管理職のみならず、校内のキープレーヤーとなる教員やPTAの代表者も参加しており、これらの当事者が直接的に協議会での対話に参加できるしくみなっている。

つまり、学校運営協議会の場が、「学校側（校長）から提供された情報を協議会委員が受け取り、委員の間で吟味する」ための会議の場としてのみならず、「学校（教員含む）・地域・保護者（PTA）」が協働して新たなアイデアを生み出す場となる構造を持っている。MM 本町小学校の学校運営協議会では、図4にある【情報の共有】【基本方針の承認】【熟議の実施】

が「学校（教員含む）・地域・保護者（PTA）」の間で実現していることに加えて、【学校運営の基本方針】および【教育課程を介して社会と目的を共有】することが、【承認】という一方向的な関わり方だけではなく、【協創】という双方向的な関わり方を通して実現されている。ここでいう協働・協創の具体的な事例については「(4) 実践」にて詳述する。

(3) 「協働 (coproduction)」とは

上記のような特徴を持つ学校運営協議会の活動を通じて、MM 本町小学校がどのようにESD スクール・マネジメントの「拡張」を実践しているのか、その具体例を見る前に、「協働」という概念を再確認しておきたい (Bovaird and Loeffler 2012; Ostrom 1996)。

近年、学校経営や教育行政の現場で「協働」という言葉が頻繁に使われるようになってきているが、公共経営論のなかではいわゆるパートナーシップ(partnership)と協働(coproduction)は異なる概念として使い分けられている。下図が示すように、パートナーシップとは、あるサービスの提供者間の協力関係を意味する(例：産学連携事業)。小学校と教育委員会が協力してよりよい教育を提供しようとする取り組みなどは、パートナーシップの良例ということになる。

一方、協働 (coproduction) とは、あるサービスの提供者と利用者(受益者)が一緒になって、共に (co) 公共的なサービスを創り出す (production) という協力関係を意味する(例：市民参加型の政策評価)。Bovaird and Loeffler (2012) は、協働によって、異なる立場にいるステイクホルダーが、互いの知見や資源を共有することで、より質の高い公共サービスが提供できるというメリットを、多くの実践事例をもって指摘している。学校・地域・保護者がアイデアを出し合ってより良い教育課程を創出しようとする「社会に開かれた教育課程」のための熟議、そしてそのような熟議を踏まえた教育活動の実践はこの意味での「協働」であると言える。

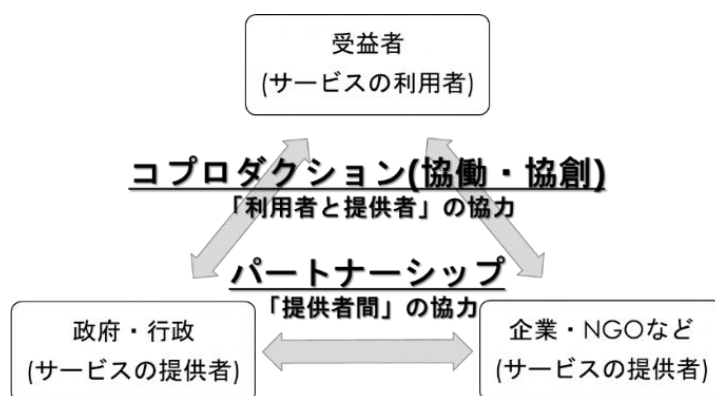


図6 パートナーシップと協働の違い

(出典) Bovaird and Loeffler (2012), Ostrom(1996) を参考に筆者作成

(4) 実践：学校運営協議会におけるロジックモデル・ワーク

①実践の概要

MM 本町小学校の学校運営協議会は 14 名のメンバーで構成されている。地域の自治会や地元組織、地元の社団法人などの地域住民を代表する 4 名、保護者の代表が 2 名、地域学校協働本部の代表者と放課後キッズクラブの代表者がそれぞれ 1 名ずつ、学識経験者として、地域の民間企業や市の関係組織、近隣の小中学校の校長、大学教員（筆者）が 5 名、そして MM 本町小学校の小正和彦校長である。ここに MM 本町小学校の先生方が事務局として毎回数名参加されている。

2021 年 11 月 27 日に行われた学校運営協議会において、60 分を超える時間が「ESD ロジックモデル」のワークショップに費やされることとなった。全 2 時間の会合時間のうち、前半の 1 時間程度で「11 月までの教育活動の報告」が行われ、併せて、児童と保護者を対象に実施されたアンケートの結果が、先生方の視点からの解釈と共に報告された。アンケートの作成やデータの分析、そして分析結果の解釈などについては『ESD BOOK feat.MM』に詳しいが、過去 3 年の試行錯誤の中でこれらの内部評価の質が着実に向上している点も特筆すべきポイントである。紙幅の都合上ここでは割愛するが、今年度も重点研究会の場で「C→D→A→P」のサイクル（図 2、3）が回っていたことを報告しておきたい。

②ワークの目的と運営上の留意点

前半の協議で学校の現状についての情報が共有されたのち、「協働型プログラム評価に向けてのワーク」が始まった。このワークの目的は以下のように説明されていた。

ESD プログラムを可視化したロジックモデルに基づき、本校では学校評価に取り組んできたが、今までは学校運営協議会委員の皆様には、評価結果に関してご意見をいただくことが多かった。そこで、ESD ロジックモデル改訂に合わせて、作成段階から委員の皆様よりご意見をいただき、ESD ロジックモデルに反映させていくことで、様々なステークホルダーが参加した「協働型プログラム評価」をより推進したい。（下線部は筆者；学校運営協議会当日配布資料より抜粋）

従来は「学校から協議会への情報提供」そして「協議会から学校への意見提供」というキッチボール的な関係性であったが、そこからさらにもう一歩進んで、ともに ESD の教育プログラムを作っていこうという呼びかけが読み取れる。

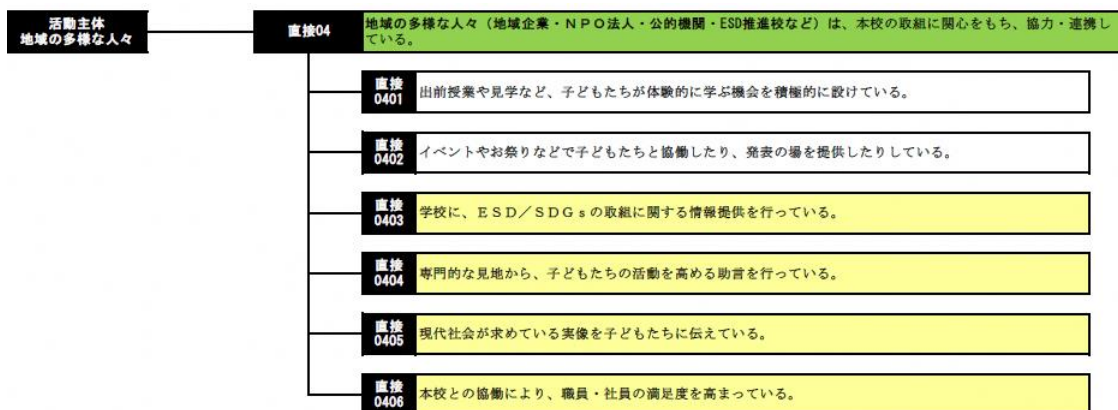
筆者は MM 本町小学校の先生方と共にこのワークショップのファシリテーターを務めた。この会議に先立って、先生方とワークの打合せを行ったが、その際に先生方と合意したのは以下の諸点である。

- 着座の会議方式ではなく、自由に歩き回りながら付箋にアイデアを書き出して、各自で模造紙に貼り出していく「立ち歩き方式」で行う。

- 貼り出された付箋の内容が全員で共有できるよう、一段落したところでファシリテーター（MM 本町小学校の担当教員）が全部読み上げる。
- 「誰が書いたか」に左右されないよう、付箋は無記名で書いてもらう。
- 必ず全員に書いてもらう（遠慮がちな方が「見るだけ」にならないように配慮する）。
- 全体としてあまり深刻な雰囲気にならないように気を付ける。「立ち歩き」をしながら参加者同士が気軽に雑談を交わせるくらいの、少しざわつきがあるくらいがよい。

以上のような実践は、既に多くの学校現場でも取り入れられている典型的な参加型のワークショップの手法であり、これ自体は特に目新しいものではない。今回特に重視したのは、「結論を急がないコミュニケーション」、すなわち、ワークの時間内に議論をきれいにまとめようとしないうこと、また、まとまらない状態を恐れないことである。たとえ参加型の形式を採っていても、時間内にまとめなければならないというプレッシャーがかかっていると、結論ありきの形式的なワークとなってしまう、一見ワークショップの形式を取っていても、本質的にはワークショップとしての機能を果たしていないというケースも実際には多々存在するためである。

一方で、「自由に議論して下さい」という丸投げ方式では議論がなかなか深まらず、表層的な意見交換のみで時間切れとなってしまうがちである。今回は、協議会委員にとっては既知である、MM 本町小学校の ESD ロジックモデル（資料 I. 2021 年度版ロジックモデル参照）のうち、「活動主体」が「地域の多様な人びと」である「直接アウトカム 04」を模造紙に拡大印刷し（写真 1）、「直接目的 04 の文言（直接目的として何を目指すべきか）」と「直接活動 0401~6 の内容（具体的な活動として何ができるか）」の二点について検討した。ワークショップ開始時点でのロジックモデルは以下のようなものであった。ワークを経た本報告書執筆現在、下記のロジックモデルは改訂中である。



③ワークの成果

ワークショップの成果として、特に興味深かったのは次の2点、すなわち、具体性と実効

性を伴った新たなアイデアの創発と、新たな提案に対する疑義によってもたらされた深いコミュニケーションである。

まず、直接目的 04 として現行のロジックモデルに掲載されている文言は、『地域の多様な人々（地域企業・NPO 法人・公的機関・ESD 推進校など）は、本校の取組に関心を持ち、協力・連携している』という一文であった。これは MM 本町小学校の教職員が考案した文言である。これに対して、「地域の多様な人々」を代表する参加者とともに行ったワークショップでは、「子どもが実際に何かできるまちにしたい」「子どもたちの活動が地域や大人を感化するようになるとよい」「そのためには地域と学校がつながる必要があるが、意外にダイレクトには繋がりにくいのが現状だ」「学校の活動と地域活動の橋渡しとなるような機会が必要なのでは」といったアイデアが提案された（写真1）。『地域の多様な人々』だからその視点――例えば、「どのようなまちにしたいか」といった「まちづくり」からの視点や「学校と地域の間には何らかの橋渡しが必要だ（ダイレクトには繋がりにくいのが現状だ）」といった現実的な視点――が導入されたことは、大きな収穫であったと言えよう。さらにこのような機会によって、これまで協議会委員という外部者・第三者的な立場から助言をしていたメンバーが、ESD ロジックモデルの策定に関わる「当事者」として自らを変容させることとなった。

また、これらの提案を受けて、それを実現するための直接活動の内容については、『SDGs デザインセンターや地元企業で、小学生たちが『社会』や『地域』に直接的に関わる機会を提供することができる』という発言が、関係機関の参加者からなされた（写真1）。SDGs デザインセンターや地元企業の当事者と協働することで、単なる意見や希望としての発言ではなく、実効性の高い現実的な提案として具体的な「場」が提供されようとしている。これが一つ目のワークショップの成果である。

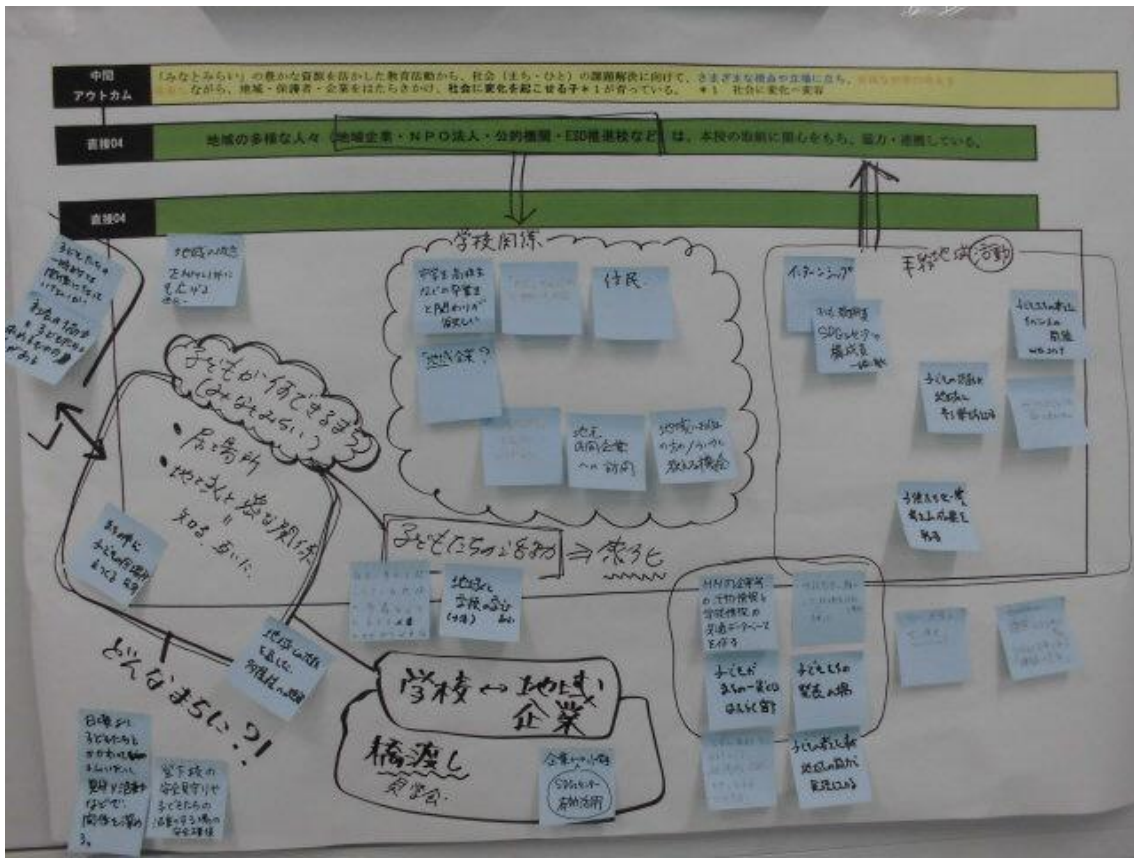


写真1 ロジックモデル

(出典) みなとみらい本町小学校・提供

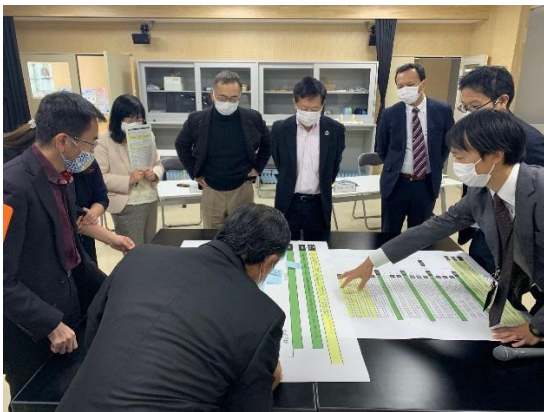


写真2 ロジックモデル・ワークの様子

(出典) みなとみらい本町小学校・提供

もう一つの重要な成果は、上記のような新しいアイデアが投入され、学校の外に新たな「場」が開かれそうになったことに対する不安や躊躇いの意見がきちんと表明されたことである。SDGs デザインセンターや地元企業からの機会提供を受けて議論が盛り上がったとき、委員のなかから、「まだ小学生の子どもたちが、ひとりひとりの子どもたちのことをよ

く理解しているわけでもない『会社』の大人たちのもとで活動するのはどうかと思う」、「小学生の子どもたちにとって『社会』に出るのはまだずいぶん先のこと、それを今から視野に入れる必要があるのだろうか」という趣旨の疑問が呈された。この発言がきっかけとなり、「子どもが社会に出るのはもうすぐ（10年はあつという間）なのではないか」、「知らない場所にでも、飛び込んでみると子どもは意外にいろいろなことをやってのけるのではないか」、「子どもたちの顔と名前を把握してくれている学校内での活動と、子どもたちが匿名化されてしまう会社での活動は大分違う」など、様々な意見が飛び交った。

ここで重要なことは、「立ち話」のような雰囲気であったからこそ賛否の意見が出しやすかったことである。挙手による発言であれば出されていなかったかもしれない意見も表明されていた可能性が高い。このようなやり取りによって、大人たちの間にも多様な視点があるということ、また、自分と異なる意見をもった個人がなぜ、どのような意図でそのような考え方をしているのか、といった異なる意見の本質についての相互理解が深まったと考えられる。また、この場ではこの点についての「結論」は出さなかった。しかし、「結論を急がない」という会議方針に照らすと、新たな活動の可能性とそれについての疑義が交換できた、意義のあるコミュニケーションであったと言える。

④「協働」の前提条件

印象的だったのは、新たな提案に対する不安を表明していた参加者が、解散後の帰り際、「はじめは不安を感じたが、会社の人たちとやり取りするうちに、向こうも真剣に考えてくれているんだなということが分かり、そういう活動も悪くはないのかなと思うようになった」という趣旨の感想を述べていたことである。ESD やキャリア教育の実践現場で、「校外での新たな活動を導入する際に、内外の関係者からの理解を得るのが難しい」という声をよく耳にする。この事例は、現象としては些細なことに見えるかもしれないが、「社会に開かれた教育課程」を実践する上での本質的な課題を示唆していると考えられる。

「教育課程を社会に開く」ということは、まさに、教育課程をめぐって多様な価値が学校現場に流入し、様々な衝突を生むということである。そして、異なる価値が衝突するところにこそ、新たな価値が生まれる可能性が潜んでいる。学校運営協議会のような場が、価値の衝突を前向きに受け止め、衝突を相乗効果に変換しながら、多様な関係者とともに教育課程を創発していく「協働」の場となるためには、ふたつの前提条件が必要となろう。

ひとつは、学校・地域・保護者のそれぞれが、大人同士も多様であるということを心から理解したうえで信頼関係を築くことである。そのためには「深いコミュニケーション」が不可欠となる。そしてもうひとつは、立場や価値観の異なる個人や組織が、上位のアウトカムを実感として共有することである。そのためにはプログラムの形成過程に「当事者」として参画することが求められる。地域資源の活用や地域との連携に基づく新たな教育プログラムの開発は、これらの前提条件を必要とする。

ではどこで、いつ、どのようにしてそのような前提条件を満たすことができるのか。今、求められているのはこの点の具体性、具体的な方法論であろう。MM 本町小学校の場合は、

協働型プログラム評価による ESD ロジックモデルの構築を学内に閉じず、学校運営協議会を通じて「拡張」することにより、ひとつ目の条件である「深いコミュニケーション」の場を創出した。また、開校以来、『ESD BOOK feat.MM』をはじめ、様々なかたちで ESD ロジックモデルを学校内外に公開することで、ふたつ目の条件である「上位アウトカムの共有」を図っており、併せて今年度の学校運営協議会におけるワークによって「プログラムの形成過程への参画」の可能性を拓いた。本質的なコミュニケーションやプログラム形成過程への参加の実感というのは一度の会合で深まるものではない。それゆえに結論を急がず、このような試みを継続していくことに意義があると言えるだろう。

3. 今後の展望——「情報交換の場」から「多様な教育機会の共創の場」へ

本報告書では、これまでの報告書の続編として、MM 本町小学校の ESD スクール・マネジメントの「拡張」に焦点を当てて報告した。一年目の「導入」、二年目の「展開」を経て、これまで学内で取り組んできた ESD ロジックモデルの作成ワークショップを、学校運営協議会の場で実践することにより、教育課程の構築を「社会に開く」という取り組みが、三年目を迎える今年度の新たな挑戦であった。

ある公共サービスの提供者と受益者が両者の垣根を越えて、共に (co) 公共サービスの「生産者」となる (production) ——この意味での「協働 (coproduction)」を実現させるためには、情報の発信者と受信者という垣根も同時に超える必要がある。「学校」から「学校運営協議会」へ多様な情報が提供され、「協議会」から「学校」へ忌憚のない意見が返され、そして「学校」はその意見を教育課程の形成に活かすという流れが滞りなく機能しているということも、もちろん重要なことである。しかし、「社会に開かれた教育課程」の実現を、「協働」という観点から試みるのであれば、「情報の提供(発信)と受信」を基礎とした関係性から、情報を議論の材料として共有し、その材料をもとに協働して教育課程を考案するという「共創」の関係へと歩を進めることが求められているのではないだろうか。学校運営協議会は厳選されたメンバーで構成されており、ひろい地域の全体を代表するものではないが、まずは学校運営協議会や地域学校協働本部などの新たなチャンネルが、教育課程に関わる本質的なコミュニケーションの「場」として機能することにより、地域に「教育課程を共創する」という意識が広がっていくことが期待される。

Bovaird & Loeffler (2012) が指摘するように、各地域には「資産 (asset)」がある。それを活かした教育課程を実現することは、ESD の概念を「開封する (unpack)」(UNESCO 2016) という考え方 (令和元年度報告書) にも通ずる。また逆に、広範に及ぶ地域の「資産」をどのように活かすのかを教科横断的に構想する際に、ESD 的な発想それ自体が示唆に富む手掛かりとなるだろう。加えて、今年度 MM 本町小学校が取り組んだ「拡張」の試みは、SDGs17 番目のゴール「パートナーシップで目標を達成しよう」の実践そのものであるとも言える。さらに言えば、「パートナーシップ」を越えて「協働 (coproduction)」で目標を達成しようとするこの試みは、17 番目のゴールを超越する試みであると言えるのかもしれない。

引用文献

- みなとみらい本町小学校編 (2019-2021) 『ESD BOOK feat.MM』
(<https://www.edu.city.yokohama.lg.jp/school/es/minatomiraihoncho/index.cfm/1,0,73,212.html> 最終閲覧日 2021 年 12 月 31 日)。
- 文部科学省 (2021) 『社会に開かれた教育課程の実現に向けて』 (<https://manabi-mirai.mext.go.jp/torikumi/chiiki-gakko/syakaini-hirakareta.html> 最終閲覧日 2021 年 12 月 31 日)。
- 米原あき (2021) 「SDG 教育目標にみる理念志向ターゲットの評価に関する一考察：測定可能性 (measurability) から評価可能性 (evaluability) へ」『日本評価研究』 21(2): 31-46。
- Bovaird, T., & Loeffler, E. (2012). From engagement to co-production: The contribution of users and communities to outcomes and public value. *VLUNTAS: International Journal of Voluntary and Nonprofit Organizations*, 23(4), 1119-1138.
- Ostrom, E. (1996). Crossing the great divide: Coproduction, synergy, and development. *World Development*, 24(6), 1073-1087.
- UNESCO. (2016). *Unpacking sustainable development goal 4 education 2030 guide*. UNESCO.

最上位目標

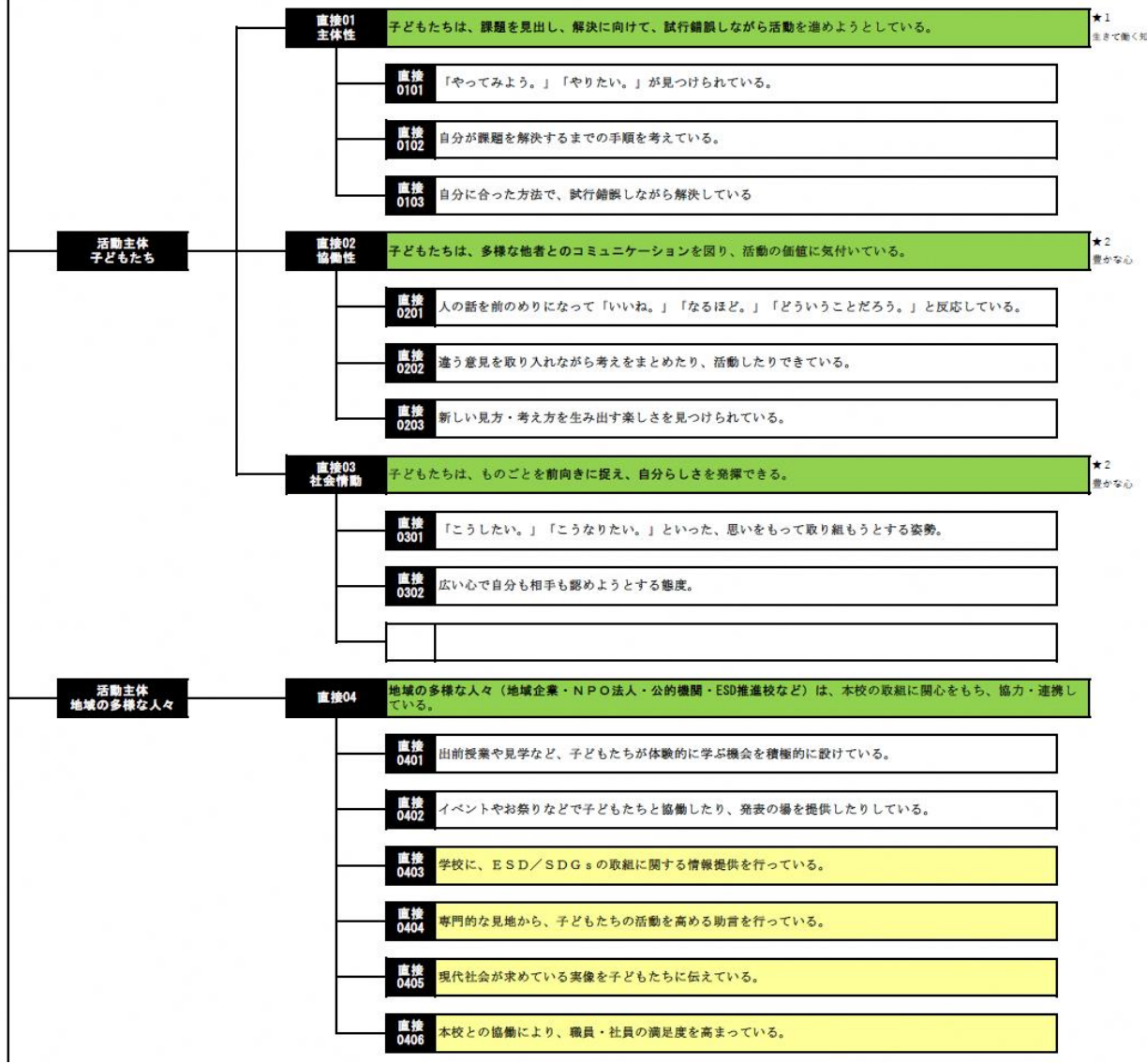
スーパーゴール 学校教育目標【「みな」と「みらい」を創る子】
 「多様な価値観が認められる」「多面的・多角的に物事を捉える」「問いを見い出して学び続ける」「まちに愛着をもつ」「豊かな心をもつ」の5つの資質を育成する。

上位目標

最終アウトカム 社会（まち・ひと）とつながり、多様な文化や価値観を取り入れながら広い視野で物事を捉え、現代社会における課題の解決に向けて行動できる、持続可能な社会形成を担うグローバルな人材が育成されている。

戦略目標

中間アウトカム 「みなとみらい」の豊かな資源を活かした教育活動から、社会（まち・ひと）の課題解決に向けて、さまざまな視点や立場に立ち、多様な他者の考えを共有しながら、地域・保護者・企業をはたらきかけ、社会に変化を起こせる子★1が育っている。 ★1 社会に変化＝変容





筆者注

注1) 上記★印のとおり、中期学校経営方針との関連性も意識したロジックモデルの改定が行われている。

注2) 「直接 04、05」の内容は、今回のワークを受けて、改訂中である。

資料 II. アンケート調査票（児童用）

問	設問	選択肢				
1	学校の学習で「やってみよう。」「やりたい。」が見つけられましたか。	どの学習でも、見つけられた	学習の内容によっては、見つけられた	どちらとも言えない	あまり見つけられなかった	全く見つけられなかった
2	自分で、学習の課題を解決するまでの計画を考えましたか。	どの学習でも、考えた	学習の内容によっては、考えた	どちらとも言えない	あまり考えなかった	全く考えなかった
3	学校の学習で、自分がかかる方法を見つけたり、試したりしましたか。	どの学習でも、見つけたり、試したりした	学習の内容によっては、見つけたり、試したりした	どちらとも言えない	あまりしなかった	全くしなかった
4	友達や先生の話聞くときに、「いいね。」「うーん。」「なるほど。」「どういことだろう。」など興味をもって聞いていましたか。	どの学習でも、興味をもって聞いていた	学習の内容によっては、興味をもって聞いていた	どちらとも言えない	あまり興味をもって聞いていなかった	全く興味をもって聞いていなかった
5	自分とは違う意見を取り入れて、活動を考えたり、考えをまとめたりしましたか。	どの学習でも、違う意見を取り入れて考えていた	学習の内容によっては、違う意見を取り入れて考えていた	どちらとも言えない	違う意見を、あまり取り入れなかった	違う意見を、全く取り入れなかった
6	友達や先生と、新しい見方や考え方を見つけることは楽しいと感じましたか。	どの学習でも、見つける楽しさがあった	学習の内容によっては、見つける楽しさがあった	どちらとも言えない	あまり楽しさが見つけられなかった	全く楽しさが見つけられなかった
7	自分が「こうしたい。」「こうなりたい。」という思いをもって取り組みましたか	いつでも「こうしたい。」「こうなりたい。」という思いをもって取り組んだ	活動によっては、「こうしたい。」「こうなりたい。」という思いをもって取り組んだ	どちらとも言えない	あまり思いをもって取り組んだことはない	全く取り組まなかった
8	ひろい心で自分も相手もみとめられましたか	どんな時でも、ひろい心で自分も相手もみとめていた	たまにひろい心で自分も相手もみとめていた	どちらとも言えない	あまりみとめることができなかった	全くみとめられなかった

筆者注

注1) 上記の質問票は高学年用。低学年用も内容は同じだが、文言と漢字が平易化されている。

注2) 今年度より、ペーパレス化とデータ処理の省力化を図るため、アンケート調査はロイロノートを活用してオンラインで行われることとなった（下記、参考画像）。



資料 III. 保護者-教職員アンケート調査結果

■学校運営に関する質問項目（全9問：保護者と教職員の回答に統計的有意差があったものに★）

(1) 学校は、地域・保護者と協働しながら教育活動を進め、子どもたちにまちの一員・社会の一員という意識を高めている。

(2) 学校は、様々な人とのかかわり（友達、異学年、地域人材等）を大切にされた教育活動を通して、多様性を理解するとともに、自他を大切に作る心を育てる指導を行っている。★(t=2.35, p<0.05, 保護者の方が強く賛同)

(3) 学校は、学習形態や学習方法などを工夫した分かりやすい授業づくりを目指し、個に応じた適切な支援をしている。★(t=3.07, p<0.01, 保護者の方が強く賛同)

(4) 学校は、体育など機会を活用して体力向上の取組を行い、子どもたちが運動に親しみをもてるようにしている。★(t=3.13, p<0.01, 保護者の方が強く賛同)

(5) (保護者) 学校は、持続可能な社会の担い手を育てるために、ESD/SDGsの視点を意識した様々な教育活動を行い、子どもの学びを高めている。

(5) (教職員) 学校は、職種や学年・教科の枠を超え、職員一人一人がESD推進にできることに取り組んでいる。

(6) 学校は、いじめの未然防止に努めるとともに、いじめと思われることがあったときには、すぐに対応して指導している。★(t=4.78, p<0.01, 教職員の方が強く賛同)

(7) (保護者) ご家庭は、学校だより・ホームページ・学校説明会などから、学校経営の方針や子どもの学びや活動を理解できている。

(7) (教職員) 学校は、教育活動の様子を、保護者や地域へ、積極的な情報発信に努めている。

(8) 教室環境（掲示物・衛生面など）は、子どもたちにとって学習や生活のしやすいものになりましたか。★(t=3.68, p<0.01, 保護者の方が強く賛同)

(9) 学校は、感染症対策を講じながら、教育活動に取り組んでいる。

■子どもの学びに関する質問項目（全6問：保護者と教職員の回答に統計的有意差があったものに★）

(1) 子どもたちは、学習の課題を解決するために、計画を考えながら学習していると、思われますか。★(t=3.09, p<0.01, 保護者の方が強く賛同)

(2) 子どもたちは、自分が分かる方法を見つけたり試したりして学習していると、思われますか。★(t=3.29, p<0.01, 保護者の方が強く賛同)

(3) 子どもたちは、友達や先生の話を書くときに、「いいね」「うーん」「なるほど」「どういうことだろう」と興味をもって聞いていると、思われますか。★(t=3.53, p<0.01, 保護者の方が強く賛同)

(4) 子どもたちは、違う意見を取り入れて活動を考えたり、考えをまとめたりしながら取り組んでいると、思われますか。★(t=2.11, p<0.05, 保護者の方が強く賛同)

(5) 子どもたちは、新しい見方や考え方を見つけることを楽しいと感じていると、思われますか。

(6) 子どもたちは、自分が「こうしたい」「こうなりたい」という思いをもって取り組んでいると、思われますか。

■学校運営に関する質問項目：結果グラフ抜粋

【資料①】 学校運営に関して（保護者・職員比較） ※ロジックモデル：直接06

新ロジックモデルにもとづいた指標によるアンケートを保護者（9月）と職員（12月）に実施。

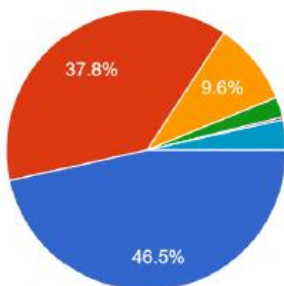
保護者からは全児童415人のうち、344人分の回答（回答率：約83%）。ただし、問8・9に関しては、11月土曜参観と12月語る会で、のべ173人分の回答。

職員は、21人の回答。

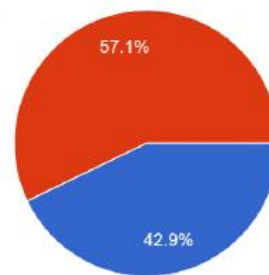
●学校運営に関すること

（1）学校は、地域・保護者と協働しながら教育活動を進め、子どもたちにまちの一員・社会の一員という意識を高めている。

《保護者》



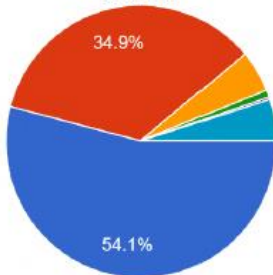
《職員》



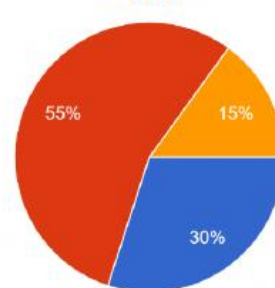
- そう思う
- ややそう思う
- どちらともいえない
- あまり思わない
- 思わない
- 分からない

（2）学校は、様々な人とのかかわり（友達、異学年、地域人材等）を大切にされた教育活動を通して、多様性を理解するとともに、自他を大切にする心を育てる指導を行っている。

《保護者》



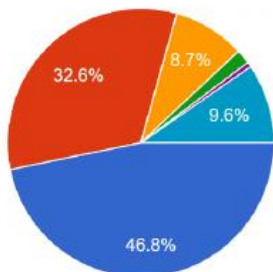
《職員》



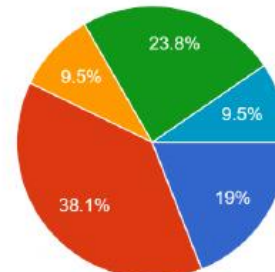
- そう思う
- ややそう思う
- どちらともいえない
- あまり思わない
- 思わない
- 分からない

（3）学校は、学習形態や学習方法などを工夫した分かりやすい授業づくりを目指し、個に応じた適切な支援をしている。

《保護者》



《職員》



- そう思う
- ややそう思う
- どちらともいえない
- あまり思わない
- 思わない
- 分からない

■子どもの学びに関する質問項目：結果グラフ抜粋

【学校評価】子どもたちの学びに関して（保護者・職員比較） ※ロジックモデル：直接01～03

保護者には、11月土曜参観ならびに12月みなとみらいを語る会後に実施し、のべ173人分の回答。
職員は、21人分の回答。

●お子さんやご家庭に関すること

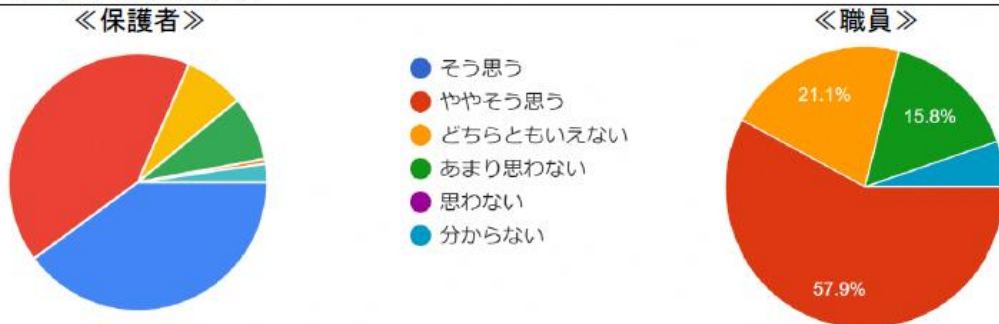
（1）子どもたちは、学習の課題を解決するために、計画を考えながら学習していると、思われますか。



（2）子どもたちは、自分が分かる方法を見つけたり試したりして学習していると、思われますか



（3）子どもたちは、友達や先生の話聞くときに、「いいね」「うーん」「なるほど」「どうのことだろう」と興味をもって聞いていると、思われますか。



第4章

本年度の横浜市ESD推進コンソーシアムの取組
(教育委員会としてのESD推進)

横浜市 ESD 推進コンソーシアム交流報告会

日時：児童生徒の部 2022年1月25日（火）26日（水）27日（木）
2月1日（火）2日（水）3日（木）4日（金）
教職員の部 2022年1月29日（土）13時～16時
会場：児童生徒の部 オンライン（Me e t）開催（市役所14階共用会議室14N1～3、14S1～2）
教職員の部 オンライン（Z o o m）開催（市役所18階共用会議室みなと1・2・3）

○ はじめに

今年度も、COVID-19 感染拡大防止のため、オンラインで実施した。児童生徒の部は、13:30～14:30（4日間）または、15:40～16:40（3日間）に3～4校が集まって実施した。参加は任意（よこはま子どもピースメッセンジャー※1及びこどもエコフォーラム※2ステージ発表校も含む）とし、事前に撮影した動画のみでの発表や視聴のみでの参加も可能とした。児童生徒や教職員、ESD推進関係者を合わせて1000名以上の参加があった。

交流報告会の流れ

- ①めあて
- ②各校の発表と質問・感想交流
- ③振り返り・まとめ

I 児童・生徒の部（1月25日～2月4日）

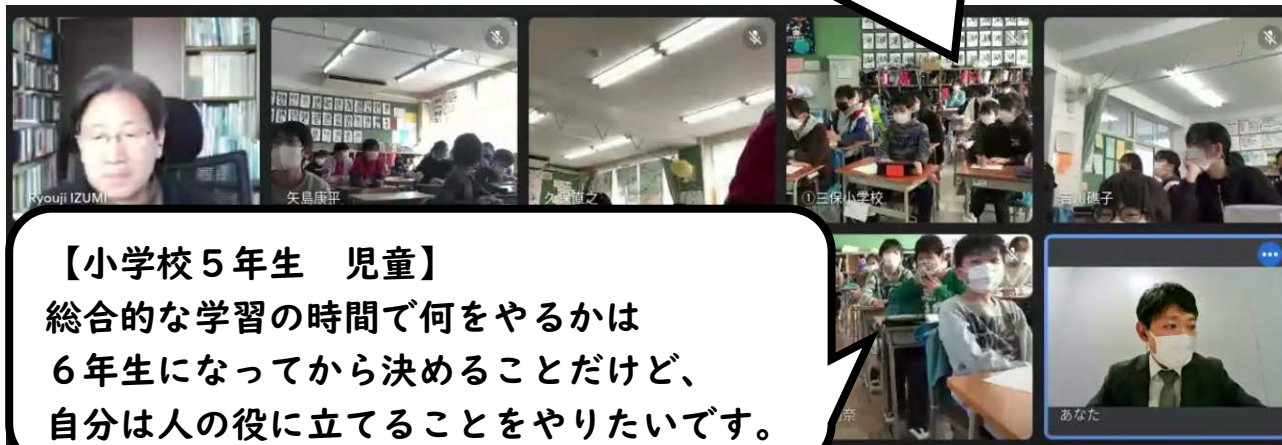
各回、動画発表校を含めて3～4校で、「発表と質問・感想交流」を行った。率直な質問や意見のやり取りをする中で、同じようにSDGsの達成を目指した活動をしている仲間がいることや自分たちの力でも地域や社会に影響を与えられることを実感していた。そして、SDGsの達成に向けて行動し続けることが大切だという思いを多くの児童生徒が発言したり、振り返りに表現したりしていた。

また、よこはま子どもピースメッセンジャーから、国連やユニセフとの国際平和交流についての報告を聞いた児童生徒は、自分たちの地域だけでなく、国際的な広い視野で考えることの重要性にも気づき、これからの自分たちの活動を見直すきっかけになっていた。

①めあて

- ・他の学校の発表と自分たちの取組を比べて、感じたことや考えたことを表現する。
- ・今までの学習活動や今日の交流報告会を通して大切にしたいことを見つける。

【小学校6年生 児童】
来年は、総合的な学習の時間で
どんなことをやりたいですか？



【小学校5年生 児童】
総合的な学習の時間で何をやるかは
6年生になってから決めることだけど、
自分は人の役に立てることをやりたいです。

※1 よこはま子ども国際平和スピーチコンテストで市長賞を受賞した児童生徒4名

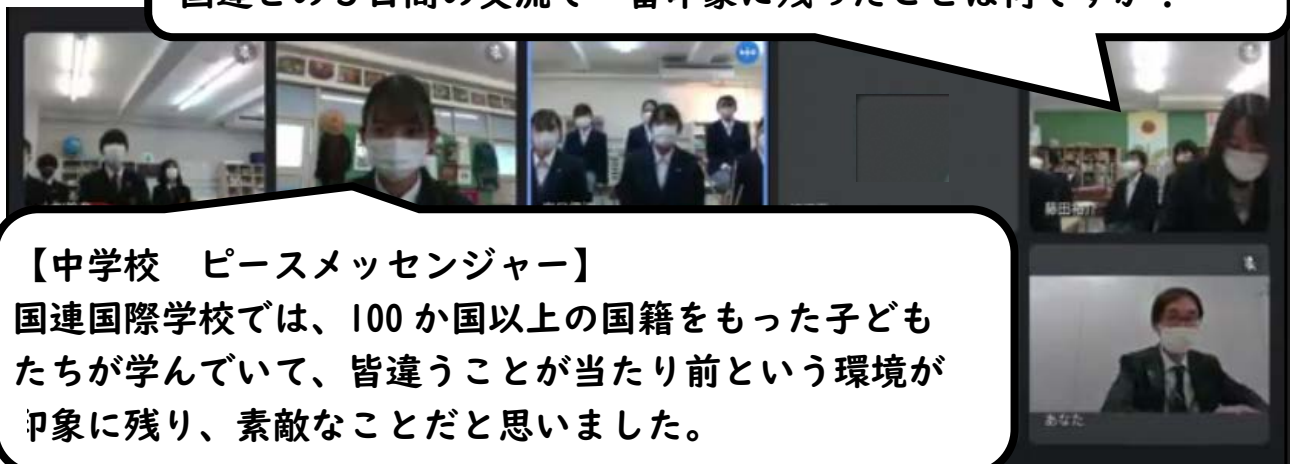
※2 児童生徒がSDGs達成に向けて行った活動を発表する場

【各回の参加校と発表テーマ】

日 時	学校名	発表テーマ
1月25日(火) 13:30~14:25 本牧南小動画発表	幸ヶ谷小学校 5-1	「THE 滝の川」 ~世界(自分、友だち、地域)とつながる5-1~
	大門小学校 6-3	「CO2削減のためにできることに取り組もう」 「食品ロス」「クリーン作戦」「節水」「節電」「再生紙」
	榎が丘小学校6年 日枝小学校6年	「国連やユニセフとの国際平和交流」 ~よこはま子どもピースメッセンジャーの活動~
1月26日(水) 15:40~16:35	新井中学校 生徒会	「SDGsとつなげた生徒会、図書館、園芸の取組」
	南希望が丘中学校 保健委員会	「ユニクロ服のチカラプロジェクト」
	小田中学校 生徒会	「誰にとっても居心地の良い学校へ」 ~創立30周年式典への取組から~
1月27日(木)① 13:30~14:25	幸ヶ谷小学校 5-3	「自分友達社会の命を救え!!」 ~Save Your Neighbor~
	荏田西小学校 6年	「ENDs(荏田西小版SDGs)を考え、 よりよい社会をつくろう」
	東高等学校 ACCU国際交流 事業参加者	「ACCU国際交流事業~インド教職員との交流~」
1月27日(木)② 13:30~14:25 本牧南小動画発表	荏田西小学校 5年	「図工 読書感想画考えた未来」
	鶴見小学校 5-2	「STG's~持続可能な鶴見川を目指して~」
2月1日(火) 15:40~16:35	市ヶ尾中学校 生徒会	「市中2大プロジェクト」~『木のストロープロジェクト&服のカプロジェクト』
	中和田中学校 生徒会	「届けよう、服のチカラプロジェクト」
	上飯田中学校 3年	「国連やユニセフとの国際平和交流」 ~よこはま子どもピースメッセンジャーの活動~
	本牧中学校 生徒会	「SDGs11 住み続けられるまちづくりを達成の ための本牧中の取組」
2月2日(水) 15:40~16:35	西柴中学校 3年	「SDGsについての調査研究」
	西本郷中学校 生徒会	「私たちにできること」 ~地域防災や緑化運動~
	中川西中学校 生徒会	「SDGs活動報告」 ~ギリシャの中学生とのオンライン交流~
	六浦中学校 1年	「国連やユニセフとの国際平和交流」 ~よこはま子どもピースメッセンジャーの活動~

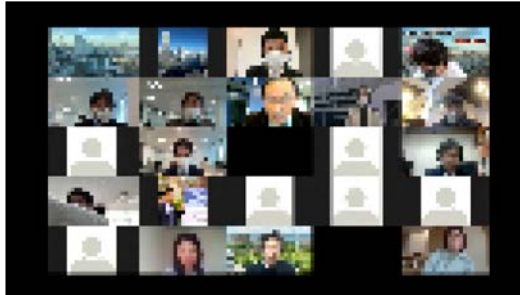
日時	学校名	発表テーマ
2月3日(木)① 13:30~14:25	みなとみらい本町 小学校 3-1	「住み続けられる街づくりについて」
	大門小学校 3-3	「いろいろな植物からたくさんの色をつくりだそう」
	荏田西小学校 4年	「荏田西小学校のバリアフリーを パワーアップしよう」
2月3日(木)② 13:30~14:25	大門小学校 5-2	「廃棄される食品を減らそう」 ～生産・加工・流通・消費の観点から～
	三保小学校 6-5	「伝えよう！残そう！わがまちふるさと三保」 ～持続可能な三保のまちをめざして～
2月3日(木)③ 13:30~14:25	羽沢小学校 5-1	「地球を守ろう！はぎわSDGsプロジェクト」 ～エコバッグづくり～
	三保小学校 6-4	「伝えよう！残そう！わがまちふるさと三保」 ～持続可能な三保のまちをめざして～
2月4日(金)① 13:30~14:25	永田台小学校 4-1 4-2	「生ごみ大変身大作戦」 ～生ごみコンポスト活動～
	三保小学校 6-2	「伝えよう！残そう！わがまちふるさと三保」 ～持続可能な三保のまちをめざして～
	南本宿小学校 SDGs委員会	「教育水田を中心にしたSDGsの活動」
	恩田小学校 5-2	「5-2 発見隊！～恩田のみりよくを伝えよう～」
2月4日(金)② 13:30~14:25	幸ヶ谷小学校 5-2	「貧困の国の命を救う」 ～寄付活動や1ミニッツ動画作り～
	三保小学校 6-1	「伝えよう！残そう！わがまちふるさと三保」 ～持続可能な三保のまちをめざして～
	三保小学校 6-3	「伝えよう！残そう！わがまちふるさと三保」 ～持続可能な三保のまちをめざして～

【中学校 生徒】
国連との5日間の交流で一番印象に残ったことは何ですか？



【中学校 ピースメッセンジャー】
**国連国際学校では、100か国以上の国籍をもった子ども
 たちが学んでいて、皆違うことが当たり前という環境が
 印象に残り、素敵なことだと思いました。**

II 教職員の部（1月29日）



市内だけでなく、全国から 80 人以上の参加申込みがあった。ワークショップと実践報告、グループ協議の構成で実施した。

本日の流れ（前半）	
13:00	横浜市教育委員会 挨拶
13:05	ワークショップ
	「私たちの未来を共に再構想する」を共に再構想する
	講演20分 グループ協議40分 全体共有・まとめ30分
	東京都市大学 教授 佐藤 真久 氏
	東洋大学（インド工科大学） 教授 米原 あき 氏
	東京大学大学院 教授 北村 友人 氏
	上智大学 教授 丸山 英樹 氏
14:35	休憩 10分

本日の流れ（後半）	
	実践報告「ESDによって引き出すことのできた価値」
	<発表5分 質疑応答5分>
14:50	横浜市立幸ヶ谷小学校
15:00	横浜市立小田中学校
15:10	横浜市立東高等学校
	グループ協議
15:25	グループ協議
15:50	クロージング
16:00	閉会

1 ワークショップ

(1) 「UNESCO 報告書『私たちの未来を共に再構想する』から想像する 2050 年の教育」

～未来の教育に「何を継続すべきか、何をやめるべきか、何を新たに考案すべきか」～

東京都市大学教授 佐藤 真久 氏

東洋大学教授 米原 あき 氏

東京大学大学院教授 北村 友人 氏

上智大学教授 丸山 英樹 氏（UNESCO 報告書サマリーの監訳者）

UNESCO 報告書のような英文の報告書は、欧米では原文で読まれるものの、和訳がないため、日本ではなかなか理解が広がらない。こうした背景から、丸山氏の研究チームと上智大学の丸山ゼミナールを中心に翻訳チームが編成された。ワークショップでは、丸山氏による監訳に関する講演とグループ協議、オンラインツールを活用した全体共有を行った。

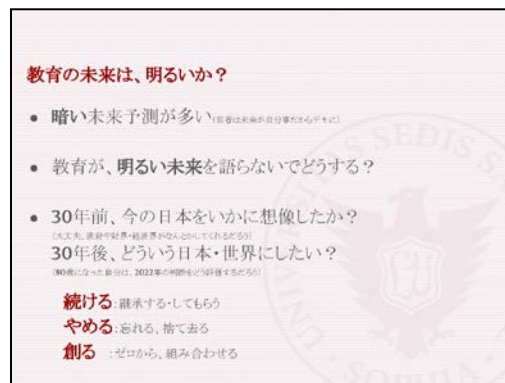
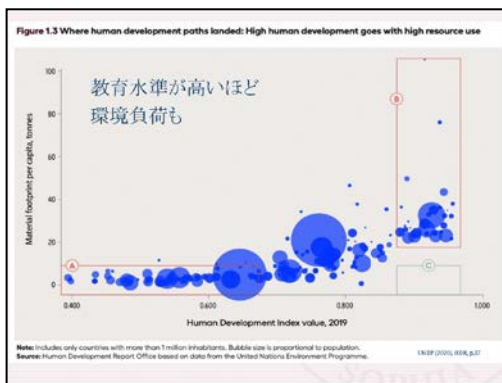
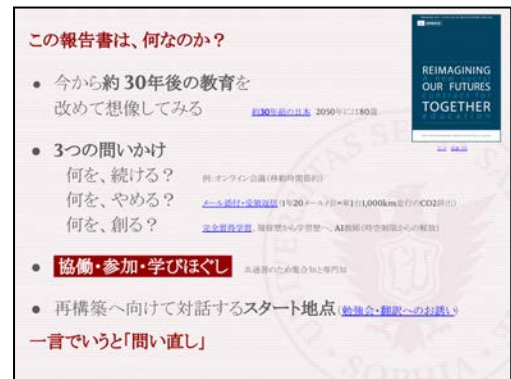


①丸山氏による講演

この報告書は、一言でいえば「問い直し」のきっかけを与えようとするものである。具体的には、今から約30年後の教育を改めて想像してみることや2050年に向けた「3つの問いかけ」（「何を、続ける?」「何を、やめる?」「何を、創る?」）、未来を創るにあたってのポイントとして「協働・参加・学びほぐし」について述べられている。そしてこの報告書は、教育を再構築するにあたって、対話するスタート地点であるとしている。

またこの報告書のタイトルには、教育、社会契約という言葉があり、「教育」とは「私たちの営み」であり、「社会契約」とは「私たちの集団生活そのもの」と示しており、包括的で理想主義的な主張をしている。

関連して、教育水準が高いほど、環境負荷が高い傾向があることが分かっている。環境負荷を抑えつつ、30年後の日本・世界を展望し、教育が「明るい未来」を語る事が大切である。



②グループ協議

～未来の教育に「何を継続すべきか、何をやめるべきか、何を新たに考案すべきか」～10人程度のグループで、テーマについて協議した。

③全体共有

オンラインツールを利用して、各グループで話し合われた内容について共有した。

全体共有の画面



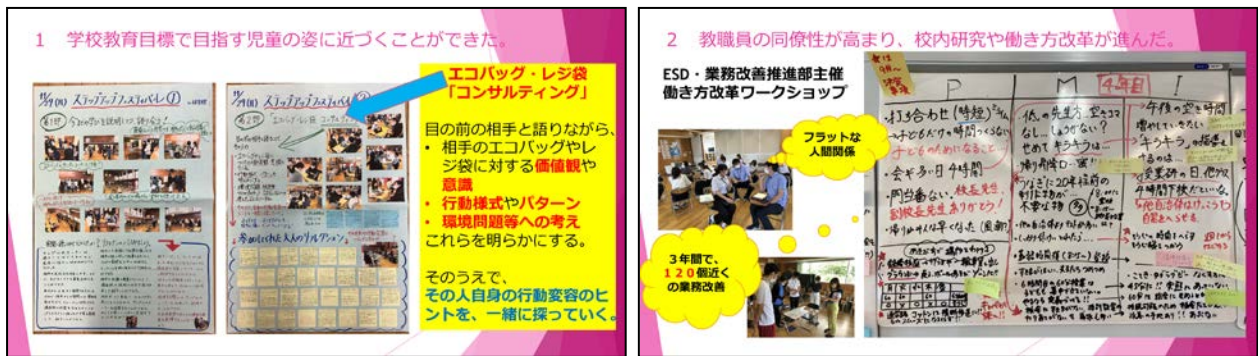
参加者からは、「色々な立場の人が同じフィールドに立って、3つの問いかけについて話し合えてよい機会となった」や「何をやめるのかが出てこず、既存の文化に慣れてしまっていることに気づき、危機感をもった」、「『続ける』『やめる』『創る』が、ESDの『見なおす』『つなげる』『変わる』『地域で、世界へ』と掛け合わされ、見え方が立体的になった」といった声が寄せられた。

2 実践報告「ESD実践によって引き出すことができた価値」

(1) 横浜市立幸ヶ谷小学校主幹教諭 宮崎 大

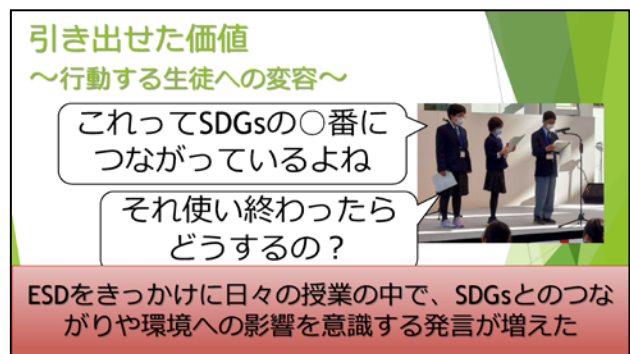
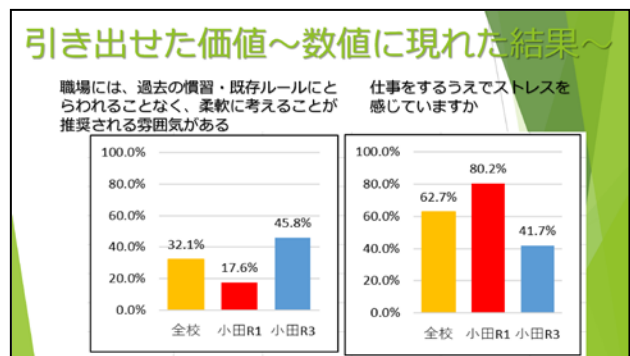
総合的な学習の時間で、テーマ設定や活動の展開をしていく上で「自分たちの行動が未来を変えていけるか」という「ESD、SDGsを意識」している。また、「学習のゴールの姿」として「発表会で立派に発表する」「想いを地域の人に伝える」というゴールではなく、様々な人々の行動変容を見据えたアウトプットを目指している。例えば、児童のエコバッグ・レジ袋の取組では、これまで学習してきたことを踏まえ、保護者や地域の人と対話の中で、相手の意識や価値観はどこにあるのかを考え、行動変容につながる意見交換を行う「コンサルティング」を行っている。また、リフレクションの研究を進めていて、教職員はフラットな人間関係を大切にしている。例えば授業研究の在り方も、経験年数によって、指導する・されるという関係ではなく、自由に「問い」出し合いながら、気づきや次にチャレンジをしてみたいことなどを共有している。校務分掌にESD推進部を新設し、3年間で約120に及ぶ業務改善につなげたりすることができた。

このような実践により、ESDの実践によって引き出された価値は、学校教育目標で目指す児童の姿に近づくことができている。教職員の同僚性を高め、教職員による主体的な働き方改革を進めることができた。



(2) 横浜市立小田中学校長 池田 ゆかり

ESD推進をきっかけに「このままでいいのか?」「これを本当に続けることができるのか?」といった視点で、日々の教育活動や業務を見直している。意識調査によって「職場には、過去の慣習・既存ルールにとられることなく、柔軟に考えることが推奨される雰囲気がある」と感じている職員の増加や「仕事をするうえでストレスを感じている」職員が減少する傾向が結果として出ている。こうした職員の意識改革が生徒の変容に繋がり、生徒からは「SDGsとのつながり」や「環境への影響」を意識する発言が増えたり、校外学習では、これまでの活動を生かしながら、「誰一人取り残さない」や「SDGs達成の担い手育成につながる」視点を取り入れることで、大きな負担なくESDを推進することができている。



(3) 横浜市立東高等学校教諭 平澤 香織

イーストタイム（「探求」の時間）を活用した教科横断型学習において、SDGsの達成に向けた取組を進めている。外部機関による校内・校外での学習の機会を積極的に設定し、自己の使命を自覚させるとともに、幅広い豊かな人間性と高い論理性、リーダーシップを育むことを目指している。

留学生と交流する「Glocal Citizenship Camp」では、「SDGsや世界の諸問題に対する興味や関心」の設問において、7以上（最高値は10）をつけた生徒が30%（実施前）から87%（実施後）に増加した。また「コミュニケーション手段としての英語の重要性」の設問では、7以上をつけた生徒が68%から99%となり、英語のみならずコミュニケーション手段としての語学の重要性に気付くことができた。その他、サステナブル研究部による企業と連携した商品開発や職員と生徒によるACCU国際交流事業におけるインドの教職員との交流、ESD推進校の小学校とのオンライン交流で、小中高の学びの繋がりに気付く実践などを行っている。



3 グループ協議

4人程度で実施した。限られた時間であったが、感じたことを表現したり、意見交換をしたり、情報共有をしたりすることができた。

参会者からは、「うまくいっていることだけでなく、学校全体の雰囲気作りについて意見交換ができた」や「ESDに型はないという言葉を受けて、学校の状況に応じてESDを推進すれば良いと勇気づけられた」といった声が寄せられた。

グループ協議の流れ（例）

- ①自己紹介とこれまでの交流報告会の感想の交流
- ②SDGs達成の担い手育成につながる取組紹介・意見交流
- ③取り組んできたことで引き出すことのできた価値や課題 など

4 クロージング 東京都市大学教授 佐藤 真久 氏

本日は、横浜市のESD推進校だけでなく、市外からも多くの方々に出席いただいた。この場を借りてお礼を申し上げたい。

今回の交流報告会は、ユネスコ報告書の「3つの問いかけ」から始まった。「新しいものを作ることは「ありたい姿を描くこと」につながると考えられる。再構築に向けて対話するスタート地点である」という話があったが、学校の中で対話を継続することが大切である。

これまでの横浜市におけるESD推進において、横浜市が掲げる「見直す」「つなげる」「変わる」「地域で、成果へ」のキーワードや「ホールスクール」「学校の活性化」「チャレンジ」といった言葉があった。新しい社会を、学校の中で、児童生徒だけでなく教職員も関わりながら、みんなで創っていくとすることで、これからのチャレンジにもつながると考えている。

世の中が、余裕がなくなっている状況の中で、正しさの衝突が起きている。だからこそ、コミュニケーションをし続ける姿が重要であり、相手を尊重しながら、新しいものやことを創り上げていくことを大切にしたい。

本年度のSDGs達成の担い手育成（ESD）推進校

横浜市立永田台小学校	横浜市立西本郷中学校
横浜市立幸ヶ谷小学校	横浜市立西柴中学校
横浜市立市ヶ尾中学校	横浜市立中尾小学校
横浜市立東高等学校	横浜市立相沢小学校
横浜市立三保小学校	横浜市立本牧中学校
横浜市立羽沢小学校	横浜市立小田中学校
横浜市立日枝小学校	横浜市立中川西中学校
横浜市立恩田小学校	横浜市立旭小学校
横浜市立荏田西小学校	横浜市立本牧南小学校
横浜市立南本宿小学校	横浜市立飯島小学校
横浜市立みなとみらい本町小学校	横浜市立牛久保小学校
横浜市立大門小学校	横浜市立新井中学校
横浜市立中和田中学校	横浜市立南希望が丘中学校

(2021年度指定26校)

本報告書の執筆・作成協力（第1章以外）

東京都市大学大学院 環境情報学研究科 教授 佐藤 真久
(横浜市ESD推進コンソーシアムコーディネーター)

東洋大学社会学部社会学科 大学院社会学研究科 / インド工科大学
(横浜市ESD推進コンソーシアム委員) 教授 米原 あき

編修・発行 横浜市教育委員会事務局学校教育企画部小中学校企画課
横浜市ESD推進コンソーシアム